

林下曹洞宗における相伝史料研究序説（二）

永平寺所蔵史料（下）

飯塚大 展

一 はじめに

本考察は、前稿^①に引き続き、永平寺において師資の間に秘密伝授された相伝史料、特に切紙史料を取り上げたいと思う。江戸時代前半における切紙相伝の状況を今後も考察したいと考えており、現在では永平寺には現存しないが、当時において相伝されていたであろう切紙の全体像を推察してみたい。今回は、駒澤大学図書館所蔵『室中切紙謄写』の翻刻紹介を中心にしたいと思う。

二、室町時代後期成立の切紙について

林下曹洞宗相伝史料としては最古層に属し、比較的まとまって見出される遺存例として、愛知県渥美町常光寺（寒巖派普濟寺門派、潔堂義俊、一四八九 開山）所蔵の、文明十三年（一四八二）より延徳・明応（一四八九～一五〇二）期、さらに天文三年（一五三四）に至る間に書写された二十一通の切紙挙げることができる^{②③}。

寒巖派とは、寒巖義尹（一二二七～一三〇〇）を祖として、永平寺・総持寺・大乘寺・永光寺等の支配とは直接的関係を持たず、独自の展開をした曹洞宗の一派である^④。同派は、大慈寺を中心に筑後地方に展開した一派と、普濟寺を中心に東海地方に展開した一派とに大別される。義尹には、嗣法の弟子で主だった者が四人あった。斯道紹由（？～一三〇一）、鉄山士安（一二四六～一三三六）、愚谷常賢（一二六九～一三三九）、仁叟紹熙（？～一三六四）がそれぞれであり、その鉄山の法系は東洲至遠 梅巖義東（一三六〇～一四二三）華蔵義曇（一三七五～一四五五）と次第する。静岡県浜松市普濟寺は華蔵を開山とし、引間城主吉良義真を開基として、正長元年に建立され、永享四年に寺地を現在地に移したとされる。華蔵示寂後、普濟寺は嗣法の弟子達により一期一年の輪番で住持を勤める輪番制がしかれることになった。その住持有資格者が十三派十四ヶ寺の住職経験者であったことから、普濟寺十三門派の呼称がある。その普濟寺十三門派の一

つ潔堂派の拠点寺院が渥美半島の尖端(愛知県渥美郡渥美町)に位置する常光寺である。常光寺の開山は潔堂義俊であり、開基は烏丸資任とされる。以下に、常光寺に所蔵される切紙の目録を掲げてみたい。

(1)「一、鐵山和尚五位分別祕訣(端裏)」

五紙に分断されており、二七三×三二二 二七三×三七六 二七三×三七〇 二七三×三七八 二七三×五六三 ミリメートル。本文途中に「日本正應六年巳八月一五日記。今日日本明應七年戊午八月十六日記之。是秀拝」とあり、奥書には「于時明應三年甲刃十二月 日、傳受之」とある。「潔堂派参和目録」に「于明應三年甲寅拾二月廿日、於普濟禪寺之丈室、忠和尚今附授是秀畢。光中(花押)」とあり、この時一括して伝授された切紙の一つが、この切紙の本となった物であり、更にそれを明應七年の段階で筆写した物と考えられる。鐵山土安による五位解釈を示す物であるが、寒巖派における五位の位置づけをなす上で、他の常光寺蔵の五位関係の切紙と共に貴重な史料と言える。

(2)「三、見性成佛之一大事」

三五四×二六九(ミリメートル、以下同)。奥書に「吉文明十四年壬丑九月二十三日、於東海道三川渥美縣和知山潔堂老書之(花押)」とある。

(3)「又三、見性成仏一大事」

二八二×四六〇。奥書に「吉文明十四年壬丑九月二十一日書之(花押) 潔堂か、樹王衲授宗補者也」とある。この切紙は、樹王は秀から處山宗補に授与されたもの。傍線部は宗補に授与する際に添え書きされたと思われる、本文は潔堂義俊の筆と考えられる。内容は(2)とは異なる。

(4)「四、室中之大事」

二九八×四〇七。本文冒頭に、「當派室中之大事、於和知山、義俊示是秀」とあり、末尾に「義俊(花押)」とある。内容の面から注目すべきは、禅宗の依経を「首楞嚴經」とし、「當派之参学帳者、從楞嚴外不可有之」とする点にある。又、潔堂派には参すべき公案の目録があり、その公案理解は「五轍」(即ち「入頭・攀揚・悟上・傳受・行李」に拠っていたことがわかる。同派の「首楞嚴經」伝授については、常光寺に伝授印可状と言ふべき物が蔵されており、これによつて確認できる。「當山開祖真積、大事々々 透徹首楞明妙光、圓通五々充家常。堪興永平九傳道、培本養枝藥樹王。右賢樹王首座楞嚴傳受畢。長享元年二月十四日、和知山菴六十四翁義俊(花押)」。この伝授の偈については、「普濟寺前住牒」にも注記として見える。

(5)「五、三滲漏之大事」

二八三×四六八。奥書に「自佛祖次第相承、而至道元・寒巖・鐵山・東州・梅岩・華藏・潔堂、々々授光中畢(花押)。今光中授是秀畢」とある。傍線部は、後に添え書きされた物と思わ

れる。したがって、潔堂が光中に与えた切紙を、光中は是秀へと附授したと考えられる。又、「此是奥相之璽傳也」とあり、

(6)(7)の切紙との関係が推定される。

(6)「六、傳法奥蔵一紙三清淨」

二七六×三一八。潔堂の花押あり。この切紙は、普濟寺十三門派においては特に重要視され、印可状の意味合いを持つ物である。普濟寺蔵の「嗣法弟子・戒法弟子次第写」(室町時代写力)に、「東寺奥蔵一紙・奥蔵一紙・傳法奥蔵一紙」と見え、この三種が嗣法の際に伝授された物と思われる。

(7)「九、奥相一紙」

二七五×三三七。奥書に「此是從東洲和尚衣法、同奥蔵一紙伝授、今傳受義曇。々々今為一樹枝授義俊。々々今傳受是秀畢。義俊(花押)」とある。この切紙も(6)同様嗣法の弟子に伝授された物と思われる。同内容の切紙に、命天派の祖である命天慶受に華蔵が伝授した「奥相一紙(宿禰寺蔵)」がある。その奥書に次のように見える。「此是從東洲和尚之法衣、同此奥相一紙、東和尚傳附義曇、曇和尚今傳附慶受畢。嘉吉元年辛酉十二月廿日夜半子時相承之。朱印二顆(花押)」。同じく宿禰寺蔵の「出家作法」にも奥相一紙がともに伝授された記事が見える。「正平二年丁未二月十二日、奥相一紙、具義和尚職嗣、所授於至遠實也」。内容の面からは、寒巖義尹が道元の正嫡であり、その正系を寒巖 鐵山土安 東洲至遠 梅巖義東 華蔵義

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

曇とする点が注目される。この主張の根拠となったと思われる物

に、普濟寺蔵の華蔵義曇宛「梅巖義東嗣書」がある。上記の法系が記されており、又、「佛祖命脈、證契即通、義曇即通。日本應永丙戌、現海蔵義東。朱印二顆(花押)」とある。

(8)「十、佛祖眼目之大事」

二七五×二〇一。潔堂の花押あり。

(9)「十一、八卦之圖・徳城禪師之御作」

三四七×五一五。奥書に「徳城禪師之御作也。義曇禪師傳受俊和尚付与光中、々々付与是秀也。大日本國遠江州濱松庄普濟禪寺、皆文明十三稔庚丑八月一日(花押)」とある。この花押は潔堂の物であり、傍線部は後に書き添えられた物と思われる。常光寺蔵の「潔堂一派参和目録」に「于時文明十三年辛丑八月一日、俊和尚今附授光中畢。義俊(花押)」とあり、恐らくこの時幾つかの切紙とともに伝授されたと考えられるからである。中世の曹洞宗の教学における易学の影響は極めて大きな物がある。「五位」の解釈においては勿論であるが、易学それ自体を切紙や語録抄等に取り込んでいるのである。普濟寺十三門派においても、華蔵義曇から龍澤派の龍澤永源に附授された「易圖相傳之血脉」(岡崎市万松寺蔵)がある。これによれば、「右此易圖相傳之血脉者、五十六代法王之傳來。我今為汝永源付囑畢。敢莫令断絶也。于時嘉吉二年壬戌正月十九日、於普濟寺丈室而傳之。曇華蔵示。朱印二顆(花押)」と見え、華蔵義

曇派下に易圖が相伝されていたことがわかる。

(10)「十五、杖拂竹篋之寸尺、同袋之寸法」

二八七×四五二。奥書には「文明十四壬子九月二十一日(花押)」とある。主杖・竹篋・私子の寸法としつらえ、及び法衣袋・御

大事袋(戒法・嗣法・血脉)の寸法としつらえを簡略に記す。

(11)「十七、五位」

二七六×二七八。奥書に「義俊授是秀畢」とある。潔堂派内における「五位」関連の切紙の一つ。易学の大極・兩儀・四像・八卦等の術語が用いられている。

(12)「一八、五方・五智・五体・五輪之惣圖」

三五七×六〇二。義俊・光中・是秀の署名と花押あり。奥書に「于時明應七年戊午八月十有八、謹是秀傳寫之」とある。図には彩色が施されている。

(13)「廿、血脉圖相之大事」

三〇八×四〇二。奥書に「于時明應三年甲寅十二月二十日、竺印老示是秀畢」とある。

(14)「廿一、傳受之次第」

三三〇×四四四。本文には「傳受道場莊嚴之次第」とある。奥書に「皆明應三年甲寅二月廿日、於普濟禪寺、是秀書之」とある。「委者在別書」とあることから、傳受についての詳細を記した物が別に存した物と思われる。

(15)「廿三、知死期大事」

二八九×三六八。本文には「達磨大師之秘法口訣靈傳紙」とある。又、奥書には「今義俊授是秀、於和知山、(花押)」と見える。

(16)「卅一、王子之配立」

二九三×三八一。「應仁二年孟秋日」とあるが、他の切紙とは異なり、伝授関係を示す記載及び署名・花押等がなされていないことから、疑問が残る。内容は「王子五位」であり、「偏正五位」との相応関係を示す。

(17)「偏正五位大事」(以下は端裏に整理番号なし。順不同)

二八二×三五七。本文には「偏正五位圖」とあり、奥書に「於和知山義俊老衲示是秀畢」と見える。

(18)「二句之偈血脉」

六九一×二八一。二紙縦縫ぎ。奥書に「皆日本寛正六年乙酉九月五日伊勢国飯高郡大黒田郷同傳受之、皆日本文正元年丙戌三月廿七日義運傳受之、皆日本延徳三年辛亥二月一八日同是秀之」とある。(19)の相承次第と考え合わせると、ここに見える義運は、普濟寺十三門派の一つ月窓派の祖であり、西来院(浜松市)開山である月窓義運を指すと思われる。従って、是秀は潔堂派の切紙以外にも他派の切紙も相伝していたことがわかる。又、裏書きに「常光寺芳久用之」とあるが、芳久は常光寺九世参室芳久のことであり、「潔堂一派之参和目錄」に「皆慶長拾庚戌年林鐘朔日、於常光寺真前、祥君今附授芳久畢。祥

君（花押）\維時元和七辛酉仲春廿八日、於丈室、芳久今附授天察畢。芳久（花押）と見える。この記事によれば、芳久は恩海祥君から伝授を受け、明山天察に相伝している。

(19)「観音二句相承之偈」

七五九×二九八。二紙縦縫ぎ。奥書に「延徳三年辛亥二月一八日」とある。又血脈相承次第の末尾に「谿岳 東海 義運 是秀」とあり、本切紙が(18)同様月窓義運から伝授された物であることを示す。更に鶏岳は普濟寺十三門派の一つ谿岳派の祖であり、宝鏡寺（山梨県都留市）開山の谿岳永金を指し、同様に東海は東海派の祖であり、妙嚴寺（愛知県豊川市）開山の東海義易を指すと思われる。

(20)「天神血脉相承」(仮題)

卷子。五紙をつなぐ。一三八×三六二 一三八×三六二 一三八×七六一 一三八×三七九 一三八×四九一。奥書に「天神血脉相承。仁治二年辛丑三月廿七日\長祿三年己卯八月二十五日\應仁二年戊子三月二十七日\文明十三年辛丑十月三十日\明應七年戊午八月廿八日\是釋子秀傳畢」とある。

(21)「手印大事」

一〇七二×三三四八。奥書に「吉天文三年甲午二月十八日、於常光丈室、是秀傳授俊德畢也」とある。俊德とは常光寺六世山翁俊德を指す。この日付を有する資料が外にも常光寺に蔵されている。「受戒作法」「菩薩戒作法」がそれである。

上記の切紙の中から、一例として「知死期之大事」を取り上げてみたい。前近代、特に中世という時代、仏教者にとつて、その死は個人的な範疇を越えてより社会的な意味を持つていたと思われる。禅者としてのあるべき終焉の迎え方が求められ、瑞祥や奇特をも含めて、善きものでなければ、その人となりが全否定されかねない情況にあった。事実、禅宗に関連するところでは、『沙石集』巻十(末)の「臨終目出千人々」として見える、栄西、荣朝、藏叟朗普、法心房、蘭溪道隆、聖一国師等の記事を見ても、臨終の意味は極めて大きかったことを知ることができる。以下に掲げる「知死期之大事」は、自らの死期を悟ることが、禅僧にとって以下に重要であったかを推察させる史料である。

「廿三、知死期大事」

達磨大師之秘法口訣密傳紙

纔覺玉池無滴瀝、次於波底取神光、無常須臾體頭鼓、得數方知幾日也。

漢土之第六南能和尚、最上乘秘密法也。為師嫡々相授而到洞山和尚。又和朝之元和尚、代々相傳而到義曇、々授俊、々授中、々授秀、法器者也。道心堅固而傳此偈畢。右不信非器量、莫傳授此法。若傳授之時、於堂塔佛前、跏趺合掌礼師了、可受。傳授了、礼拝。師資之礼拝。雖三世隨順、無器之者、不可傳。雖不三世隨順、法器之者、何不傳哉。此時傳授無師、販墮

在地獄矣。此法可修様、先七日以前、若三日之間、加行用心、或坐禪、或讀經・誦咒・禮拜、日數之燒香、日數之花・燈明不斷、無睡寐足而可行者也。

一、十二月晦日、以子時可行。偈云、聽體頭鼓者、檢明年大小月、并日數拳展^{シテ}兩手掩^{シテ}双耳。以左右指^{シテ}鼻^ト牙^ト頭上、其聲似鼓。月日時數打^レ之時、無聲、知定業期本^{ナリ}。以三度為限。偈云、玉池無滴瀝者、不慮之外得病。垂涎口中、塗指端見之、若無沫泡者、可知定期也。偈云、波底取神光者、以指峰指^レ目時、眼光如星散、若無光者、可定期也。

右於^ニ長日^ニ不斷用心不^レ緩^ル、隨^レ時秘^{シテ}為^レ秘。臨終^ノ日、心可^レ試^レ之。以是眞實之道心者云也。此外何^ノ善惡之可^レ起^ス一念無^{。又}不^レ起^ニ一念^者、一切衆生之處^ニ無^レ益^{。無}益^{、半}眼之光明云。有起^ハ飯^ニ無起^ニ、々々^ハ飯^ニ有起^ニ、々々^ハ無起^ハ眞無^{。無}起^有起^眞有^{ナリ}。此^ノ時^ノ相^是、々々^ハ相^非、々々^ハ相^是。不^レ知^ハ是^相非^{、不}知^ハ非^相是^{。掃}是^相非^{ナリ}、掃^ハ非^相是^{。用}是^不知^ハ是^相非^{、用}非^不知^ハ非^相是^{。此}時不識上^云。亦復不識上^ニ不^レ至^物看^ニ。此^ノ密傳者、從^ニ七仏以來^{宗承}來^マ、何^ノ僧伽難提和尚^下、依^テ無^ニ法器^者、為^ニ去後^{達磨}面^壁少林^ニ、而現^シ諸法^ヲ、末世之大法器^ニ相承^{スト}云々。

今義俊授是秀、於于和地山、

(花押)

この切紙の成立時期であるが、「參話目録」の記事及び「見性成佛之大事」に、「皆文明十四年壬丑九月二十三日、於東海道三川渥美縣和知山潔堂老書之(花押)」とある事から、文明十三、四年前後と考えられる。

面山瑞方(一六八三—一七六九)は、『洞上室内断紙揀非私記』においてこの切紙を「疑眞言僧之新添也」として批判している。

達磨大師知死期法斷紙

面山謂、此知死期法、則道家仙術者之所行、而非佛法也。圖悟禪師廣錄有破胎息論、實其邪義。萬松從容錄中、評之。榮西興禪護國論、亦破之。宗門中必勿^レ用。今斷紙附會印呪者、疑眞言僧之新添也。題達磨大師、誑惑之甚。是故附之揀非。

面山は、「達磨大師知死期法」切紙を批判する根據として、圖悟克勤「破胎息論」(「破妄傳達磨胎息論」)、萬松老人「從容錄」第九六則、榮西「興禪護國論」を挙げている。

怕臘月三十日憶惶、競傳歸眞之法。除夜望影喚主人翁。以卜日月聽樓鼓、驗玉池眼光、以爲脫生死法。眞誑譴閭閻、捏偶造窠。胎高人嗤鄙。復有一等、假託初祖胎息說、趙州十二時別歌、龐居士轉河車頌。遞互指授密傳行持。以圖長年。及全身脫去。或希三百歲。

(圖悟克勤「破妄傳達磨胎息論」大正蔵四七・八〇九下、八一)

（同上）

宋西（一一四一—一二二五）は『興禅護國論』第五門において、「達磨大師知死期偈」の真偽を問題としている。すなわち、仁安三年（一一六八）四月、第一回の渡宋で明州に到着早々の頃、広惠寺の知客との問答に、以下のように見える。

又問曰、我日本国有達磨大師知死期偈、真偽如何、知客答曰、所喻之法、乃小根魔子妄撰其語也、夫死生之道、在吾宗本以去來生死平等、初無生滅之理、若謂知其死期、是欺吾祖之道、非小書乎、久聞日本国仏法流通、幸達吾師須奉筆語、然人有華夷之異、而仏法總是一心、一心懺悟唯一門、金剛經所謂應無所住而生其心也、欲知源流請垂訪及、當一一相聞、応知祖師之道、非小乘知見所能測度也、云云、

（大正蔵八〇・一〇上）

とある。宋西在宋当時の禅林では、既にこの広惠寺の知客の言に見るように、達磨に仮託された偽説との評価が一般的であつたと推定される。

しかしながら、宋西が「達磨知死期之偈」が真説かどうかを疑問視した背景には、それが恐らく当時の顕密僧によつて広く受容されていた事によるのではないかと考える。このことを示す史料として、院政期成立（保延十一年 一一四五）の「達磨和尚秘密偈」（高山寺蔵）があり、同種のもの

のが金沢文庫にも収蔵されている。高山寺所蔵の史料は、末木文美士氏によつて初めて紹介された史料である。⁽⁶⁾

「達磨和尚秘密偈」（高山寺蔵）

達磨和尚秘密偈云、纔覺玉池無滴瀝、次於波底取神光。無常須聽體頭鼓、得數方知幾日亡。

雲州修行者善慶三語云、以テ先年ノ比マ、大宋国ノ船頭、雖在俗也ト即称シテ法号マ、名テ曰ノ範勝ト、通シテ達磨宗マ、道心堅固アリ、即渡テ鎮西ニ、欲ニ伝ムト此ノ偈マ、依テ無ニ其ノ機、空ク終ニ三箇年マ、於是ニ鎮西ノ陽尊聖人、而問フ其ノ要マ、仍テ範勝適得テ機マ、伝フ陽尊ミ々々伝門人陽円ミ、々々伝叡山ノ源範ミ、々々伝求法僧善慶、々々伝良深、々々伝澄仁、々々伝有西、々々伝勝尊、々々伝基舜、矣、深ク収テ函底ニ、勿伝ト他門ニ、別在相承印信云々、口伝云、先檢テ十二月朔日マ、子ノ時ニ誦ミ阿弥陀經マ、念仏百返セリ、而文ニ聽頭鼓ト者、檢ハ明年ノ大小月ノ日數畢テ展ノヘテ二ノ手ヲ掩フニ一ノ耳、以テ左右ノ指ノ峰ヲサキキ、互ニ打テ頂ノ上マ、其ノ声ノ似テ鼓ニ、數テ曰ノ打ニ之マ、以テ無ラム音、曰フ知シ定期ト、三度為限ト、又玉池無滴者、不慮ニ得ニ病マ、唾ヲ溢テ口中ニ、塗テ指ノ端ニ見ヨ之マ、若無クハ泡沫者、可知定期也、又波底取光者、以テ指ノ峰マ、指セ目畔マ、見ニ如シ散ラ星マ、若不然者、可知定期ト矣、範勝之定限無違、陽尊又無違云々。保延十一年甲申十一月十五日伝受了。

また先の質問が宋西によつて発せられた疑問であることを

考慮するなら、その出処は叡山天台の所謂「口伝法門」とも推定される。果たして、『溪嵐拾葉集』巻八十六「知死期法事」に、次のように見える。

一、達磨四句偈云云、同証道歌云云、一山家大師御伝云云、従行表和尚伝、

一、慈覚大師御伝云云、従法全和尚伝、已上以達磨四句偈爲本也云云、口伝別有也、

問、達磨伝外別有知死期法乎、示云、一伝云、死期近付之時、

眼光先達云也、夜陰之時、灯明与暗所皆黄色見也、死期不幾也、

暗所皆成黄所事者、黄泉先相也云云、尋云、名黄泉意如何、示

云、命根中有時者也、(大正蔵七六・七七九下)

同巻にはさらに「断抹磨苦相事」「苦楽一如事」「炎字事」

「生死一如事」「本無生死事」「西行利口事」「禅家終焉不飲水

事」「臨終加持作法事」等の死に関する種々の口伝を収載する。

林下曹洞宗においては、室町時代以降積極的に「達磨大師知死期法」を依用し、独自の展開が見られるが、一例として大安寺所蔵「達磨知死期切紙」を以下に挙げる。

兼知死期秘事、達磨和尚之偈曰、

纔^ニ覺^テ玉池^ヲ無^シ滴瀝^ニ、次^ニ於^テ波底^ニ取^ル神光^ヲ。無常^ハ須^ク聽^キ

頭^ツ鼓^ヲ、頭^ツ鼓^ヲ數^ヲトモアリ、頭^ツ鼓^ヲ數^ヲ得^テ數^ヲ方^ニ知^ル幾^ハ日

亡^スト^{コトヲ}。聽^キトハ、頂^ツキ^ヲ打^テ聲^ヲナケレバ、必^ズ可^ク死^スコトヲ

知レリ。修行者善慶⁽⁸⁾語曰、大宋國般頭⁽⁹⁾、渡シ守リノコト也

雖^モ在^リ俗^ノ跡^ニ、稱^ス法^ノ号^ヲ、佛法^ニ心^ヲヨスル也、言^フ範^ノ勝^ト、通^ス達

磨^ノ宗^ヲ。道心堅固⁽¹⁰⁾、誰^モハ^ン々々^ニ傳^フエ又^モ也。即^チ渡^テ鎮^ニ西^ニ欲^スレ

傳^フ此^ノ偈^ヲ。依^テ無^キ其^ノ機^ヲ、コ^トテモ誰^モ傳^フエ又^モ也。空^ニ經^ニ

三^ノ个^ヲ、於^テ是^ニ鎮^ニ西^ニ陽^ヲ尋^フ、人^ノ名^也、聖^ノ人問^フ其^ノ要^ヲ、仍^モ範^ノ勝

適^チ得^テ機^ヲ傳^フ陽^ヲ尋^フ、々々傳^フ陽^ヲ圖^ニ、人^ノ名^也。自^レ來^リ忝^ニ已^ニ來

代^々相^ニ承^レ之^ヲ、不^レ傳^フ他^ノ人^ヲ。口^ノ傳^云、先^ニ檢^シ十二^ノ月^ヲ晦^ノ日^ヲ

時^ニ奉^レ念^ス無^量壽^ノ佛^ノ宝^ヲ、阿^ノ弥^ノ陀^ノ宝^ヲ念^ス佛^ノ事^也。百^ノ返^ノ誦^ス之^ヲ、

文^ニ聽^キ頭^ツ鼓^ヲ數^ヲ者、檢^シ明^ノ季^ノ大^ノ小^ノ月^ノ日^ノ數^ヲ、畢^テ展^テ三^ノ手^ヲ掩^シ二

耳^ヲ、此^ノ左^ノ右^ノ指^ヲ端^ヲ以^テ奉^レ打^ニ頂^上。其^ノ聲^似鼓^ノ、數^日釈^トトハ、

日^ノカズ^ノカズエヤウ也、打^レ之^ヲ以^テ無^キ音^ヲ日^ヲ知^ル定^ノ期^ヲ。爲^ス三^ノ度

限^一、頭^ツ三^ノ度^ヲ打^テ也。又、玉池^{トハ}、唾^シテツバキヲ也。

無^シ滴^ノ瀝^ノ者、不^レ慮^レ得^テ病^ヲ、唾^シ溢^シ口^ノ中^ニ、塗^シ指^ヲ端^ニ見^レ之^ヲ。若

又^モ波^ノ底^ニ無^シ神^ノ光^ノ者、以^テ指^ヲ端^ニ「^ハ」^ナリ^ハ、如^シ散^ノ星^ノ、目^ノボシ

ノコト也。若^シ不^レ然^ル者、思^フ定^ノ期^ヲ矣。範^ノ勝^云、定^ノ限^無レ^レ違^ハト

是^ヲヨリ定^メコウト知^ル也。陽^ヲ尋^ノ定^ノ期^無レ^レ違^ハト。從^テ右^ヲ始^メレ^レ之^ヲ打

ハジムルコト也。右^ノ様^ニテ打^テ始^メル也。又云、波^ノ底^{トハ}、眼^ノ也。

玉池^{トハ}、唾^也。從^テ達^ノ磨^ノ秘^ノ密^{々々}。

知^ル死^ノ期^ノ法^ヲ次^ニ第^ニ。伏^シ以^テ六^ノ道^ノ衆^ノ生^ヲ、無^レ始^メ已^ニ來^ニ、沈^ニ輪^ノ生^ノ死^ヲ、無^量劫

煩^悩被^テ障^ハ、不^レ知^ル生^ノ死^ノ本^ノ源^ヲ。知^レル^ハ是^ノ名^ノ佛^ヲ。迷^レ是^ノ衆^ノ生^ト

云。悲^シ哉、我^等者、本^ニ住^シ本^ノ覺^ヲ真^ノ如^ノ都^ニ者、無^レ明^ノ煩^悩縁^ノ緣^ニ被^レ

誘^{サシヤド}出^デ已^{コノ}來^カ、三界・二十五有、懸^{カケ}網^ミ、受^{ウケ}火刀^カ刀^カ、三魔^{サマ}、苦^ク梵語也。此^{コノ}ヲイテ骨卸也。被^カ迫^セ死^シ本源。何^{ナニ}レ^ニ季^キ時^ジ日^{ジツ}、不知^{シラ}、爰^{コノ}本朝第一高祖傳教大師渡唐之時、修禪寺道遂和尚奉^{ホウ}值^チ、此^{コノ}相^{サウ}承^{シユウ}。知^チ死期^{シキ}法業^{ホウゲツ}。飯朝^{イハササ}之後、我^ガ山^{ヤマ}為^{ナリ}佛^{ブツ}法^{ホフ}弘^{コウ}行人^{コウジン}、記^キ之^ヲ云々。忝^{カタク}此^{コノ}秘法^{ヒホフ}七十以後^{ナナジウイノチノチ}、非^ヒ臨終^{リンシウ}開^キ眼^{ガン}弟子^{トシ}者^ハ、相^{サウ}構^{コウ}々々不^フ受^セ之^ヲ。若^シ非^ヒ其^{コノ}機^キ、授^{オウ}此^{コノ}秘法^{ヒホフ}者^ハ、不^フ信^{シン}問^{モン}々々、三^{サン}寶^{ホウ}佛^{ブツ}神^{シン}變^{ヘン}當^{トウ}罰^{バツ}。可^カ趣^{ソウ}三^{サン}惡^{アク}道^{ダウ}也^{ナリ}。仍^{オウ}此^{コノ}秘法^{ヒホフ}可^カ信^{シン}、々々、實^{ジツ}此^{コノ}法^{ホフ}者^ハ、三^{サン}世^セ諸^{ショ}佛^{ブツ}、亦^{モト}祖^ソ師^シ先^{セン}德^{トク}內^{ナイ}證^{シユ}不^フ思^シ議^ギ也。可^カ秘^ヒ々々、穴^{アナ}賢^{ケン}々々。爰^{コノ}不^フ定^{テイ}、境^{キョウ}何^{ナニ}、季^キ何^{ナニ}、月^{ゲツ}何^{ナニ}、日^{ジツ}何^{ナニ}、或^モ誦^{ソウ}經^{キョウ}誦^{ソウ}真^{シン}言^{ゴン}、唱^{テウ}念^{ネン}佛^{ブツ}、遮^セ三^{サン}惡^{アク}法^{ホフ}、修^{シュ}善^{ゼン}法^{ホフ}、只^{シテ}偏^{ヘン}發^{ハツ}無^ム上^{ジョウ}菩^{ブツ}提^{テイ}心^{シン}、出^{シュツ}離^リ要^{ヨウ}道^{ダウ}、可^カ嚙^{カウ}開^{カイ}悟^{ブツ}得^{トク}脫^{ダツ}旨^シ。此^{コノ}法^{ホフ}於^レ傳^{ヘン}者^ハ、生^{シユ}死^シ自^ジ在^{ザイ}無^ム碍^{アイ}也。真^{シン}實^{ジツ}目^メ度^{タク}法^{ホフ}也。於^ニ末^{マツ}法^{ホフ}鈍^{ドン}根^{コン}愚^ウ癡^チ者^ハ、尤^{モト}不^フ可^カ習^{シユ}覺^{ケツ}此^{コノ}秘^ヒ法^{ホフ}也。偏^{ヘン}不^フ思^シ議^ギ也。不^フ可^カ得^{トク}也。言^{ゴン}語^ゴ道^{ダウ}斷^{ダン}也。若^シ傳^{ヘン}之^ヲ者^ハ、此^{コノ}書^{ショ}行^{コウ}住^{ジュウ}坐^サ臥^{フイ}可^カ隨^{ズイ}身^{シン}也。呼^フ、有^{アル}レ^ル由^ユ哉^{ナリ}。穴^{アナ}賢^{ケン}々々。

知^チ死^シ期^キ法^{ホフ}則^{スナハチ}次^ジ第^{ダイ}、季^キ末^{マツ}極^{キョク}月^{ゲツ}也。晦^{クワイ}夜^ヤ大^{ダイ}ツ^ツゴ^ゴモ^モリ、夜^ヤ半^{ハン}也。可^カ行^{コウ}也。先^{セン}觀^{カン}音^{オン}經^{キョウ}三^{サン}卷^{クワン}、次^ジ心^{シン}經^{キョウ}廿^{ジツ}一^{イツ}卷^{クワン}、次^ジ尊^{ソン}勝^{ショウ}陀^ダ羅^ラ尼^ニ七^{シツ}返^{ヘン}、次^ジ慈^ジ救^{キウ}咒^{ジュ}七^{シツ}返^{ヘン}、次^ジ火^カ界^{ケイ}咒^{ジュ}七^{シツ}返^{ヘン}、次^ジ一^{イツ}字^{ジツ}金^{キン}輪^{リン}咒^{ジュ}七^{シツ}返^{ヘン}、次^ジ念^{ネン}佛^{ブツ}千^{セン}返^{ヘン}、次^ジ坐^サ禪^{ゼン}、然^{シテ}後^{ノチ}金^{キン}剛^{コウ}合^{カウ}掌^{ショウ}、後^{ノチ}、以^{モツテ}二^ニ兩^{リウ}方^{ホウ}手^テ、兩^{リウ}方^{ホウ}耳^ニ強^{キョウ}押^{オシ}、去^キテ讀^{ドク}心^{シン}經^{キョウ}、念^{ネン}佛^{ブツ}十^{ジュウ}念^{ネン}唱^{テウ}、然^{シテ}後^{ノチ}兩^{リウ}方^{ホウ}定^{テイ}惠^ヱ、指^{サシ}以^{モツテ}レ^ル八^{ハツ}、初^{ハツ}月^{ゲツ}ヨリ・一^{イツ}・二^ニ・三^{サン}・四^シ・五^ゴ・六^{ロク}・七^{シツ}・八^{ハツ}・九^ク・十^{ジュウ}・十一^{ユイジ}・十二^{ジュウニ}打^{ヒキ}響^{キョウ}音^{オン}聞^{クワン}也。何^{ナニ}レ^ニ同^{ドウ}如^ニ如^ニ鼓^コ聞^{クワン}時^ジ吉^{キチ}也。其^{コノ}中^{ナカ}、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

不^フレ^ル鳴^{ナウ}月^{ゲツ}在^{ザイ}者^ハ、死^シ後^{ノチ}可^カ定^{テイ}。頭^{ダウ}鼓^コ法^{ホフ}ト云^{イハ}事^ジ、師^シ弟^{テイ}相^{サウ}對^{タイ}、委^イ細^{シユ}、可^カレ^ル有^{アル}口^{コウ}傳^{ヘン}。聊^{リョウ}尔^ニ不^フ可^カ示^シ者^ハ也。可^カ秘^ヒ々々。

片^{カタ}岡^{カウ}山^{サン}八^{ハツ}、京^{キョウ}在^{ザイ}リ。山^{ヤマ}ザ^ザキ^キ近^{キン}キ也。達^{ダツ}磨^モ大^{ダイ}師^シ示^シ聖^{セイ}德^{トク}太^{タイ}子^シ、聖^{セイ}德^{トク}太^{タイ}子^シ渡^{ワタ}唐^{トウ}時^ジ、達^{ダツ}磨^モ大^{ダイ}唐^{トウ}約^{ヤク}束^{ソク}也。日^{ニチ}本^{ホン}片^{カタ}岡^{カウ}山^{サン}牛^ウ二^ニ現^{ゲン}シ^シ、出^{シュツ}達^{ダツ}給^{キツ}也。知^チ死^シ期^キ法^{ホフ}業^{ゲツ}。頌^{ソウ}云^{イハ}、眼^{ガン}光^{コウ}落^{ラク}地^ヂ之^ノ大^{ダイ}事^ジ在^{ザイ}リ、是^{コノ}レ^ニ黑^{コク}光^{コウ}池^チ、^{ワカ}「鏡^{キョウ}」覺^{ケツ}三^{サン}玉^{ギョク}池^チ無^ム滴^{テツ}瀝^{シツ}。指^{サシ}波^ハ底^{テイ}常^{ジョウ}取^{シュ}三^{サン}神^{シン}光^{コウ}。無^ム常^{ジョウ}須^{シュ}臆^{オク}頭^{ダウ}鼓^コ。得^{トク}レ^ル數^{スウ}正^{セイ}三^{サン}幾^キフ日^{ジツ}識^{シツ}亡^{マツ}也。

三通在之。睡^{スイ}啼^{テイ}・眼^{ガン}光^{コウ}・耳^ニ鳴^{ナウ}是^{コノ}也。

法^{ホフ}性^{セイ}平^{ヘイ}等^{トウ}理^リ偏^{ヘン}見^{ケン}起^キ法^{ホフ}喜^キ禪^{ゼン}悅^{エツ}食^{シツ}飢^キ六^{ロク}道^{ダウ}輪^{リン}迴^{ケイ}衆^{シュウ}生^{シユ}成^{セイ}達^{ダツ}磨^モノコト也。聖^{セイ}聖^{セイ}教^{コウ}訓^{クン}義^ギ鳴^{ナウ}者^ハ、是^{コノ}聖^{セイ}德^{トク}太^{タイ}子^シ達^{ダツ}磨^モ牛^ウ二^ニ現^{ゲン}シ^シ奉^{ホウ}達^{ダツ}トキヲヨミ在^{ザイ}ル歌^カ也。法^{ホフ}喜^キ禪^{ゼン}悅^{エツ}食^{シツ}、衆^{シュウ}生^{シユ}ハクライエヌ也。是^{コノ}六^{ロク}道^{ダウ}輪^{リン}迴^{ケイ}者^ハ也。太^{タイ}子^シ達^{ダツ}磨^モ憑^{ヘイ}被^{ヘイ}レ^ル申^{シン}也。衆^{シュウ}生^{シユ}救^{キウ}ワ^ワン^ン為^{ナリ}メニトヨマル々也。

達^{ダツ}磨^モノ返^{ヘン}歌^カ也。經^{キョウ}文^{ブン}ナル歌^カニ讀^{ドク}ム。飛^ヒ鳥^{カウ}都^ト樂^{ラク}天安^{テンアン}樂^{ラク}世^セ界^{カイ}不^フ退^{タイ}位^イ轉^{テン}法^{ホフ}輪^{リン}不^フ絶^{セツ}我^ガ本^{ホン}師^シ釈^{シヤク}迦^カ大^{ダイ}師^シ說^{セツ}法^{ホフ}教^{コウ}他^タ日^{ジツ}在^{ザイ}。歌^カ之^ノ注^{チュ}脚^{キョク}、法^{ホフ}性^{セイ}トハ、佛^{ブツ}法^{ホフ}ノ言^{ゴン}端^{タン}也。般^{パン}若^{ニャク}之^ノ名^ナ稱^{ショウ}也。一^{イツ}乘^{ショウ}三^{サン}乘^{ショウ}之^ノ三^{サン}科^カ妙^{ミョウ}法^{ホフ}也。平^{ヘイ}等^{トウ}トハ、覺^{ケツ}母^ボ能^ネ現^{ゲン}照^{ショウ}之^ノ明^{メイ}智^チ也。是^{コノ}レ^ニ平^{ヘイ}等^{トウ}トハ也。片^{カタ}岡^{カウ}山^{サン}者^ハ、無^ム佛^{ブツ}法^{ホフ}片^{カタ}國^{コク}指^{サシ}言^{ゴン}也。又^{マタ}、日^{ニチ}本^{ホン}片^{カタ}岡^{カウ}ノ州^{シュウ}ト云^{イハ}也。山^{ヤマ}トハ、有^{アル}為^{ナリ}與^{ヨリ}山^{ヤマ}如^ニ堆^{タイ}而^{シテ}沈^{シユ}輪^{リン}車^{シャ}越^{エツ}渡^{ダツ}故^コ、山^{ヤマ}者^ハ云^{イハ}也。飯^{イハ}飢^キ者^ハ、三^{サン}界^{カイ}衆^{シュウ}生^{シユ}流^{リウ}点^{テン}、迷^ミ情^{ジョウ}菩^{ブツ}提^{テイ}飯^{イハ}飢^キ難^{ナン}至^シ八^{ハツ}正^{セイ}直^{ジツ}路^ロ。沈^{シユ}没^{マツ}五^ゴ道^{ダウ}生^{シユ}死^シ二^ニ也。六^{ロク}道^{ダウ}輪^{リン}トハ、佛^{ブツ}法^{ホフ}弘^{コウ}道^{ダウ}事^ジ也。旅^{リョ}人^{ニン}トハ、一^{イツ}切^{キツ}衆^{シュウ}生^{シユ}、我^ガ力^{リキ}臥^{フイ}三^{サン}無^ム明^{メイ}長^{チャウ}夜^ヤ覺^{ケツ}現^{ゲン}。於^ニ六^{ロク}道^{ダウ}茫^{マウ}々^{ツツ}而^{シテ}キ「」也。無^ム相^{サウ}者^ハ、釈^{シヤク}尊^{ソン}慈^ジ父^フ已^{コノ}入^ニ二^ニ混^{コン}樂^{ラク}迷^ミ々^{ツツ}謬^{ミョウ}火^カ宅^{タク}。我^ガ等^{トウ}者^ハ、誰^{ナニ}」

界廣大無邊轉變無常流点スルコト如ニ車ヲ轉ル。外ニ更ニ無シ常住不滅ノ跡。又三世覺母大聖、早ク皈ニ本宮ニ而流轉チ稚子ヲ誰力可レ哀。無母如レ子。起シテ首ヲ進ミテ蒼歌云、飛鳥都日本在。飛鳥都力ヤトハ、太子過去世ニ轉シ生玉テ、其時法隆轉寺邊、多生ノ間住玉テ、可レ讀、彼者ノ事。安樂世界不退位。絶ト者、一切衆生ヲ濟度スルヲ、富トハ讀也。濟度シ助ケントスルニ、流点生死ノ水、更ニ絶者、自レ古至今云心也。我本師 在トハ、覺母智公慈悲心ヲ發スル也。利益衆生ノ道ヲ相義シマ、離覺母智ヲ及濟度ニ故、衝山ヨリ飛來玉テ、於日本國弘宣コトメ佛法紛諸シ訖。達磨先在ニ出現ヲ我朝ニ故、争カ可レ忘ル御名ヲ者、詠玉ヘル也。

大和州片岡山達磨寺 萬十群此郷山直ノ村

日本西來十一月十五日、入滅臘月一日也。

方和尚傳正岳傳方和尚、夫々嫡々相承而今正鎮傳實和尚即傳正盛也。

今附傳正紹。

前永平大安現住安室正盛老衲(花押)

于時慶長八癸卯年八月二日書之了。

しかしながら、室町時代後期における切紙相伝の中心は、嗣法伝授に関わる切紙であつたと思われる。石屋派における切紙伝授については、別稿において論ずる予定であるが、一例として、『峨山派室中切紙』を取り上げてみたい。

【(3) 傳法付衣一校儀軌】

傳法付衣一校儀軌

受命後七日間、諸堂焼香礼拜、三時無懈怠勤メ之。其餘祈念勤行須勇猛精進ナル、當其夜ニ黃昏ノ以後、着淨衣ヲ具シテ威儀ヲ及ニ半夜ニ潛カ上ル方丈。

道場莊嚴様

當正中ノ堂奥ニ立ツ椅子。不懸ニ法被ヲ、其前ニ置ク棹一脚。棹衣打敷須レ莊ル之。其ノ中奥奉ル置キ嗣書・血脉・法衣。西ハ花瓶、東ハ灯燭、華用レ松枝ヲ同ク置ク棹上ノ東。當ニ北南ニ向テ西ニ設ク椅子。師暫シテ踞ス此。已ニ入レ道場。師東椅前西面ニ立ツ。資ハ在テ西ニ向テ東ニ而立ツ。師資互ニ展レ坐具ヲ。々々ハ端須レ重ル之。資九拜。師立地ニ受ク。到ル九拜ニ時、師資共ニ拜ス。是ヲ名レ奇拜。此時重ニ坐具ノ端ヲ者、豎ニ極ニ三世ヲ也。

次ニ向テ中央ニ安ニ嗣書ノ棹ヲ。師資同ク燒香。共ニ展レ坐具ヲ九拜。此時者重ニ坐具ハ坐具ノ之ヲ長ク、横ニ尽ニ十方ヲ也。次ニ収レ坐具ヲ問訊。次ニ移ニ棹ヲ於東。資唱云、請和尚坐。師踞レ椅ニ垂ニ兩脚ヲ。資進前シテ大展六拜。左肩上ニ掛テ法衣ヲ、膝行七步而進前シテ唱云、生死事大、無常迅速師。拜請シテ佛祖ノ命脉ヲ、欲ニ為ニ仏祖新師ニ。和尚慈悲哀感聽許シテ。師洒水灌レ頂ニ。如ニ血脉ノ時ニ。其後順ニ摩頂スル三返。資低頭。師唱云、從ニ如來嫡々相承シテ而到レ吾

ミ、々今授汝、々能護持而、莫令^{ムルコト}仏祖ノ種子ヲ断絶^セ。三唱止。

次^ニ付^レ法衣^ヲ、有^レ口傳。三皈・三聚・十重禁畢、膝行七步、退后三拜。師資共向^テ嗣書・血脉^ニ三拜。其^ノ后、師向^テ資^ニ三答拜。資^モ亦同拜^ス。其^ノ后拈^レ嗣書香^ヲ、我今得^レル^{コト}汝^ヲ、如^シ積尊^ノ得^ニ迦葉^ヲ。嫡々相承^{シテ}而、到^ニ六十三世^ニ、我^レ有^ニ正法眼蔵^ヲ、不^レ殘付^レ你^ニ、尽未來際、勿^レ令^レ仏種断絶^セ。師資頂戴三度、開^レ嗣書^ヲ、焼^レ松熟^令見^レ資^ノ名字^ヲ。其^ノ后、如^レ血脉、疊^ニ取^レ資^ノ胸襟^ヲ、或^ハ収^ニ袈裟^ヲ、紐^ヲ下^ニ、三拜^ヲ退^ル。

次^ニ至^レ翌日^ニ、五更上^リ方丈^ニ、致^ス無住拜^ヲ。言^ハ無住^ト者、無數量拜也。受^ル師^ノ命^ヲ則^ハ住^ム。今者此時必^ス為^ニ之^ノ限^ニ二十五拜^ヲ也。

蜜授儀式易^{シテ}忘、正猷^ヲ為^レ后^ノ人^ノ撰記。正猷^付ス^ニ為^ニ璫蔵主^ニ、璫付^ニ益蔵主^ニ、益付^ニ心書記^ニ、心付^ニ心書記^ニ、心付^ニ宗誓都司^ニ、誓付^ニ本書記^ニ。

文喜二年壬戌臘八宗誓授宗本 在判

【(4) 授紙傳記】

授紙傳記

焼香礼拝

三拜 師資並
北面 受者各半

普賢十願

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

礼敬諸仏、稱讚如来、廣修供養、懺除業障、隨喜功德、諸轉法輪、諸佛出世、常隨仏学、恒順衆生、普皆迴向。

次三皈依

南無帰依佛、南無皈依法、南無皈依僧、帰依佛而足尊、帰依法離欲尊、帰依僧衆中尊、帰依仏竟、帰依法竟、帰依僧竟。

四弘請願

衆生無辺誓願度、煩惱無辺誓願断、法門無尽誓願知、無上菩提誓願證。

宝號

南無釋迦牟尼仏^十。

開經偈

無上甚深微妙法、百千万億劫難知、我今見聞得受持、願解如来

第一義、

次

揭^{クル}二^ノ經題^ヲ三度、其^ノ后^ニ讀^ムレ文也。經及本尽皆唯此法而受矣。

右宋西僧正傳法作法

宗誓授宗本 在判

(図有り省略)

拜^ノ后、師取^テ經^ヲ薫^{シテ}香^ニ、而度^ニ与^ス受者^ニ。弟子受^テ經^ヲ於合掌^ニ、而著座。捧^ケ經^ヲ以待^ツ作法^ヲ。先^ツ受^テ法華經^ヲ、次^ニ受^テ梵網經^ヲ。已^ニ受^ニ二^ノ本^ノ聖經^ニ云云。壽量品与^レ師共^ニ引^キ展^キ、而不^レ断^セ聲^ヲ而讀^ム也。

林下曹洞宗における相伝史料研究序説（二）（飯塚）

明德五年^{戊申}三月八日傳授之

法谷 良秀 有判

西和尚嫡々相承到^ル吾々、々々今付^ス正猷藏主^ニ。 仍受耳。

應永十五年^{戊子}八月一日

前總持 真梁 有判

今正猷授^テ瑞藏主

文安二年^{壬乙}二月六日 有判

今為瑞授益首座 文正二年丁亥仲春初一日 在判

今須益授心書記 文明四年壬辰仲秋廿二日

今仲心授書都主 文明十六年卯月佛生日 ^{判在}

今宗書授本書記 文龜二年壬戌臘月八日 在御判

上記の二通の切紙の相伝の系譜に拠れば、石屋真梁以降、文龜二年（一五〇二）宗書から宗本に嫡嗣に相伝されてきたことを言う。また、この伝法作法は、永平寺においてもその切紙史料を見ることが出来る。

「千光禪師之分 伝法儀軌 秀礼也」
（南無つわき）

建仁宗西千光禪師伝法儀軌

受戒作法、先ッ道場莊嚴須^レ儀^ニ開^ニ静所^ヲ、受者沐浴淨潔^シ、著^{ツケ}新淨衣^ヲ、或ハ旧衣浣洗^シ、受者具^{シテ}威儀^マ、焼香礼三拜^シ、于大殿等諸堂却来^シ師所、師座^ハ面^シ南、受者北面焼香九拜^シ、後踞^コ跪^キ合掌^シ、且待^ニ作法^ヲ

受戒之時可誦我今盧舍那方坐蓮華台之偈、

師合掌云、^{普賢}禮敬諸仏、稱讚如來、広修供養、懺除業障、

隨喜功德、諸転法輪、諸仏住世、常隨仏学、恒願衆生、普皆廻

向、^{受者}
^{供誦}

次、三帰、南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧、帰依仏而足

尊、帰依法離塵尊、帰依僧衆中尊、帰依仏竟、帰依法竟、帰依

僧竟、

次、四弘願、衆生無辺誓願度、煩惱無辺誓願断、法門無尽誓願

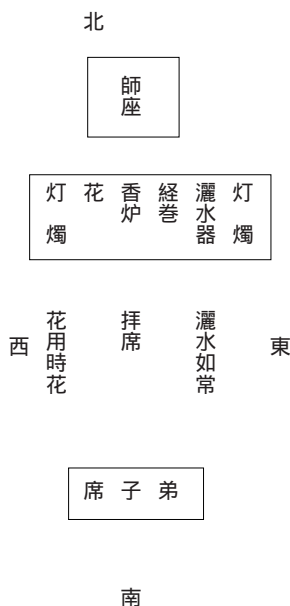
智、無上菩提誓願証、

次、南無釈迦牟尼仏^十、次、^{開經偈}無上甚深微妙法、百千万億

劫難値、我今見聞得受持、願解如來第一義、

次、揚経題三文、次、師合掌取経薫香而度与受者、々々合掌展

両手受之、師自經始誦之、文句須分明、受者深信自受誦之、但



法花經至于退坐一面而止也、或及經終也、受者不離坐具而立北
面三拜了、餘受經皆準此法而受矣

或受者著座、在坐具而坐、捧卷受之也、

日本元徳元年八月一日、在吉祥山永平寺堂與受之、

中興老師面南、曇希北面禮拜、依此儀軌矣、

本云、文曆二年乙未八月一日、依此儀軌、

弘安戊寅十月一日、依此儀、

(裏面)

仏祖伝法儀軌 於桃明庵

授永久藏主畢

応永廿四年九月廿九日

喜舜(花押)

永平寺における相伝史料の最も古い物が伝法儀軌(内容は授経儀軌⁷⁾)であることは、初期の切紙成立事情を示唆する。後に三物相承を嗣法の儀礼として体系化する以前には、様々な伝法の儀軌が作成され、その意義付けを切紙や一部本参が担ったものと推察されるからである。

三、永平寺における切紙相伝について

中世林下曹洞宗における嗣法相統は、大事(参禅)了畢を前提としていたと思われる。永平寺における本参史料については前稿において管見を述べた。少なくとも室町時代以降、室内参禅修行(公案参究)が盛んに行われ、切紙や本参類の

相伝が嗣法相統と同時に行われ、あるいはそれこそが嗣法相統と考えられていたとも推定される。ここでは、戦国期から江戸時代初期における切紙相伝を中心に考察したい。

以下に掲げるのは、永平寺第十六世以實(現世代十七世)の付法状とされるものである⁸⁾。

於吉祥山永平禅寺丈室而、宗門之法則・法器等、不殘一物、于新祖棟嗣資之也、聊不渡庵案秘訣矣、如件

心心円一、一在無功、君臣合道、柳緑花紅

皆大永第七丁亥年仲春三日

現住祥山永平以實(花押)

(朱印文「以實」)

大永七年(一一五二七)、永平寺室中において、現住持以實から次の世代を担う祖棟(祚棟)へと「宗門之法則」と「法器」等が伝授されている。「宗門之法則」とは、宗門(林下曹洞宗)における相伝史料(切紙・本参)に該当し、「法器」は嗣法の証とされる法具(袈裟・拄杖・私子)を指すものと思われる。

以實の付法状に類似する形式のものが、祚棟にも残されている⁹⁾。

於吉祥山永平禅寺丈室、宗門之一大事因縁、儀軌・戒品、法器・杖・私、不遺一物、祚玖首座伝附畢、
根基牢実、血脈貫通、金鎖連環、相統不断、至祝至禱、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

吉永禄三^{三庚} 七月廿八日

現住永平十七世沙門祚棟^(朱印白文・祚棟) (花押)

又、祚棟には、別に伝法偈が残されている。^⑩

伝法之偈云、法法円融、無始無終、異苗繁茂、心地崆峒、

吉永禄三^{三庚} 七月廿八日

吉祥山永平禅寺十七世沙門祚棟^(朱印白文・祚棟)

祚棟の付法状に見える「宗門之一大事因縁」とは、切紙や本参といった相伝史料を概括する言葉として用いられる。又、「儀軌」と「戒品」とは、前者は伝法に関わる儀式の軌則であり、後者は『仏祖正伝菩薩戒作法』や『出家略作法』といった伝戒史料を指すものと思われる。「法器・杖・払」とは、伝法の証としての法具を指すと思われるが、以實付法状において、「法器」として概括されていた物が、ここでは、拄杖・払子と具体的に指摘されている。後述の『室中切紙謄写』によっても、この伝法の儀礼は確認し得る。

(3) 傳法之儀軌

敷座具、書嗣疏了、連了、其下「師傳授之偈」師之自筆ニテ書ス、年号日付判シ了テ、嗣疏ヲ疊セ、次儀軌・戒本ヲ傳授シ了テ、儀軌・戒本ノ奥ニ、年号・日付・師号・在判也、

「宗門之一大事因縁」に係する物としては、祚棟に伝法した祚玖に『吉祥山永平禅寺総目録』(公案目録、以下「永平寺総目録」)が現存する。^⑪ その巻末の識語に、以下のよう

に見える。

球和尚以自筆書寫之

于時元和九年源小春十八日

永平十八世

于時慶長十一年八月廿三日 祚球(花押)

伝附 祚天座元

吉祥山永平禅寺総目録之次第

堅可秘之、

鎮徳寺現住雪菴叟(花押)

これによれば、永平寺一九世(現世代による)祚玖(球)が慶長十一年(一六〇六)に祚天(後の永平寺二三世)へと伝授し、それを更に祚天の法を嗣いだ鎮徳寺三世雪庵宝積が元和九年(一六二三)に転写したのが、本書「永平寺総目録」であり、ちなみにその内容は三位の透りの参に依拠した公案目録である。

伝法は、嗣法証明(三物伝授)を中心とするが、この外に参禅了畢の証明、『仏祖正伝菩薩戒作法』(以下「菩薩戒作法」)の伝授の証明、伝衣の附授証明という形式によってもなされる。祚棟の付法状に見える「戒品」は、『菩薩戒作法』の伝授が作されたことを意味する。因みに、祚棟の書写の『菩薩戒作法』が永平寺に現存しており、以下に相伝の系譜を掲げ

右大宋宝慶元年九月十八日、前往天童景德堂頭和尚、授戒^式、
道元戒如是、祖日^{子時傳書待客}・宗端知客・広平侍者等、周旋行
此戒儀、
大宋宝慶中伝之也、

本云、日本元弘三年九月廿七日夜半、從本寺前往永平兼宝慶二
世堂上老師相伝之、 比丘曇希 四十六歳

日本康安二年^{手書} 結制日、在永平首座寮、以 先師希和尚聽
許書写之、比丘以^一 四十二歳

日本嘉慶二年^{盛展} 五月十八日、在永平書記寮、以先師一和尚
聽許書写之、比丘喜純 四十一歳

日本永七七年^{盛展} 十月十五日、在永平首座寮、以先師純和尚
聽許書写之、比丘宋吾 五十八歳

日本永十二年^{乙酉} 七月十日、在靈梅院、以先師吾和尚聽許
書写之、比丘永智 四十九歳

日本永享十年^{庚午} 十一月廿八日、在承陽庵、以先師智和尚聽
許書写之、比丘祖機 五十四歳

日本文安二年^{乙丑} 二月廿八日、在首座寮、以先師機和尚聽許
書写之、比丘了監 五十六歳

日本康正三年七月廿八日、在承陽庵、以先師鑑和尚聽許書
写之、比丘建綱 四十五歳

日本応仁二年三月七日、在承陽庵、以先師綱和尚聽許書写

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

之、比丘建撕 五十四歳

日本文明六年^{甲午} 五月二十日、在維那寮、以先師撕和尚聽許
書写之、比丘光周 四十歳

日本明応二年^{癸丑} 三月七日、在承陽庵、以先師周和尚聽許書
写之、比丘宗縁 三十六歳

從此此八月大余元年也 日本永正十八年^{吉吉} 六月廿八日、在文室、以先師
縁和尚聽許書写之、 比丘以貫 五十一歳

日本天文九年^{辛丑} 三月廿八日、在文室、以先師貫和尚聽許書
写之、 比丘祚棟 伍拾七歳

皆天文九年^{庚子} 季春廿八日、^(節白文・以貫) 以貫^(花押)

日本永禄三年^{庚申} 七月廿八日、申在文室、以先師棟和尚聽許書
写之、 比丘祚玖 三十歳

皆永禄三年^{庚申} 七月廿八日、^(朱節白文・祚棟) 祚棟^(花押)

永禄三年(一五六〇)七月二十八日に、祚玖は師である祚
棟の『菩薩戒作法』書写の許可を得て書写しているものであり、
同日に先の付法状及び伝法偈も与えられている。

次に、『菩薩戒作法』の相伝について取り上げてみたい。⁽¹³⁾
愛知県西明寺所蔵の「伝戒附法書(仮題)」は、同寺開山太

素省淳(一四九七)が、文明十八年(一四八六)に師の芝
岡宗田(一一五〇〇)より伝授されていた『菩薩戒作法』を、
遷化直前の明応六年(一四九七)八月四日、弟子の同寺二世

機外了禪に附与したもので、附法相承が同時に、或いは既に完了していることを前提としている。

〔伝戒附法書〕

日本文明十八年「丙午」六月二十日

前龍沢田和尚示省淳玄、仏戒者宗門之大事也、靈山少林曹溪臨濟芙蓉天童東林建仁永平、皆附嫡嗣、從如来嫡々相承到吾、伝附既畢、附法弟子省淳令附了禪、

于時明応六年「丁巳」八月四日

また、神奈川県香林寺所蔵「伝授了畢」切紙も、やはり『菩薩戒作法』の伝授に関する切紙と推察される。但しこの切紙は、二度の相伝を経ている。先ず寛永六年(一六二九)、海蔵寺十三世文苗より長円に宗門之大事である仏戒が相伝されたことを証した切紙として成立している。後に香林寺十六世髓岩千紹(一七二四)はこの切紙を用いて同寺十七世悦翁恵禪(一七五六)に伝授しており、恐らくは『菩薩戒作法』に附して伝えられたものと見られる。

(端裏) 伝授了畢

日本寛永六「己巳」年林鐘廿八日

靈山十世前永平最乘現住兼海蔵十三世文苗和尚、示長円云、仏戒者宗門之大事也、

靈山少林曹溪洞山臨濟芙蓉天童建仁永平、皆附嫡嗣、從如来嫡々相承而至吾、伝附既畢、今授附法弟子長円、

海蔵十三世苗和尚、示長円云、仏祖命脈、証契即通、如今長円、証契即通也、

髓岩叟(花押)

与恵禪

于時寛永六「己巳」年六月廿八日

商南(花押)

それでは、江戸時代前期における永平寺の情況はどのようなものであつただろうか。永平寺二七世嶺巖英峻(万照高国禅師)によつてまとめられ、智堂光紹が相伝したと思われる「切紙目録」には、百五十七種の切紙を列記した後に、「参禅巻冊覚」として、別に二十二種の門参資料の目録が附記してある。永平寺第三四世叢州高郁(大仙国光禅師、元禄元年一六八八 示寂)が、貞享五年一〇月永平寺退院に際して記録した「伝授室中之物」⁽¹⁵⁾によれば、永平寺室中において伝授相伝され、室中の参禅箱に収蔵された本参・切紙類が列挙されている。それらの記事を以て類推すれば、江戸時代前期には実に多くの切紙や本参と言つた相伝資料が永平寺に所蔵されていたことを知ることができる。

伝授室中之物

- (1) 一、後開山御守後住伝授之時、可拜箱二入、(2) 一、伝授古則入派、向上最初ヨリ、十二通之目録、(3) 一、三十四関之抄、是ヲ伝法之時、不究者、吾宗之非師家、巻冊在之、(4) 一、天童如

しかしながら、上述のように更に遡及することも可能であり、以實・祚棟・祚天・祚玖の時代に一大事因縁として總括される切紙及び本参は一定の体系を有していたと思われる。師資の間に秘密伝授される切紙や本参は、嗣法と不可分の関係にあり、極めて重要なものとして位置づけられていたと思われるが、その位置づけがどのように変化していったのかを今後少しく明らかに出来ればと考える。

さて、永平寺室中において護州が相伝した切紙は、上掲の史料に見るように、伝法に関する切紙が中心であることがわかる。又、一枚(一紙)の切紙の外に、冊子化されているもの(折本、卷子本を含む)が記載されている。

永平寺には光紹智堂書写の切紙が現存しているが、それは全体の十分の一にも満たないものと思われる。光紹所伝の切紙は、以下のように

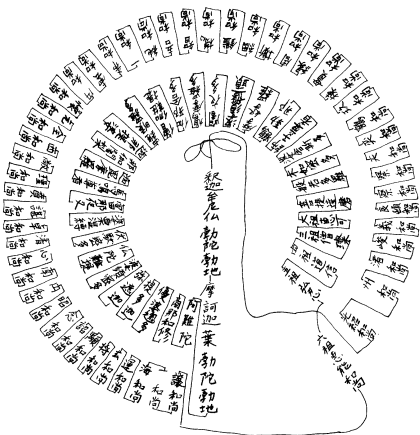
- 「No. 21 道元和尚祠書切紙」No. 25 永平和尚一枚密語」No. 26
- 「元和尚黒衣之由来」No. 27 宗旨秘書」No. 28 血脈袋之大事」
- 「No. 29 山居傳戒切紙」No. 51 宋西僧正記文」(以上、永平寺史料全書 禅籍編 第一巻 所収)No. 43 一条紅線」No. 45 卵形之図」(以上、永平寺史料全書 禅籍編 第二巻 所収)No. 1 法衣傳授之時参」No. 2 袈裟之切紙」No. 3 卵形血脈并参禅」No. 4 十智同心」No. 5 州縣村」(以上、永平寺史料全書 禅籍編 第三巻 所収)

上記十五通が永平寺に現存する。

以下に、「一条紅線」切紙を取り上げてみたい。本切紙は、二九世鉄心御州より三〇世光紹智堂へ、寛文三年(一六六三)に相伝された臨済宗血脈に関する切紙である。

(圖つり書)
「一条紅線」

図(1) 一条紅線



臨済命根元不斷

一条紅線牽手中

臨済命根元不斷
一条紅線牽手中

佛祖代、嫡、相承而、吾今授_レ你、伝附既畢、尽未來際、莫_レ令_二斷絶_一、嫡子一人之外、不_レ可_二伝附_一、于時寛文三 庚辰年九月廿八日書之、秘訣別紙_二不_レ言_一、靈山・少林・曹溪古風、連統之事、臨濟和尚_二在_二黃檗會中_一、行業純一也、於六十棒下、得_二無生法忍_一、於斯、立八種面目、汾陽和尚、有時示衆云、先師臨濟和尚_二有_二八種面目_一、一者本分、二者自性、三者色相、四者直示、五者為人、六者機、七者賊、八者性、吾門_二為_二種草_一者、切須如是面目具足、禪者如何_一具足_二八種面目_一、便一喝、云、參、

夫八種面目者、臨濟和尚、黃檗棒下開_二正眼_一、是則、本来本分・未生已前之本身也、於_二大愚脇下_一尋_二三攀_一、得_二本分事_一、自性識破、歸与_二一掌_一、是則、一機之發処也、從_レ是_二見_二色相_一、於_二此立_二本分事_一、是則、色相・本分也、色相者、五蘊境界也、六根・六識・六_二境界也_一、六根・六識・六_二境界也_一、是十八界、証_レ是_レ為_レ悟、不_レ証_二色相_一為_レ迷、為人者、二_レ機門下_一、垂手接物、隨機、説_レ仏説_レ法、直示者、本分無一物_一所_一示_レ是也、機者、一_レ機之發処、本分事也、是行_レ棒行_レ喝、把住放行、殺活自在、有時者、一_レ拈_二一茎草_一、為_二丈六金身_一、有時者、取_二丈六金身_一、為_二一茎草_一、是機之受_レ用也、賊者、一機之動也、喚_レ僧為_レ俗、喚_レ俗為_レ僧、性者、本分_二事也_一、山高海深、柳緑_二花紅_一、是三関、機・賊・性之内、三世俱_二備_一、三世俱_二陰_一、向上向下、此中也、面_二目受用_一、面目放下、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説（二）（飯塚）

于時寛文三庚辰歲九月廿八日、

永平廿八世御州和尚在判、

附授光紹老衲畢、

「一条紅線」切紙は、その奥書に拠れば、二九世鉄心御州より三〇世光紹智堂へ、寛文三年（一六六三）に相伝された臨濟宗血脈に関する切紙と思われるが、『永平寺史料全書』禪籍篇第一巻所載のものに限定してみると、光紹署名の切紙には、印文が「慧輪永明禪師」「光昭高風」朱印二顆と花押印が押されているのに比して、本切紙には見られないことから、案文ではないかと思われる。又、下段注釈文の二行目、四行目に訂正の跡が見られる。

永平寺に所蔵される二種の切紙目録のいずれにも、「一条紅線」切紙の名が見えており、「切紙目録」には、この外に臨濟宗血脈に関するものとして、「林際曹洞兩派血脈」などがある。

曹洞宗道元派下に相伝された切紙の中でも、嗣書・血脈伝授に関する切紙の比重は極めて重いものである。嗣法伝授の前提に参禅了畢が求められたように、切紙も同時に伝授されたものと思われ、嗣法の際に師資の間にに秘密相伝される一連のものとして位置づけられていた。

嗣法に関して相伝すべき切紙がどのようなものであったかについては、永平寺二九世鉄心御州の法嗣である埼玉県寄居

町の正龍寺九世普満紹(詔)堂所伝の「伝授之儀規」(正龍寺所蔵)が参考になる。

(端裏) 伝授儀軌書

伝授之儀軌

- 一、師云、密室中之事作麼生、答、有之、
- 一、師捧^ツ法衣^ツ如來丈六之袈裟掛^ツ在弥勒千尺身、怎麼時^ツ仏衣^ツ長^ツ短^ツ、答、有之、
- 一、師之一指^ツ資之指^ツ袂^ツ云、仏々祖々授示相伝、尽未來際莫^ツ令^ツ断絶、亦資以^ツ一指^ツ師袂^ツ云、仏々祖々相伝授乎、尽未來際不^ツ可^ツ妄者也、言了而跪座^ツ、
- 一、師、嗣書血脈渡^ツ弟子^ツ、則再三頂戴而資^ツ可^ツ渡、資請取而再三頂戴納懷中、
- 一、嗣書、血脈之円相之參、勃陀勃地之參、嗣書之參、血脈之參有之、切紙^ツ明^ツ、
- 一、教授戒^ツ渡而、則戒文之參有之、
- 一、国王授戒之嗣書切紙^ツ渡而、則參有之、
- 一、龍天授戒之嗣書作法^ツ法^ツ、則參有之、
- 一、伝法之偈、一、合血一紙、三国流伝嗣書、一、六祖半紙、
- 一、宝鏡三昧渡、一、上來切紙參、一、大事渡、
- 一、懷敝記文、一、卵形図、一、七仏以前血脈、一、相統切紙、
- 一、空塵書、一、迦文勒三説、一、正僧記、一、鉄漢之參、

此外他日渡書、烏沙巾上是青天、不可他出者也、

畢竟伝授了而、師示資云、伝授底作麼生、答有之、資三拝而立、師云、後朝如何、資云、明早朝行而無住拜、師云、著語乎、答有之畢、

從永平室中直伝 詔堂拝

次に、駒澤大学図書館所蔵『室中切紙』所載の「嗣書諸目錄之切紙」を見てみたい。これは、永正十二年(一五一五)に集成されたとみられる切紙目録である。

嗣書諸目錄之切紙

- ・梅絹二切、・国王授戒作法^{一枚紙也}、・菩薩戒作法^{長脚之紙也}、・受師命時椅子作法^{一枚紙也}、・戒律伝授作法^{一枚紙也}、・自家訓訣、・龍天授戒作法^{一枚紙也}、・宋西訣文^{一枚紙也}、・達磨一心戒作法^{一枚紙也}、・応量器^{梅絹一尺四方 切以上 嗣書ノ内數ノ一六條}、・仏祖正法眼蔵血脈^{一枚紙也}、・没後授戒作法^{一枚紙也}、・嗣法論作法^{一枚紙也}、・卵形図^{一枚紙也}、・空塵書^{三枚紙也}、・永平仏祖正伝受經儀軌^{一枚紙也}、・臨濟下血脈^{一枚紙也}、・無極授^{一枚紙也}、・月江二記文^{長脚紙也}、・夜參之図^{三枚紙ノ紙也}、・三老普所大事肝要句儀^{一枚紙也}、・嗣書卷^{二冊}、・曹洞合血本則^{二冊}、・普門品相承之次第^{二冊}、・三位之次第并月両箇伝^{二枚紙也}、・如浄老師授道元和尚儀軌、夜參廿八透^{此内透八秘器ノ々也}、・梅絹嗣書卷^{二冊}、・十八般^{抄共二冊}、・統物^{州本一冊}、・小參之秘訣^{二冊}、・夜參出標^{勝天}如節田相承次第、朝參計謹共^{二冊}、宗門一大事因縁、禅相伝附既畢、

永正十三歳^{丙子}(一五一六)極月十三日夜半

宗門一大事不遺一物正忠伝既畢、

天文二^{癸巳}（一五三三）十月廿七日夜半、於最乗金剛寿院、

宗門一大事、不遺一物宗長伝附既畢、此、外伝後之參、敲換十

六則最、秘極也、若流布他見贖者、暗却正法眼編却命者也、

日本天文廿年^{癸亥}（一五五一）今寛永十歲^{癸亥}（一六三三）九月吉

日（Gennin）

ここに見られる「臨済下血脈」は注目すべきものであり、「一条紅線」切紙と内容的に連關すると思われる。

本切紙は、図の臨済宗血脈円相と、二行に大書書された二句と、更に血脈相承に關連する參禪了畢の内容と思われる八種面目についての注釈より構成されている。

血脈円相の図に關して言えば、『嗣書』が一重の円相であるのに対して、臨済宗の血脈が二重の円相になっていることが特徴である。「一条紅線」切紙と内容を同じくする臨済宗血脈が相伝された例としては、神奈川県小田原市の香林寺所藏「済家之血脈」が挙げられる。

「嗣書・血脈」^{（血脈うわ書）}

御大事

御開山三物

七仏偈

代々可他見

「」「者也、」

林下曹洞宗における相伝史料研究序説（二）（飯塚）

「済家之血脈」^{（血脈うわ書）}

「血脈図省略」

臨済命根元不斷

一条紅線牽手中、

靈山・少林・曹溪古風、連統之事者、臨済和尚、在黄檗会中行業純一也、於六十棒下、得無生法忍、於此、立八種面目、汾陽昭禪師、有時示衆云、先師臨済和尚、有八種面目、一者本分、二者自性、三者無相、^{（三）}四者直示、五者為人、六者機、七者賊、八者正、吾門為種草者、切須具足如是面目、諸禪徒如何具足面目云、便一喝、云、參、夫八種面目、云、臨済和尚、黄檗棒下開正眼、是則本分也、未生已前本身也、於大愚脇下築三拳、得本分事、自性識破、^{（四）}帰与一掌、一機發処也、本分也、從此見色相具足而、於此上本分事立、是則、色相・本分也、色相者、五蘊界也、六根・六識・六境界也、是十八界、証之為聖、不証為凡而、二義下、垂手接物、隨機說法、直示者、本來無一物処也、機者、一機之發処也、本分事也、以是行棒行喝、把住放行、殺活自在而、有時拈一茎草、作丈六金身、有時拈丈六金身、為一茎草、是則機受用也、賊者、動一機也、具相為俗為僧、正者、本分事也、山高海深、柳綠華紅、是則機・賊・性之三関也、此

三関之内、三世（傳）陰、向上向下、在此中、面目受用、面目放下、

以心伝心在之、仏祖代々相承、嫡々吾今授（傳）慶畢、尽未来際、莫令仏種断絶、嫡子従一人外、不可伝附云々

于時「三月吉日

付与乗慶蔵

「一条紅線」切紙と、上記の香林寺所蔵「済家之血脈」とを比較すると、文章の異同が見られる。又、三重県玉城町の広泰寺所蔵「円相八種面目切紙并臨済宗血脈」は、寛文七年（一六六七）二月吉辰に鉄嘴から寒察へ附授されたものであり、ほぼ「一条紅線」と同じ形式と内容を持つものである。但し、広泰寺の切紙は、中段の二行書き部分が、以下のように、参の形式となっている点が異なる。

臨済宗之一枚血脈之参也、師云、内円相（傳）代云、清浄法身毘盧舍那仏、師云、中円相（傳）代云、円満法身盧遮那仏、師云、外円相（傳）代云、千百亿化身釈迦牟尼仏、師云、畢竟（傳）代云、總（傳）有（傳）此中円也、

この外、二重の円相の形式を取るものは、例えば埼玉県寄居町の正龍寺所蔵「臨済之門風」切紙などが挙げられる。

臨済宗所伝とされる祠書伝授儀礼に關していえば、愛知県豊川市の西明寺所蔵、年記不明、村嶺所伝の「臨済宗祠書伝授」の切紙が存在する。

（端裏）臨済家伝授
臨済家祠書伝授

師示云、臨済之相統（傳）云へ、代云、元來臨済之仏法無多子、師云、無多子（傳）ヲ、学、師、左ノ方ニ相並テ座（傳）云、多子塔前分ニ半座（傳）師云、臨済之血脈不断（傳）云へ、代云、仏祖証契流通、哀懇聴許、師云、着語（傳）、代云、臨済命根、中、師云、畢竟如何、代云、万盤巧妙一円空、師即渡（傳）血脈（傳）資請取テ拝看、即（傳）懷中、九拜シテ退歩、地絹之事、梅花之綾絹也、曹洞家与相同、嫡家計在（傳）之、両家相統与謂（傳）之、

豊嶽七世村嶺書之（花押）

この切紙は、臨済宗所伝の血脈伝授の参といふべきもので、具体的な儀礼の内容は簡略化されている。「臨済仏法無多子」は、高安大愚の下における臨済大悟の機縁である「師（臨済義玄）於言下大悟云、元來黄檗仏法無多子」（『臨済録』行録）という語を前提するもので、「地絹之事、梅花之綾絹也、曹洞宗与相同」というように、洞済の比較、乃至は曹洞宗の伝承の正統性を立証する根拠として、参考資料という意味で伝えられたものと思われる。次に紹介する「済家応身、伝授之作法」は、香林寺所蔵、寛永十六年（一六三九）三月二十三日、宗達所伝のものである。

（端裏）済家応身切紙

済家伝授之作法

濟家応真 伝授之作法

先入道場、師資共ニ応身伝授時、師ハ主位、資ハ客位ニ居シテ、統松之火ヲ以、宗派ヲ一辺誦シテ、能ク々令見也、其後亦一辺迦葉仏勃陀勃地、纒於転変之处ニ、得幽心旨ヲ、阿難勃陀勃地纒於転変之处ニ、得幽心之旨ヲ、如是一誦了、疊シタ、メテ、師急度拈シテ誰レニクレヨウ、資、模様ニ身ニ給フ、師渡、資請取テ懷中ニ喜フ、師云、着語、資代云、啼止為リ利栗、私云、幽、一字、説文ニハ、陰也、広韻ニハ、深也、於幽、一字ニ粉骨碎身スル者也、心、一字円相也、転処ハ歴劫不思儀也、師云、内、円相、代云、法身テ走、中之円相、代云、報身テ走、外、円相、代云、応身テ走、師云、畢竟ヲ、代云、一身即三身、三身即一身テ走、師云、勃陀勃地ヲ、代云、天、無極、勃陀ト云イ、地、無邊際、勃陀ト云イ走、亦勃ヲ勃ト上リ、陀ヲ陀ト下テ走、師云、中、代云、仏祖モ不知不伝テ走、着語、代云、先聖モ亦不識、亦云、心随テ万境ニ転、々処実能ク幽ナリ、撈云、幽処作麼生、代云、良久、云、幽、一字、代云、妙ト拳スナリ、師云、面目、受用ヲ、代云、喚天為レ地、喚鹿為レ馬共僂テ走、師、面目、放下、代云、背手ニシテ標然シテ立、師、句ヲ、代云、瞎驢不受豐山機、畢竟也、臨濟家ハ碧岩百則之公案、八種、面目、一一參得了テ以後、伝授、儀式如レ是也、今亦於曹洞門下、尽未來際莫令断絶、可秘々々、是ハ建仁開山栄西和尚ヨリ永平道元伝附也、夫ヨリ以來、今到吾沢長円、如レ是伝授畢者也、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

于時寛永十六 三月廿三日 砂門宗達拜

臨濟宗の血脈(嗣書)が宗派図の形式を取るものであり、血脈伝授の前提として、「臨濟家ハ碧岩百則之公案、八種、面目、一一參得了テ以後、伝授、儀式如レ是也」とあるように、「碧岩録」・「八種面目」を中心とする公案を透過すること、即ち參得了畢が求められる。その後に血脈伝授が行われるが、參得了畢と血脈伝授は、ほぼ一体のものとして印可証明の意味に解してよいように思われる。

曹洞宗所伝の切紙には、「国皇授戒作法」に見られるように、国皇・天皇に対する授戒作法が用意されているが、国皇に対して附与される血脈(嗣書)の形式も成立していたとされる。正龍寺所蔵、格叟寅越所伝の「国王血脈」(仮題)の端裏に「授奉」国皇嗣書、仏祖正伝菩薩戒血脈」とあることによつて知られる。血脈を嗣書と見なして授与する国王付授血脈の形式は、臨濟宗の血脈・嗣書伝授の切紙に極めて類似する。血脈下段に記された「臨濟八種面目」を内容とする文章はほぼ同一のものと云つてよい

(端裏)「授奉」国皇嗣法書

仏祖正伝菩薩戒血脈

(血脈図省略)

靈山・少林・曹溪之古風連統之事、臨濟和尚、在衆会中、行業純一也、於六十棒下得無生法忍、於斯、立八種面目、汾陽昭禅

師、有時示衆曰、先師臨濟和尚有八種面目、一者本分、二者自性、三者色相、四者直示、五者為人、六者機、七者賊、八者正、吾門為種草者、切須如是面目具足、諸禪德、如何是足面目、便一喝云、參、夫八種面目者、臨濟和尚、黃檗禪下開正眼、是則本分也、未生已前本身也、於大愚臨下築三拳、得本分事、自性識破、歸來師与一掌、則一機之發所也、本分也、從此色相具足而、於此上本分事得、是則色相本分也、色相者、五蘊界也、六根六識、接物隨機說法、直示者、本來無一物處、無一法是直示也、機者、一機之六境界也、是三六十八界曰、証是為聖、是不證為凡、為人者、二儀門下垂手、發處本分事也、棒行喝行、把住放行、殺活自在而、有時拈一茎草、為丈六金身、有時取丈六金身、為一茎草、是則機受用也、賊者、一機動、喚僧為賊、喚賊為僧、正者、本分事也、山高海深、柳綠花紅、是三関曰機賊、正内三世俱險、向上向下、在此中也、面目受用、面目於下、口伝在之、仏祖代々嫡々相承而、吾今授貫越伝附既畢、尽未來際莫令斷絶、嫡子一人之外、不可伝附之、面目秘訣別可參、

伝授儀式為之口伝示貫越

曹洞・臨濟の僧侶において参禅了畢が嗣書血脈伝授の要件であつたのと同じように、居士嗣書の授与には居士の参禅が前提とされていた。事実、そのための参禅話頭目錄も現存することを勘案すれば、「臨濟八種面目」は、国皇嗣書伝授資格を得る為の、参禅の内容であつたと推定される。印可の参

と称される二句の典故は、おそらく「人天眼目」と思われるが、室町時代後期以降、曹洞宗道元派下では、「人天眼目」の講義が盛んに行われ、多くの注釈書が抄出されてきた。その代表的なものとして川僧慧済の「人天眼目抄」が挙げられるが、今その該当箇所の注釈部分を引用してみたい。「臨濟八種面目」(「八境界」とも呼称される)とは、臨濟が黄檗希運の会下で大悟し、その悟りの内容を「八種面目」として定立したと言う。後文に拠れば、汾陽の示衆の語に、先師臨濟和尚に、八種面目が有つたとする。「八種面目」(「八境界」ともいう)は、臨濟宗における公案解釈、或いは公案体系の基本であり、例えば、林下大徳寺派(大応派徹翁派下)では、語録抄や密参録において頻用される術語である。更に、「八境界」は一つの公案として、「百則密参録」「百五十則密参録」の中に見出すことができる。

例えば、大徳寺派の密参録である滋賀県大津市西教寺所蔵『本来面目』には、以下のように見える。¹⁰⁾

第廿九、本分、

下語、遍界不^テ曾^テ蔵^マ、又吹毛鋏、

弁^ニ有無^ニワタラス天下^ノ間充滿^{シテ}アル物^カ本分^テ候、此故^ニ遍界

不曾^テ蔵^マ下語^{シタ}ソ、鉄団樂^ヲハ本分^ハ打^{トモ}碎スト云心^ニテシ

タ下語^ソ、鉄黒^キ色^ルホト^ニ、物^ニソマヌソ、本分^ハ物^ニソマヌ

ソ、此故^ニ鉄^ハ本分^ニ用タ^ソ、吹毛鋏^ハ本分^ハ名^ソ、

第卅、現成

一、現成

下語、月白^{ツキ}風清^キシ

弁、月白^{ツキ}風清^キ上^ニ、道里^{ミチ}ナイソ、自然ナル処カ、現成^ツ

柳^ハ緑花^ハ紅^ハト云^キ、自然^ナカタチソ、柳^ヲミトリニ見^ル、花^ハ紅^ハニミユルカ、マツスクソ、是^ヲ、現成^ゾ、

第卅一、色相

一、色相

耳朶^{ミミ}兩片皮、

弁^ニ、生^ラ得來^マ、眼耳鼻舌身意^ノナスワサカ、色相^チ走^ル

第卅二、截断

一、截断

下語、斬釘截鉄、

弁、色相^ト云物^ハ、大イタツラ物トミキツテ、吹毛劔^ヲ以^テ、釘鉄^ヲキル如^クスル^ル處^ニ、截断^テ走^ル、

第卅三、直指

一、直指

下語、車不横推、

弁^ニ、物マツスクニイ^ハアラワスカ、直指也、車^ハ横^ニ推^ス物也、マツスク也、月^ハ在^リ天^ニ水^ハ在^レ瓶^ニ、月^ハ天^ニアルソ、水^ハ瓶^ニアルソト、サシテミセ^ヌ又^カ處^ニ、直指也、

第卅四、為人

一、為人

下語、平生心膽向人傾、

禪宗^ト云者^ハ、平生截断^ヲ用ルソ、是平生^ノ心膽也、向人傾^ト云処^ハ、截断^ヲスベシトミヤウソ、為人^ノシタソ、

无孔^ノ鉄鎚當面擲、

無孔鉄鎚^ト、アナノナキカナツチ也、用^ニタ^ニ又物也、是^ヲタ

ヘタ也、其無孔鉄鎚^ヲ面^ニ擲^テミセタ處、本分^ヲ為人^ノシタソ、

又、百花春到為^レ誰開、

是^ハ、春^ハ誰^カ開ケトイワ子トモ、百花ガ開ソ、ト為人^ノシタソ、

是^ハ現成^ノ為人也、爰[、]弁^ハ、一句^ノ因縁^ヲ御示アリテ、手ヲタレテ

御スクイアルカ、為人^ノテ候、

第卅五、賊

一、賊

下語、作賊^ト人心虚^ハレ

又、牡丹花^下ノ睡猫^見、

弁、上^ニテ^ハ何ナフシテ、底^ニ人タラスヤウナ事^ヲ、賊^テ候、虚言

ノ事^ヲ、賊^ヲ云物^ハ、心ミナ虚^ノ物^ヲ、イツハリハカリソ、牡丹花

下^ニ睡猫^見、蝶^ヲ取^テクワント云心^ヲ、真実^ノ睡^ニテハナシ、賊^ト

云ハ、此ヤウナル事ソ、

第卅六、機

一、機

下語、錦^ニ包^ニ毒石^ヲ、

又、黒花、猫兒面門斑^{ヲリ}、

弁^ハ見分^ケカタキ処^ニ、禪宗ノ機^ヲ用テ候、白^キ力黒^キカハ、見分^ケヨ、ケレトモ、マタラナハ、見分難^シ、錦^ハケツコウナ物ジヤニ、中^ニ特石^ヲツミタハ、ヲソロシキ、見分難^シ心ソ、

抄曰、八境界ノ中ニ肝要^ニ用ル境界アリ、取出^テ弁^ヲ、弁^ハ色相^ヲ肝要^ニ用フスルテ候、其子細^ハ、本分^ニ・現成^ノ・截斷[、]直指[・]為人[、]賊[・]機[・]云モ、皆色相^ノ上^ニ、色相^ヲサヘ能用レハ、心法^モヨイソ、色相^ヲワロク用者^ハ、心法^モワルイソ、印可^ノ印証^ヲ取^テ云トモ、此色相^ヲ能受用^{シタル}人^ニアル事[、]色相^ヲアシク用イタ者^ニ、印可^モナイソ、然^ハ、千七百則^ノ公案^モ無^ニナルソ、爰^ニ以^テ、八境界中^ニ色相^ヲ肝要^ニ用也^ト云ヘリ、臨濟云、食物^ニハ人物^カ肝要[、]イカナル珍物^モ美食^モ、ケカレタ器物^ニハタラハ、味カアルマイソ、麤草^{ナル}食物^モヨキ器物^ニハタラハ、風味カヨカラウソト也、然間、色相^ヲ能用得タル人^ハ、心清^ヨイホトニ、色相^ヲアルヘキヤウニラサムルガ大事也、能々工夫可有、

(26ウ}29ウ)

林下曹洞宗道元派下において、「臨濟八種面目」は、切紙のみならず、本参等においても参究されている。佐賀県武雄市円応寺所蔵『参禅』(石屋派本参。円応寺八世華嶽宗藝所持)に以下のように見える。

臨濟八種面目、師云、機^ヲ代、活機^ヲ走、師云、句^ヲ代、午日打三更。師云、賊^ヲ代、赤手^ヲ門庭^ニ立走、師云、句^ヲ代、

驢糞^ヲ達人換眼珠、師云、性^ヲ代、烏^ノ黒鷲^ハ白^ク走、師云、句^ヲ代、山高海深、師云、本分^ヲ代、赤肉^ヲ走、師云、句^ヲ代、鹿^ノ南無縫罅、師云、直示^ヲ代、未直^ヲニ云テ走、師云、句^ヲ代、眼横鼻直、師云、為人^ヲ代、夫^レ成ツテ走、師云、句^ヲ代、逢驢作驢、逢馬作馬、師云、自性^ヲ代、千代若^ク走、師云、句^ヲ了々常知、師云、色相^ヲ代、柳在緑花在紅^ヲ走、師云、句^ヲ代、庭前紫面微衣、

「八種面目(八境界)」の各項目については、『八境界註』(上下二巻、明曆二年 一六五六 刊)が詳しい。

次に、「印形之図」切紙を取り上げてみたい。本切紙は、御州から光紹が相伝した、太陽警玄が浮山法遠に示したとされる切紙であり、混沌未分から天地が生成する次第になぞらえて三段階の下語によって解釈する。

印形之図^(明方)

大師告遠和尚云、知^(明方)印形^(未)本分^(未)時無、遠則云、如何是^(明方)印形^(未)未分^(未)時、師以手作^(明方)形示^(明方)問、印形^(明方)分破^(明方)作^(明方)天^(明方)時如何、師以手作^(明方)(此形示、問、印形^(明方)分破^(明方)作^(明方)地^(明方)時如何、師以手作^(明方)形示、問、如何^(明方)是^(明方)印形^(明方)未分^(明方)性、師時則默^(明方)示、問、如何是^(明方)天形^(明方)之性、師則出^(明方)レ陽^(明方)息^(明方)示、問、如何是^(明方)地形^(明方)之性、師則出^(明方)陰^(明方)息^(明方)示、遠忽^(明方)大悟^(明方)、礼^(明方)謝去、後某甲遠書^(明方)「印形^(明方)圖^(明方)并^(明方)圖^(明方)續^(明方)」以作^(明方)「宗門^(明方)」一大事因縁^(明方)也、謂^(明方)之^(明方)三^(明方)固^(明方)剣^(明方)ト、

又謂之「談訣」也、又謂之「三世」血脈、又謂之「三寶論」、又謂之「三生服」、夫「印形之葛藤」者、天之陽氣下、地之陰氣合而、自生動搖之氣、自生「万物之体」、殊有「印生・胎生・湿生・化生之四生」、各自具「五蘊」、生「六根」矣、愚而迷故、披毛戴角而、墮「起滅之深坑」、輪迴「三界」、智而悟故、教外別伝而、出「生死窠臼」、遊「履十方」、皆是天風地風虫之所作也、何故、威音如來、昔坐「斷印形中」而、未「曾出天地之生」、此時、諸仏不知「諸仏、菩薩不見菩薩、謂之不見不知時」、如來出世時、迴光返照而、深省「本身之相」、得「爲三界導師」、曾「靈山会上」、拈「一枝之芳」而、引「得頭陀之微笑」、後「正法流布天下」、皆是「印形分破」以來之妙道也、若問「印形未分時、無一法」、吾師「明安大師」、深省「本身之相」、權「立此三種圖續」、以附「某甲遠々」信受奉行畢、諸方禪流、莫疑此「一大事因緣」、可秘々々、某甲遠書写、

古語下語

(天) (地)

石女懷胎	父母所生眼	悉見三千界
長夜漫々	一夜落花雨	滿城流水香

鳥栖無影樹 花開不萌枝 花落不萌枝

死 生 死

善惡不二 善 惡

靈山云 夜半杌煤 スナリ 明月 芦花

大衆云 蟄杜レ戸 一声雷 蟄開戸

前 後 唯我独尊 天上 天下

通幻云 崑崙入海無消息 文殊騎獅子 普賢騎象

德雲比丘不レ下山 別山 相見

維摩詰 釈迦 阿難

紫極宮中鳥 銀河波底 百億分

鄂州大陽開山明安大師^(第2)印形之図

^(第1)印形未分混沌

(天

釋也玄也
釋也清也

地)

謂之天地間氣也
陰也・濁也・重也

三

三

三

虫不動風之正休

凡分作^レ天少動風

虫作^レ地也大動風

夜半

正明

毘盧界

光明台

発心土

不露

天曉

宝印台

日月星宿

修行土

王

君

臣

万物懷胎

雲雨国

出生土

父

母

子

涅槃城

寂光土

汚穢国

智

知

事

極楽

天童

道之字可用

地獄

仏眼伝之

法眼伝之

凡眼伝之

仏

菩薩

衆生

七仏以来嫡々相承之曹洞之秘法也

涅槃門

菩提門

煩惱海

鉄

金

銀

閑田地

野馬

陰裡

「^(第2)印形之図」切紙は「切紙目錄」に「一、卵形之血脈^并参
禅有之、三通」とあり、その三通の中の一通と推定される。

御州在判
附与光紹老衲

やはり光紹が相伝した切紙の一つに、「印形血脈並參禪」があり、本文中に「明安大師印形圖」の語が記されている。さて、本切紙の名称であるが、端裏うわ書に「印形圖」とあり、本文中においても「印形」として記されているが、他の切紙目録、本切紙以前に成立した切紙によれば、「卵形圖」「切紙」として相伝されてきている。内容からも、「卵形圖」の名称の方が妥当であると思われる。「印形圖」としたのは、光紹写誤によるものなのか、その元となった御州の切紙が既に誤っていたのかは、明確にはし得ないが、以下の用例から光紹の写誤の可能性がある（以下「卵形之圖」切紙で呼称を統一する）。

「卵形之圖」切紙は、詳しくは「鄂州太陽開山明安大師卵形之圖」といい、伝授に関わる切紙の一つとして相伝されてきた。上掲の御州の法嗣である正龍寺九世普満紹（詔）堂所伝の「伝授之儀規」に拠れば、血脈・嗣書伝授に関する儀軌及びその意味づけを行う一連の切紙の一つに、「卵形之圖」切紙は位置づけられている。

また、神奈川県小田原市香林寺所蔵「大樹派本參之次第」においては、

大樹派本參之次第

点之分八參禪不見 不書ナリ、

死活当頭 大死底

林下曹洞宗における相伝史料研究序説（二）（飯塚）

万機休罷 竹篋背觸
香巖樹上 何レモ入派也

爰ニテ仏界魔界之語訛在之、

活句不承当

自己転処

自己不点

自己目前一致

自己淵源

爰ニ湧山水牯牛引也、

智不到之分

智不到之所

智不到淵底

道吾智不到

爰ニ引ベシ、

異句之弁

智不到点处

智不到不転

没蹤跡

那辺之分

臨濟家ニハ在リ、

那辺承当

那辺透過

阿誰勘弁

位裡点側

退得那辺

行履

那時之三人

了庵・大綱・無極之參派ハ、別々也

位裡双対

伝授之参

唯以一大事因縁故出現於世、

卵形未分図

・俱低一指

忠国師一円相

・世尊拈花

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

・黄龍攀頭

・雪峰火焰裡

・南院古殿重興

・血脈之參

伝授了後之參八

看經

殊^二龍天之真像可肝要、以秘^{スル}為相

続也、

此外教授戒文之參在之

于時寛永^{丙寅}

初春五日

附与林清耆衲畢

高林九世長林(花押)

とあり、「卵形未分図」は、三位の本参を了畢して後、伝授

時の参の一つに位置づけられている。また、切紙が別に存在

することと快庵派の参であることを注記している。

室内秘書として相伝されてきたと思われるものに、岐阜県

関市龍泰寺所蔵『大陽明安大師十八般妙語』がある。本書に

は「郢州大陽開山明安大師卵形図」が合冊されている。その

奥書には、

龍天護法

×奉請招宝七郎深々守護仏法繁昌所也、

白山妙理

前龍泰六世示龍門正桃伝附畢、

一三四

首元龜参^手林鐘初六日、

とあり、本書が元龜三年(一五七二)に枝深正孫(一五

七六)から大洞正桃(一六〇五)へと伝附されたことが

わかる。同寺所蔵『無極由緒一覽記』の「第二十二、濃州竜

泰寺由緒証拠之品々」には、

一、警玄和尚託浮山遠公附投子青和尚十八般之妙語、道楷和尚

編集之物一卷、右無極派一子相承、代々嫡子一人伝附之法物也、

華叟一人伝焉、餘人無伝授、云云、

(47オウ)

とあり、『十八般妙語』が無極派の嫡子である華叟一人に相

伝されたとする。また住持職にある者の龜鑑となるべき条項

を記した『住職肝銘記』にも、

郢州大陽開山明安大師一十八般妙語勝句秘訣図、

先師梁山緣觀和尚付某甲警玄也、吾又待^二法器^一者也、汝能^レ

護持^{シテ}授^ク青鷗子^ニ、吾宗至^レ渠^ニ、挑^テ悟火^ヲ而伝^ヘ無尽灯^ニ去^リ

在^ニ、以^ニ頂相・皮履・布・直綴^一十八般妙語^ヲ寄^レ汝^ニ、須^レ待^ニ

渠^カ来儀^ヲ矣、偶^ニ云、

陽広山頭^ノ草、依^テ君^ニ待^ニ煨燂^ヲ

異苗繁茂^ノ処、密々固^ニ靈根^ヲ

又云、得法^ノ者、潜^{コト}衆^ニ二十年^ニシテ、応宣^ニ揚法^ヲ、遠和尚受^ニ此等、

伝書^ヲ作礼而去、此書全冊唯在濃之竜泰^ノ室中^ニ

(41オウ)

とあり、『十八般妙語』が龍泰寺室内の師資相承の書であったことがわかる。元龜三年の書写本が「卵形図」を含むものであったことを勘案すれば、両者共に華叟派の相伝書として位置づけられるのではないかと思う。

「卵形之図」切紙の内容について見てみると、最初に太陽警玄とその法を付囑された浮山法遠との問答が全体の序となっている。図の前半は、「古徳下語」として、混沌未分の状態から陰陽二氣が生じ、やがて天地が生成する次第に併せて、古人の下語を取り上げており、峨山韶碩、通幻寂靈、大源宗真の名が見える。後半が太陽警玄が示された「卵形之図」に相当すると思われる。しかしながら、この構成は、他のより古い切紙史料や本参などとは次第順序が異なる。

そこでは、最初に太陽が説示したとされる「卵形図」があり、次に太陽と浮山法遠の問答並びに別名などの本文が続き、三番目にこれに対する古人の解釈（下語）が図示され、最後に相伝の系譜が示されるというような構成になっている。また、「卵形図」「古徳下語」は、「三箇剣」、「三談訣」、「三世血脈」、「三宝論」、「三生服」の別名が示すように三段階の構成である。面山瑞方は、『洞上室内断紙棟非私記』において、この切紙について以下のように記している。

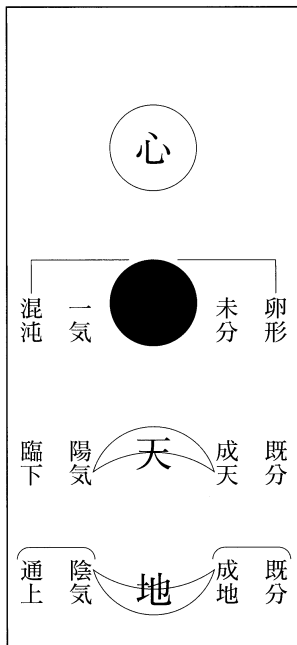
大陽卵形図断紙

面山謂、古来或名之曹洞夜参血脈、或名三世血脈、或名三

林下曹洞宗における相伝史料研究序説（二）（飯塚）

三箇剣、又名三段訣、又名三宝輪、又名三生眼、不是大陽明安之所_レ作、而日本洞下代語僧、應_レ解儒家大極図_一者所_レ私製_一也、但是俗氣不_レ可_レ絶、於_レ宗門_一直須_レ棟非_一、面山の説は、これ以降の切紙の相伝に關して、影響力を持っていたと思われる。駒澤大学図書館所蔵『百二十通切紙』（群馬県子持村の双林寺所伝、文化八年 一八一 東天梅溪から慧光へ伝授）所収の「卵形図」切紙には、図は簡略化されたものが提示されており、その注記は以下のようなものである。

図（2）卵形図



或家以_レ此図_一名_二之曹洞夜参_一血脈_一、或_レ名_二三世_一血脈_一、或名三箇_一剣_一、又名三談訣_一、又名三宝輪_一、又名三生眼_一、作

林下曹洞宗における相伝史料研究序説（二）（飯塚）

為^レ種々^ニ胡説^ヲ、為^ニ大陽明安禪師^ノ所^レ作、并^ニ是^レ後人^ノ私説、
全^ク非^ニ家伝^ニ、決^{シテ}不^レ可^ニ信用^ニ也、是^レ借^リ天地^ノ次第^ヲ、顯^ス心法
實通^ニ者也、
右嫡々相承到今、

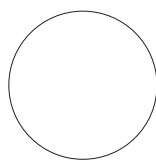
先に述べたように、香林寺には、この「卵形之図」と同内容の切紙が現存している。香林寺本では、端裏に「夜参之切紙、附与玄虎」とあり、文中に「宗門之一大事因縁、洞家夜参之血脈」とあることから、夜参において参すべきものという位置づけがあったと思われる。ちなみに、能登永光寺（石川県羽咋市）に所蔵されている『截紙之目錄』（永光寺輪住四百七十九世万山林松書写）にも、「卵形之図^{夜参ノ血脈トモ云也}」とある。永光寺所蔵切紙については、次稿において考察する予定である。また永平寺蔵の「卵形之図」切紙に「七仏以来嫡々相承之曹洞之秘法」とある部分が、香林寺本では実際の相伝の系譜となっており、相伝書としての重要性が強調されている。

（上略）

宗門之一大事因縁洞家夜参之血脈

寂靈和尚 恵明和尚 明宗和尚 宗能和尚
宗棱和尚 明宗和尚 乗慶和尚 珪梁和尚
新玄虎 嫡々相承畢者也

人 人 具 足 底



箇 箇 円 成 底

此円相者以應量器可輪之、故者、応量無窮、仏心無始無終、
本師釈迦牟尼仏陀附屬迦葉、自第一坐迦葉嫡々相承而到吾、
如今宗本伝附既畢也、

日本永禄二^{未己} 年二月晦日
前永平津英珪梁 玄虎代々伝附了
于時天正元年 前永平

香林中興乘方野衲

安叟派本源嫡子伝者也

他見^凡 仏罰・法罰忽相当^ル者也

更に、愛知県豊川市の西明寺所蔵『郢州大陽開山明安大師
卵形三図』(鉄山天牛、寛永二十二年 一六四四 写)では、
特に三位説による解釈が強調されている。

(上略)

入処

徹処

転処

智不到之自己

自己之智不到

自己之那边

那時之自己

那時之智不到

那边之那边

入処トハ、最初デ、案山点頭也、徹処トハ、自己デハ法眼宗也、

転処トハ、自己デ寛家也、入処ト云ハ、那返ノ入派也、徹処ト

ハ、那返、主中主也、転処トハ、那边退得道裡行裏、

(中略)

于時寛永竜集

申申

年霜月吉日

天牛拝

代々可改者也 附与牛薫長老

上述したように、大陽警玄に擬せられる「卵形図」に別種
のものがある。光紹が相伝した「卵形血脈参禅」がそれで
あり、今その参禅(参の部分)を以下に掲げる。

印形血脈^(海蔵井和書)参禅

仏祖正伝法^{(朱印文)、「仏法傳書」} 血脈伝授之日光龍

(図省略)

印形図

私云、中之図五色^{ニモ書}也、

明安大師^(印力) 卵形図 師云、此相ヲ云へ、(、龍、師ノ前ニ到テ、
手ヲクンデ坐ス、師云、何ントテ、龍云、母之胎内ニ簞テ走、
師云、夜参ニ合テ、一句ヲ云へ、龍云、此時、七夜ノ体デ走、
師云、何ンゾ、龍云、龍云、鉄境界デ走、師云、何ントテ、竜
云、本性ニスリ目ノ当ヲ又自己デ走、師云、) 此相ヲ云へ、竜
云、六相六識ノ形出^イデ走、師云、何ントテ、龍云、飯ニ飯ヲ添
ヘテ、満腹デ走、師云、夜参ニ合テ云へ、竜云、銀デ走、師云、
何ントテ、龍云、一色不足無イ事デ走、師云、何ントテ、竜云、
此時、一國將軍ノ性ヲ受ケ、太平デ走、師云、此僧ヲ云へ、虫、
竜良久ス、師云、何ントテ、竜云、此胎内ノ主相デ走、師云、
風動ノ動丰羊ヲ、竜云、此主ガ、動テ走、師云、夜参ニ合テ云
へ、代云、那边デ走、師云、何ントテ、竜云、禅人未^レ顯主テ
走、師云、畢竟ヲ、立テ云、異中異、主テ走、師云、此相ヲ、
大極已前デ走、師云、夜参ニ合テ云へ、代云、師前ニ到テ、禅
衣ヲカブツテ坐ス、師云、何ントテ、竜云、此時、空^(印)却已前
デ走、師云、●此相ヲ云へ、天八白雲ト共ニ曉ントス、師云、
何ントテ、竜云、清苦練行シテ、此事ヲ明メントス、師云、●

此相ヲ云へ、立云、偏正ノ作息デ走、師云、夜参ニ合テ云へ、代云、十字街頭ニ尺八ヲ吹ク、師云、此相ヲ、竜云、天利ニ叶イ、人心ニ叶テ走、師云、夜参ニ合テ云へ、竜云、根本事上位デ走、師云、此相ヲ、代云、豎一点横一点デ走、師云、何ントテ、竜云、豎三窮三際、横亘十方走、師云、境界ヲ、代、礼拜ス、師云、此相ヲ、竜云、本違功ノ手段デ走、師云、(天地)、此相ヲ、竜云、父母兩位デ走、師云、夜参ニ合テ云へ、三昧王三昧デ走、師云、与麼時如何ン、竜、師ト顔ヲ合テ坐ス、師云、何ントテ、竜云、天地同根、万物一体デ走、已上、

伝附既畢、

(朱印文「光紹高風」)

(朱印白文「慧輪永明禪師」) 版刻花押

「印形血脈并参禅」切紙は、端裏つわ書に「印形血脈并参禅」とあり、本文中においても「印形」として記されているが、他の切紙目録、本切紙以前に成立した切紙によれば、「卵形図」切紙として相伝されてきている。内容からも、「卵形」の名称の方が妥当であると思われる。「印形」としたのは、光紹写誤によるものなのか、その元となった御州の切紙が既に誤っていたのかは、明確にはし得ないが、光紹の写誤の可能性がある(以下「卵形」で呼称を統一する)。

前述の「卵形之図」切紙は、詳しくは「鄂州太陽開山明安

大師卵形之図」といい、伝授に関わる切紙の一つとして相伝されてきた。鉄心御州の法嗣である正龍寺九世普満紹(詔)堂所伝の「伝授之儀規」によれば、血脈・嗣書伝授に関する儀軌及びその意味づけを行う一連の切紙の一つとして位置づけられている。同様に神奈川県香林寺所蔵「大樹派本参之次第」によれば、「卵形未分図」とあり、三位の本参を了畢した後、伝授時の参の一つに位置づけられており、更に切紙が別に存在することと快庵派の参であることを注記している。

「卵形血脈并参禅」切紙は、上半分に描かれた「卵形図」と下半分に描かれた参(問答)とにより構成されている。「卵形図」は、日・月・星の星辰、地水火風の四大、男・女の両性、生・死等を配した図である。切紙の呼称の一つである「血脈」は省略されており、「仏祖正伝法 血脈伝授之日光龍」とのみ記されている。また、「私云、中之図五色^{三昧王}書」とあるように、「卵形図」が本来彩色された図であることがわかる。

下半分の参の内容は、前半と後半とに大別され、前半が三位説による解釈であり、後半が五位説によるものである。前半の三位説による解釈では、一つには、(一)母胎内のあること、鉄の境界、自己を謂い、二つには、(二)六相六識の形相を顯すこと、銀の境界、將軍位(智不到力)を、三には、(三)胎内の主相、那辺、禅人未顯の主、異中異の主を謂つ。後半

の五位説は、團児と代語との関係及びその典拠については、未詳とせざるを得ない。

「法衣伝授時之参」切紙は、光紹が相伝した、法衣伝授の意味問答体の参で注釈する切紙である。

(朱印文)「法衣伝授時参」

法衣伝授之時参

(朱印)「仏法僧宝」

夫以、仏々祖々^{相承}之法衣ト云ハ、譬ハ大師釈迦、迦葉法衣御渡給事、此法衣ト云ハ、八万四千条ノ御袈裟也、此ノ御袈裟ヲ持テ、迦葉給時、迦葉涙ヲ流シ、名曰「発露涕泣」、彼御袈裟者、在ニ母胎内時、此御袈裟裏ニ八万四千毛敷ニ、骨肉共ニ、一毛不^レ漏、此御袈裟ノ内ニ、被^ニ裏覆^一、不^レ得^レ犯^ニ一塵^一法^モ、是私^ニ名曰^一「衣衲」^ト、又此御袈裟、曰「仏祖不^レ依衣」、又曰「九条」也、是即母未生已前本来無縫之直衣也、生来以前、紫極宮中ト云^モ也、是、烏抱^ニ卵^一是也、在此中、纔借水火風空、又木火土金水ヲ具足スル者也、烏ストハ^レ云紫極宮中ノ主也、吾宗之密語密処也、人々須^{シテ}参得^{シテ}法衣頂戴者也、師、学人^ニ問^ク云、倒騎^ニ仏殿出^ニ山門時如何、学人合^{シテ}秘^{シテ}自^ニ参得^一、二問一答、口伝在リ、ウガノ一声也、又問、倒騎^ニ仏殿、意旨如何、学人欲出来^{セント}時、此内^ニ転却時節也、師云、山門トハ、出生スル処ノ門也、是名曰^ニ玉関^一、門出テ後如何、学人云、ト云ハ、法堂上草深一丈、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

又問、意旨如何、学云、「哆々啍々、師云、法堂産出スル生土也、又云、草深一丈ト云ハ、産時展^ニ両手^一、何物ニテモル時^ツキ啼々、是ヲ云也、此声響天地也、是清浄本然、無相之説法ト云也、又無相之杖払也、故^ニ生土^一名^テ曰法堂、今号^ニ法衣^一事、是^ヲ表也、然^レ問、法衣^ヲ染^ニ紫色^一、可^レ塔者也、右曹洞秘密之参話也、是曰^ニ伝授参^一也、

山門之話参得^シ羊、別在、能々可^レ参得^ク云々、
師云、看々山門騎^ニ仏殿、從^ニ道裡^一出、速^ニ道^一、^{伝々}

(朱印白文)「永明叟(花押版刻)」

この切紙は、永平寺所蔵『切紙目録』(『永平寺史料全書』
禅籍編第二卷No.39)に、「一、法伝授参」と見える切紙に相
当する。また、面山瑞方が著した『洞上室内断紙揀非私記』
所収「永平寺室中断紙目録並引」によれば、「法衣伝授参話」
「法衣伝授大事」という二種の切紙が永平寺に所蔵されてい
たことがわる。駒澤大学図書館所蔵「室中切紙臘写」(請求
番号「一七二 一七」)にも、「山門法衣之大事ノ法衣伝授時
参話」として、本切紙とほぼ同内容のものが所載されてる。

本切紙は、他の智堂光紹所伝の切紙同様、縦長の細い短冊
形に折り込まれ、その端裏に切紙の項目が付されているが、更
に他の切紙では押されていない「慧輪永明師」の朱印が存す
る。切紙の形式であるが、冒頭に切紙の名前が書かれ、第一

行目から二行目にかけて、三宝印が押されている。切紙は本来師資相承の伝授物であるら、その末尾には、相伝の日時、伝授関係が記載されのが一般である。しかし、本切紙では、相伝した智堂光紹の署名「永明叟」と、「慧輪永明禪師」の朱印、版刻の花押が押されているだけである。実は、光紹相伝の紙の形式は一定ではない。上掲の「一条紅線」(『永平寺史料全書』禪籍編 第二巻 No. 43)では、「于時寛文三庚辰九月廿八日ノ 永平廿八世御州和尚在判ノ 附授光紹老衲畢」とあり、相伝の日時と伝授関係が記載されているが、花押と朱印は押されていない。永平寺所蔵「永平和尚一枚密語」(『永平寺史料全書』禪籍編 一卷 No. 25)では、「御州在判ノ付与光紹老衲」と伝授関係が記載され、「慧輪永明禪師」「光紹高風」の二顆の朱印と版刻の花押が押されている。本切紙とほぼ同じ署名の形式の切紙としては、「元和尚黒衣之由来」(『永平寺史料全書』禪籍編 第一巻 No. 26)「宗旨秘書」(同上 No. 27)があるが、これらの切紙との間にも少異が見られる。ちなみに本文全体には朱点が付されており、人名には朱線が引かれている。

次に内容について見てみたい。「切紙目録」「伝授室中之物」(『永平寺史料全書』禪籍編 第二巻 No. 14)には、伝法に関する儀軌関連の切紙が多く記載されていることは指摘した。嗣書の伝授を中心とする儀礼が「小儀規」と呼ばれるのに対

し、「大儀規」とも呼ばれる『菩薩戒作法』の伝授が嗣法を前提とするとされたが、江時代中期以降、室内伝授物を嗣書・血脈・大事の三物として定着していく。一方で「天童如浄禪師、道元和尚法論」等の切紙に見られる、芙蓉道楷の法衣・竹篋・白払・宝鏡三昧・五位顯訣等の相承があったとする伝承も存在する。室内伝授附法の状況を伝える最も古い記録は、永寺二世懷奘と徹通義介の師資の間に交わされた問答も含む『永平開山御遺言語録』であり、全体は三段の構成になっている。前二段は歴史叙述的性格を有する部分であり、建長五年(一二五三)四月二十七日より翌建長六年二月二十四日の嗣法完了に至るまでの具体的な儀礼の記録である。第三段部分はさらにこれに、嘉暦三年(一三二八)正月二十九日に、大智が瑩山紹瑾の直筆の『仏祖正伝授受儀式』を、「浄住和尚(無涯智洪)」より拝借して書写したもので、内容は嗣法儀礼そのものである。そこには、「伝衣作法」として、以下のように見える

伝衣作法 先卓上安袈裟、安師右辺、資向レ師問訊焼香三拜、師寄拜、拜了、師両手取袈裟、度与資、資両手受衣、頂戴有法語、法語罷、換自衣度侍者、掛伝衣、掛了向レ師問訊出、

次に、付法状に見える法器の一つとして、重要視されたのが袈裟であった。「伝衣作法」として、「袈裟之切紙」が永平

袈裟偈曰、善哉解脫服、無相福田衣、我今頂戴授、世世得披、

[illegible]

○青色衣、赤色衣、黑色衣、金黃色衣、

青黄赤黑白云、五色和合紫極衣也、上衣也、是ヲ謂上衣也、因縁曰、是阿部大日和合也、凡神道二八、衣那、千葉屋、千盤屋之三字、太多羅神目、阿耨多羅神目、此衣那云、五姓也、三八、三部大日、三部者、金剛界・胎藏界・中道也、仏道名袈裟、三世諸仏解脱幢衣云、三衣共崇此衣那、一、九条僧伽衣、二、七条優鉢陀羅衣、三、五条安陀羅衣、四、十三条阿耨衣、五、二十五条菩薩衣、天二十八宿、地三十六萬、七曜、九曜、一万三千六百五十四神、荒神、衣那也、同袈裟ノ参禅在之、可秘々々、

（永平白文・廣教寺御印）（永明文・光嚴院）
永平念九世 永明叟（版刻花押）

袈裟は「三衣一鉢」といわれるように、僧尼の衣食のために保持を許されるものの内、その衣服をさして言う。僧尼の生活法具として六物や八物・十八種物のいずれにも含まれ、清規等にも、禅僧の所持物として例外なく明記される。この「衣（袈裟）」がある時期よりその所伝の法の象徴「伝衣」として、またその法の相承の正当性の証である「法信」としての意味が付与されるようになった。中国では神会が提唱した「法信」としての袈裟の觀念がその後も受け継がれており、

日本における禅宗宣揚の嚆矢となった達磨宗の大日房能忍（一一九四頃）も、中国阿育王山の拙庵徳光より、達磨の頂相等とともに法衣の相伝を受けている。道元もまた中国留学から帰国するに際しては、芙蓉道楷（一〇四三—一一一八）以来師資により相伝され、如浄に至ったとされる青黒色の袈裟を伝授されており、切紙史料においても、「元和尚黒衣之由来」（『永平寺史料全書』禅籍編 第一巻 No. 26）として取り上げられている。道元は、『正法眼蔵』「伝衣」や「袈裟功德」を撰述して、衣法一如、仏袈裟としての位置付けを行っているが、特にその功德を強調し、袈裟の著け方、受持の仕方、衣財、袈裟浣洗の法、種類、十種の勝利等を示し、仏袈裟の正伝性を強調したとされる。

また、出家得度に際して、袈裟を伝授することの儀礼は、例えば埼玉県正龍寺所蔵、三世格叟寅越（一一五八七）所伝の「出家略作法文」に「授衣鉢加法」が付記されていることから確認できる。

貞享五年（一六八八）三月、東京都府中市の高安寺九世大器傳禪（一一七二）が同寺八世普岩言説（一一七〇四）に伝授した「三国相伝福田切紙」には、袈裟が福田衣と別称される由来と、その相伝着用の功德が示されている。

（端裏）三国相伝福田切紙

祇夜経曰、阿難白レ仏言、袈裟之体又以レ何作、仏曰、靈山

有_レ田号_二福田_一、故_二下_レ種_一一度_カ、効_二七度_一也、実長_ケ一寸五分也、食_レ之者無_レ病患、故_二此田_一形_リ袈裟_二号_二福田_一、故食物之時不_レ掛_二袈裟_一者、是掃_レ食鹽_一、云云、退身而以不_レ可_二同座_一、云云、雖_二同罪_一、同座_{スル}者重罪之者也、云云、雖然着_二仏袈裟_一法衣者、仏身者也、如_レ是儼爲_二出家_一者、能_レ々可_レ憶着_一也、

天童山景德禪寺住持如浄大和尚、謹_テ伝_二附道元_一既_二畢_一、元和尚御飯朝以來、永平寺_ヲ御建立在而、伝_二附懷辨_一而、其_リ以來、也_テ代々流伝_{シテ}、今到_二三当門家岩_一伝_二附既_一畢、尽未來際護_二此垂戒_一保護給_フ、謹燒香奉九拜者也、云云、

于時貞享五戊辰年二月吉辰

家岩比丘示之

(印)(印)
保禪九拜

岩手県正法寺所藏『仏祖嫡伝聖財之巻』(享保年間書写)には、「伝衣」に関する月泉派相伝の切紙が記録されている。

此衣表信、

此一袈裟三世諸仏道場_ニ、衆生著_二仏伽利_一於体則、爲_二無相_一之褊衣_ト、然者便有相之凡身_ハ、無相之心_{ナリ}、迦葉尊者著_二袈裟_一於体_ニ則、万像森羅_ト与_二人々_一這裏、無_二更_一差_一、若有_レ差則、有_二生处_一麼、有_二死处_一麼、山雲海月表_二肩上衣_一也、慧能曰、此衣表_レ信、豈_レ可_二以_レ力争_一哉、

不思善不思惡、正当与麼時、那箇是明上座本来面目、本来衣

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

也、

五条、五体也、七条、七識、九条、九穴、四点衣四体、合而二十五之菩薩、相分而呈_二四衣_一、四大分離、本身露現、恙々出身、以爰号瑞衣、真是成仏作祖云云、

坐具是般若、

右以四天王護法、具法身性、一坐具、十方仏土中、唯一乗法、虚空無辺、四王諸仏迷、爰諸祖錯、是於爰拜、違則不就仏、不就法、不就師、不就我、礼拜常如是云云、

宋紹定元年九月一日 天童如浄援道元

伝衣図

(図省略)

八木田_ニ記_一字者、八相三昧福田、米字、無始無終、大般涅槃境界也、披_二此衣_一時、唯有一人独尊_ス、其_リ人_ノ言句、一切皆_二獅子吼_一也、

永平和尚伝 坐具文曰、

善哉尼師壇、諸仏所受用、願共一切衆、常坐於其中、右此坐具者、三世諸仏之金剛座也、登_二此座_一者、正_二坐于金剛座_一、三惡四趣之怖畏無_レ之、

五条衣者、表_二五仏_一、顯_二五智_一、二_ノ中_ニ五仏住_一在其_リ中_ニ、故_二此_一袈裟者、離_二五欲_一、斷_二五煩惱_一、得_二五神通_一、滿_二五智德_一、

三世諸仏相伝袈裟也、故曰行道衣、曰作務衣、一切時中用此袈裟、故又曰安陀会、此翻常住衣故、今日授、七条衣者、表七仏、顯七菩提、七聖財、七等覺支、皆在此中、是号食衣、持此袈裟衣者、法善禪悅之食、飽滿心中、故外離七遮罪、内得七種善、此袈裟者、二百三十五仏縫顯也、是三世諸仏相伝之袈裟也、故今授之、九条衣者、三世諸仏之說法衣、上自二十五条、下至九条、合為一衣、持此袈裟者、上中下俱九条也、表如来九識円備之智体、此衣者、三百五十仏縫顯、持此衣者、離九界妄心、到究竟妙覺之果、是三世諸仏解脱幢相之袈裟也、故今授之、

延文元年八月時正月在妙莊嚴院伝之良詔

紹續判

夫受衣者、我宿ニ母体内ニ九月也、其間修理次第シテ、謂受衣作法ト、又謂之受持衣ト也、然袈裟者、我レ在ニ母体内ニ九月、其間消息次第顯レ也、当ニ三月ニ、謂之葛麻、取レ之表ニ四條ノ坐具、五月ニ分テ一長一短五條也、謂之掛絡、七月分テ兩長一短七條也、謂之飯衣、九月分テ四長一短九條也、謂之大法衣、已上合シテ二十五條也、四・五・七・九條也、皆是宝心三昧ノ内ノ消息、亦五大出入息、柯纏無明ノ凡夫ノ緒也、表レ之為法衣ニ筋ノ緒、環者是レ我カ此ノ一心法ノ正体也、夫血脈者、我此一心法正体信受、謂正伝血脈ト、相ニ続

此血脈、我此宝心至三十二相、儀、血脈正伝之道場ナリ也、又上ニ下ニ上、背ニ面ニ背、搭ニ袈裟、此一事無所不通義也、

正保四丁亥年夷則下旬、於洞谷山前正法良周和尚伝授此旨、ここでは、袈裟に付隨して「坐具」が取り上げられ、「永平開山御伝坐具文」を引用している。この切紙と同内容ものが、天文十九年(一五五〇)十月十一日に建福寺各叟正越より伝授された、長野県上田市龍洞院四世千照鏡(正)珊所伝の「永平開山御伝坐具文」と題する切紙である。

永平開山御伝坐具文曰

善哉尼師檀、諸仏所受用、願共一切衆、常座於其中、此座具者、三世諸仏金剛座也、登此座者正座金剛、惡四趣之怖畏無之、五条衣者、表五仏顯五智、三十五仏住在其中、故者、此袈裟者離五欲、斷五煩惱、得神通、端五智得、三世諸仏相伝袈裟也、故曰、行道衣、又云、作務衣、一切時中此袈裟故今日受之、七条衣、表七仏、顯七菩提、七聖財、七等覺支、智在此中、是号食衣、將此袈裟者、法善禪悅之食、心中滿故、外離七遮罪、内得七種善、此袈裟、二百三十五仏縫顯、是三世諸仏相伝之袈裟也、受之、九条衣、三世諸仏之說法衣、上廿五条、下至九条、合為一衣、持此袈裟者、上中下九條也、持九条者、如来識円備之智体、袈

袈三百五仏縫頭、持此袈裟者、離九条界之志心、至究竟妙覺々果、是三世諸仏解脫幢相之袈裟也、故今日受之、

廿五条 一九条 十三条

上三衣 廿三条 中三衣 十七条 下三衣 十一条

廿一条 一三条 九条

鉢孟曰、此応量器者、三世諸仏了持鉢也、是七種有金銀銅鉄九石木、此七種合為一鉢、伝迦葉、持此鉢者、現世得福樂、未來不違三惡四趣之飢饉之難、無上菩提成就、法喜禅悦之食飽滿故、今汝受之、

又永平開山之垂誡云、槌高五寸、口四寸、柄三寸五分、口一寸許、槌八角、但四面広、四角狹也、鉄尺定有説、槌高八寸、口六寸、八角也、柄四寸、八角也、口二寸也、都合鉄尺砧高二寸五寸、口九寸、或八角、或一円也、柄穴不鑿透中可留

前建福格叟正越(朱印二顆)(花押)

于時天文十九年十月十一日 正珊書之 当山二代

正龍寺九世普満紹堂(一六〇一―七六)は、永平寺二九世鉄心御州より授与された多くの切紙を相伝しており、そこには永平寺室中より直接に伝えたとの記事が見える。「衣鉢血脈伝授作法」も普満所伝のものであり、伝授作法とはあるが、内容は袈裟の田相や、鉢を黒く塗る意味、血脈についての口訣を一枚に記したものである。

(端裏) 衣鉢血脈伝授作法

衣鉢血脈伝授作法

一、受衣トハ、我レ父ノ体中ニ宿スルコト九十日也、其日數ヲ過テ、母ノ胎中ニ入テ宿スル事九月也、其間ノ修行ノ次第ヲ、受衣ノ作法ト云也、畢竟衣ハ衣那ヲ表スル也、亦衣那荒神ト云有リ、是ハ身命ヲ守ル魂也、是ヲ氏神トモ云也、人身ヲ不レ失神也、其袈裟トハ、我レ母ノ胎内ニ宿スルコト九月也、其間ノ消息ヲ露也、七曜・九曜・廿八宿、三月ニ当ルヲ、カツマフト云也、是ヲ取テ四条ノ坐具ト表也、五月ニ当ル分ヲ一長一短ト云テ、五条衣ト作シ、是ヲ小衣ノ掛落ト表也、七月ニ当ル分ヲ両長一短ト云テ、七条ノ衣ト作シ、是ヲ食衣ト表也、九月ニ当ル分ヲ三長一短ト云テ、九条衣作シ、是ヲ大衣・法衣ト表也、皆是ヲ取合テ、廿五条ト云也、是皆宝心三昧ノ消息也、亦五大出入ノ息ヲ命緒ト云也、此出入ノ息ヲ袈裟ノ二筋ノ緒ニ表シテ露也、亦衣ノ色ヲ黒作スワ、声識ノ黒ヲ表ス、

(中略)

従永平室中之直伝

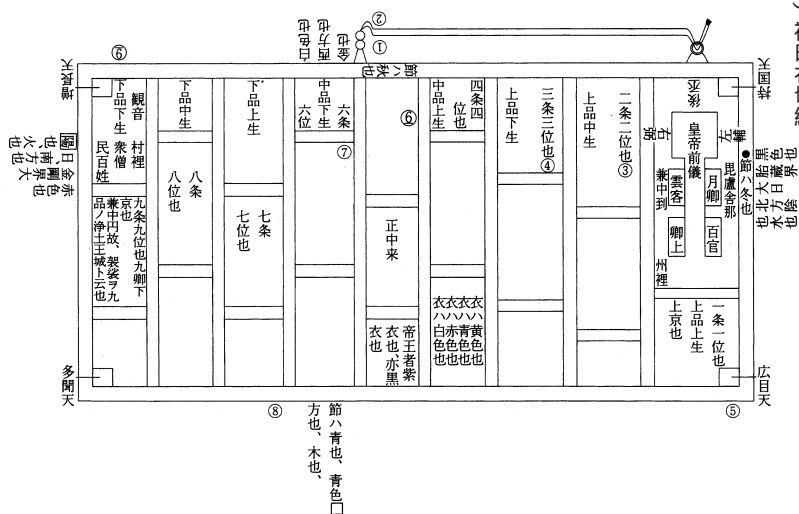
詔堂拜

曹洞宗における袈裟功德の意義は、基本的には道元の著作に求められるが、さらに中世における秘密相伝の風潮を受けて、袈裟の象徴性は「袈裟大事」の切紙において顕著となる。普満には、二種類の「袈裟大事」関連の切紙が相伝されている。正竜寺所蔵の「福田衣切紙」は、袈裟(九条衣)の田相

を具體的に提示して、五条・七条・九条（二十五条の別や袈裟を結ぶ緒、衣の色について記し、さらに四隅の角帖を四天王に配し、周縁を五行説で意味付けしながら四季・五色を併せて配し、田相の各部位（壇隔）を朝廷や内裏の構造の譬喩で解説しようとしたものである。更に、その説明には五位説や「三裡底（州裡・県裡・村裡）」等の曹洞宗旨も援用されている。ちなみに、各箇所に加えられた解説は、整理番号（ ）を付して別に本文を示す（但し は内容的に繋がっている）。

（端裏）「福田衣切紙」

図(4) 福田衣切紙



袈裟ノ緒トハ、胎内ニ居時キ、^(ホカ)ソノ緒ノコトダ、鉄緒、

珠數ノ緒、何レモ是ヲ表スル也、亦山伏ノカイノ緒モ同シコト也、

袈裟ノ數者、捻而五条・七条・九条・十一条・十三条・十五条・十七条・十九条・廿一条・廿三条・廿五条也、

五条者行脚衣、七条者食衣也、九条者說法衣也、廿五条者、仏之人滅之時、附阿難給法衣也、

内裡工ノ徑ヲ云フ、丹墀ノ沙石ト云ハ、シラスノコト也、ソノシラスヲ透テ、月卿・雲客工申ス也、其後、前儀・後叟・左輔・右弼工申「」是ヲ内裡ノ四天ト云也、此ノ方々ガ、帝王工申「」亦禁中ヨリ官ヲ給ルニ、槐ノ字ヲ如何、

密力^(密カ)テ出ス也、先左大臣・右大臣ノ庭ニ蓮池アリ、此ノ池デ、頂キヲ洒テ官ヲ作スニ依テ、草文槐門ノ字ト云也、前儀者、「」後叟者、近衛ノ位、左輔者右大臣ノ位、右弼ハ左大臣ノ位也、

祇夜經云、阿難白仏言、袈裟ノ体ハ、夫レ以何作ケ、仏曰、靈山^ニ有レ田号ニ福田、下^レ種^ヲ一度、苾芻^カ七度也、実^ニ長サ一寸五分也、食^レ之者無^ニ病患、故^ニ此ノ田ヲ移シテ袈裟ニ号ニ福田、故食物ノ時不^レ掛^ニ是袈裟ノ者ハ、是弘^ニ食量、云云、退身而以不可同座、雖^ニ同座^ヲ、却同座者重罪謂、

着袈裟者、此義能ク可憶着、
畢竟卮字也、順逆合^シタ時、用「」亦一円相之用「」也、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

正左順也、

善知識、中品中生ヲ大内殿^{ヲウチノ}「」洛中デ八大内殿ガ内裡ヲ守護シ、亦天下京中ヲ儘^{ヲウチノ}ニスル故ニ中二居

也、如是釈迦モ向上向上下ヲ不欠故ニ、天上 尊トヲセラル、也、夫レニ依テ、中ニ取ル也、善知識モ過去・現在・未來共ニ沙汰スルニ依テ、心ニトル也、

廿五条ヲ分而、九条・五条・三条・一条ト作ケ、九条者說法衣、七条者食衣、五条者^(行カ)持而洛^ニ行街衣、三条者作^ニ坐具、一条者鉢袋ト作ス、是合而ニ二十五条也、

大毘婆娑論云、袈裟在^ニ一仏土、日月世界也、先九条ハ三百五十仏之道場也、七条者、二百五十仏道場也、亦五条者、百三十仏之道場也、金縷之糸 之袈裟者、憍曇弥織給、憍曇弥者釈迦之伯母乎、

如淨和尚附道元

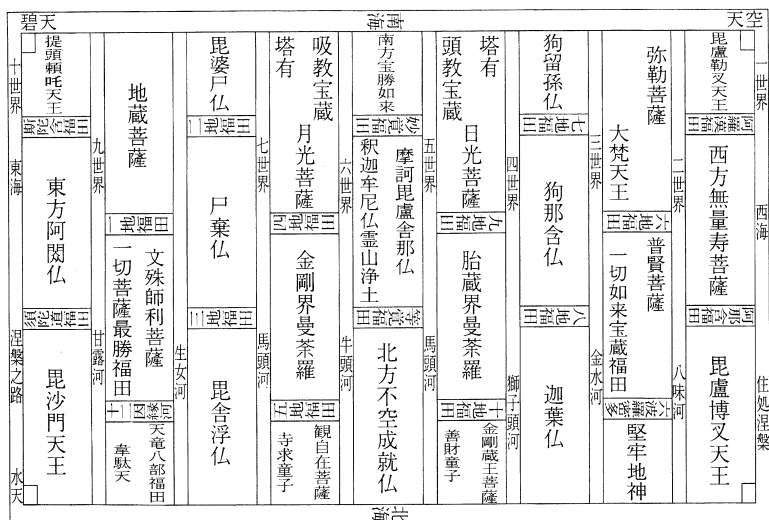
從永平室中直伝

詔道拝

ちなみに、石屋派に属する佐賀県武雄市円応寺にも、同内容の「福田衣切紙」が相伝されている。

また、光紹智堂所伝の「袈裟切紙」と同じ内容を持つものに、普満所伝の「袈裟大事」があるが、両者の間には仏菩薩や諸天の名称に異同が見られる

図(5)



從永平室中直伝

詔道持

二六八

この切紙は、袈裟の各条の田相(壇隔)、周囲の四縁、各葉等に、過去七仏をはじめ、諸仏・諸菩薩・金胎両曼荼羅・諸天・宇宙世界を配し、袈裟一領の上を一つの宇宙に見立てたものである。西明寺所蔵「九条衣之図」(書写年不詳)は本切紙の図とほぼ同様であるが、更に別紙にて、以下のよう

道公師来訪、以ニ仏祖正伝袈裟、図一本ヲ示ス、予踊躍シ而生ニ希有、僧ヲ拜ニ問、スルニ之ヲ作スニ長一短九条衣ト也、仏菩薩諸天等、皆画像也、画像之傍ニ書セリ諸仏ノ宝号諸天ノ名ト也、予以ニ布下品ノ九条衣ヲ書ニ写ス之、然レモ不能レ画、スルニ、仏菩薩之像ハ、以ニ此相ヲ直ニ画シ宝号ヲ諸天ノ之像ハ、以ニ此相ヲ書ニ其名ヲ拝覽セシ者ノ并レ之ヲ、即今字ハ与レ画相去ル、多少ッ矣、若不ニハ其人ニ、不レ許濫ニ拝覽シ書写シ流伝シ披在一ニスルコトヲ笑、知ル者珍レセヨ之、々々

右九条衣之裏書ニ在之間、写留置者也、

丑六月吉日

宋仙 謹誌

この記事に拠れば、「袈裟大事」切紙は、原初的には「袈裟曼荼羅」と同じく画像と宝号とによって表されていたことがわかる。それがやがて宝号のみで表現されるようになり、諸仏諸菩薩と諸天とを区別するために朱筆によって記号が冠されることとなった。しかし、西明寺蔵「九条衣之図」にはそ

の区別が残るが、光紹智堂所伝のものや普満所伝のものではそれが失われつつある。

更に田隔の数を増し、諸仏諸菩薩諸天の数を増したものに、静岡県島田市静居寺所蔵「袈裟（二十五条衣）大事」（仮題）がある。

こうした切紙の先駆的存在としては、袈裟の各田相に仏・菩薩を示す梵字の種子を配した「袈裟曼荼羅」があげられ、鎌倉末期の版木摺刷物の存在が確認されている。

永平寺所蔵の「切紙目録」に、「一、袈裟之大事」と見えるのが、この光紹所伝の切紙に相当すると思われる。面山瑞方は「洞上室内断紙棟非私記」において以下のようにいう。

九条衣密伝断紙

面山謂、作「九条衣図」、縁書「須弥四洲名」、又書「五仏名号・四天王名号等種種事」、又引「祇衣經」云、靈山有「田名」福田等、皆是好事者之妄案也、欲知「三衣義」、則須「熟覽正法眼蔵袈裟功德卷等」、祖師未「拳之難説」、一切勿「用焉」。

「九条衣図」は、好事家の偽作捏造であり、三衣の真実義を知ろうと思うならば、「正法眼蔵袈裟功德卷」を熟読すべきであるとする。この「袈裟切紙」と関連するものは、やはり光紹智堂が相伝した永平寺所蔵「法衣伝授時之参」が挙げられる外「袈裟心伝大事」、「法衣伝授大事」、「衣鉢血脈伝作法」、「緒環之参」、「福田衣之参」等が永平寺室中に相伝さ

れていたことが確認できる。

五、「室中切紙臘写」について

永平寺において相伝されてきた切紙の総数からすれば、上述した叡州が記載したものは、その一部分でしかない。その全体像を推測するために、永平寺第二七七世高国英峻（一五九〇—一六七四）が作成した「切紙目録」（光紹智堂所持）を中心として関係史料との対照表を後に掲げた。

駒澤大学図書館蔵「室中切紙臘写」は、三十八世承天則地を下限とする永平寺に現存していた切紙を後に臘写したものであり、その殆どが鉄心御州から光紹智堂へと相伝されたもので、総計五十一種の切紙が取り上げられている。その目録を掲げれば以下の通りである。ちなみに、埼玉県寄居町正龍寺には、やはり御州より普満韶堂に伝授された切紙が現存している。

- (1) 嗣法之儀記、(2) 嗣法論、(3) 傳法之儀軌、(4) 嗣書地網之様子、(5) 傳授前巡堂之次第（高国英峻「切紙目録」ナシ）、(6) 佛布施之法（高国英峻「切紙目録」ナシ）、(7) 十佛名切紙、(8) 三寶印（嗣法之印籠相傳時之一紙）、(9) 三寶印之大事、(10) 傳儀加行、(11) 面授之参（高国英峻「切紙目録」ナシ）、(12) 宗旨秘書、(13) 七佛傳授戒法之一枚紙（心田之話・五相之圖）、(14) 二度傳授参、(15) 佛祖正傳正法

眼藏血脈、(16) 嗣書袋圖(并拂子・竹篋寸尺)(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(17) 血脈袋之大事(子狐トモ)、(18) 住山之大事、(19) 施餓鬼之切紙、(20) 御大事事看經・回向、(21) 道場莊嚴之圖、(22) 嗣書袋圖(并拂子・竹篋寸尺) 前出(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(23) 竹篋切紙、(24) 遺誠之偈、(25) 鎮守切紙、(26) 五位之別紙亦五体五輪之圖、(27) 龍天受戒作法(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(28) 白蛇切紙(帰朝本則)、(29) 安座点眼、(30) 開眼点眼切紙并塔婆点眼、(31) 山神授戒 白山也、様子ト図アリ、(32) 白山妙理大権現切紙、(33) 山門法衣之大事 法衣傳授之時參話、(34) 米門之切紙、(35) 消災咒之記文并一返消災咒之切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(36) 一返消災咒切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(37) 己之切紙、(38) 無之切紙、(39) 四句文之切紙、(40) 身心脱落、(41) 竹篋・拄杖參話并注脚、(42) 拂子、(43) 多子塔前傳附之作法(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(44) 銀箱鎖子之切紙、(45) 合封折角之切紙、(46) 先師取骨之大事、(47) 廟移作法、(48) 龜背宝塔密紙圖、(49) 洞山門下牌塔相續之事(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(50) 非人亡者之事、(51) 天痘病之事(高国英峻『切紙目録』ナシ)、

次に、面山瑞方『洞上室内断紙棟非私記』についてみてみたい。本書所載の「永平寺室中斷紙目録並引」の記事に依れば、

延享二年乙丑夏、余寓「永平寺」之承陽庵、五十餘日。請「室中法寶」周覽、中有「斷紙一百四十餘通、逐一拜讀「目録」以備後鑑、皆是代語者之妄談僻說、而無一補於宗門」者也。とあり、延享二年(一七四七) 面山が閲覽した当時、永平寺室中には、「斷紙二百四十餘通」が現存していたことがわかる。以下、その項目を挙げる。

(1) 過去七佛血脈、(2) 應身録、(3) 國王歸敬之本地、(4) 過去七佛心字參、(5) 龍天授戒陰陽祕密之妙儀(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(6) 白山妙理斷紙、(7) 鉈切斷紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(8) 龍天十八名號切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(9) 三國一位之血脈、(10) 奥藏之圖(高国英峻『切紙目録』ナシ)

右十通

(11) 六祖示青原半紙大事、(12) 三國流傳之圖、(13) 天竺一枚紙、(14) 洞山五位切紙 亦名五體五輪圖、(15) 三身大事切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(16) 三老普門大事 釋迦文殊彌勒、(17) 道元嗣書不同切紙、(18) 牌塔之儀式(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(19) 牌塔相續切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(20) 正法眼藏五輪碎切紙、

右十通

(21) 正傳始末切紙、(22) 太陽眞實參話、(23) 戒文傳授參 代語、(24) 戒文拈提參 代語、(25) 袈裟大事圖、(26) 袈裟心

傳大事、(27) 手形切紙、(28) 法衣傳授參話、(29) 法衣傳授大事、(30) 衣鉢血脈傳授作法、

右十通

(31) 緒環之參、(32) 福田衣之參、(33) 曹山八圖圖、(34) 宗門五位圖參(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(35) 勃陀勃地斷紙、(36) 光明迷參、(37) 曹洞機切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(38) 一中十位切紙、(39) 七堂伽藍圖切紙、(40) 佛祖正傳菩薩戒血脈最極上大事、

右十通

(41) 曹洞三種訓訣、(42) 佛頂上圖相圖切紙、(43) 四處半夜之圖參、(44) 兩鏡圖大事、(45) 阿字大事(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(46) 拈華微笑訣參、(47) 大善知識頂上三世了達圓滿一切紙、(48) 卍字大事、(49) 卍字切紙 卍字八七ノ字十ノ字ト云フ、(50) 卍字之圖、

右十通

(51) 鎮守切紙、(52) 諸行無常四句切紙、(53) 續松秘要參、(54) 續松切紙、(55) 襪子切紙、(56) 鷲鷲切紙、(57) 善知識切紙、(58) 團扇切紙 永祖歸朝天童ヨリ餞ト云コト(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(59) 二本柱切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(60) 露柱切紙、

右十通

(61) 天童一紙大事、(62) 大陽卵形晃龍圖斷紙、(63) 宗旨祕書、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

(64) 元和尚黒衣由來、(65) 臨濟曹洞兩派血脈、(66) 濟下一條紅線切紙、(67) 天上上梵天皇御即位大事 上梵八淨飯(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(68) 二句偈嗣書 周穆王達磨聖太子、(69) 二句偈傳授血脈竝十如是大事

右十通(九通ノミ)

(70) 亡者靈供切紙、(71) 亡者靈供切紙 龜前熱田明神ニ上ルコト本地不動明王ト云コト、(72) 住持焼香切紙、(73) 念佛切紙、(74) 銀錢馬形切紙、(75) 竹篋切紙、(76) 拂子切紙、(77) 銀箱鎖子切紙、(78) 米門切紙 松ト梅ト椿ト牡丹トノコト、(79) 三寶印切紙、

右十通

(80) 三寶印大事、(81) 龜背寶塔切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(82) 竹篋拄杖參話竝圖、(83) 臨濟三句切紙、(84) 劔刃上切紙、(85) 天童山樹上切紙 大極ト五位ノコト、(86) 三悟道同切紙、(87) 身心脱落切紙、(88) 脱落脱落切紙、(89) 脱落身心初、

右十通

(90) 無一切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(91) 八句祕密切紙 一段光明著語(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(92) 祖師禪嫌道話切紙、(93) 祖師禪切紙、(94) 道元十三則目録、(95) 十八般妙語圖、(96) 州縣村切紙、(97) 馳書不到家大事、(98) 三位大事(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(99) 君公書切紙、

右十通

- (100) 拈奪略三事切紙、(101) 十八般妙語 片仮假名、(102) 誰圖大事黒圖、(103) 頂門眼切紙、(104) 御大事看經回向切紙、(105) 住山大事切紙、(106) 遺誠偈大事、(107) 二度傳授切紙、(108) 梅華嗣書切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(109) 人人具足圖切紙、

右十通

- (110) 面授參事(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(111) 嗣書地絹切紙、(112) 竹篋拂子拄杖尺寸切紙、(113) 先師取骨切紙、(114) 十智同眞切紙、(115) 十三佛血脈切紙、(116) 四十九餅本位切紙、(117) 達磨知死期之祕密、(118) 佛誦最第一功 圓満知死期經 金剛智三藏譯偏經也 (高国英峻『切紙目録』ナシ)、(119) 向上了畢判出切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、

右十通

- (120) 參禪了畢證文(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(121) 血脈道場儀式、(122) 四恩參、(123) 晦朔弦印切紙 月圖、(124) 八師次第切紙 傳法師傳戒師受戒師參學師言行師依止師学得師右妄説也、(125) 十二字切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(126) 知識三箇行話、(127) 天童山禪定規 無準作ト云妄説ナリ(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(128) 多子塔前傳付作法切紙、(129) 傳戒加行切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、

右十通

- (130) 傳戒道場次第注脚切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(131) 傳戒道巡堂切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(132) 室中儀軌參(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(133) 文殊手内一雀經 一名佛説三身壽量無邊經コレ偏經ナリ、(134) 臨終人問答切紙、(135) 九識圖満切紙、(136) 月有兩箇切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(137) 大藏法數要略之圖(高国英峻『切紙目録』ナシ)、(138) 天童與道元問答嗣法論 妄説也、(139) 三段訣切紙(高国英峻『切紙目録』ナシ)、

右十通

- (140) 縁思寂一冊 右大陽付浮山書芙蓉道楷序妄作之書也、

寛延二年仲春二十八日

永福方面山記

上記の「永平寺室中斷紙目録並引」の記事と高国英峻『切紙目録』の記事とは、相互に異同が見られる。

次に『參禪切紙 後卷』(故古田紹欽氏所蔵¹³⁾)を取り上げてみたい。本書は光紹智堂所持の切紙を集成したものであるが、御州とは異なる系統の伝授を受けていたことが確認できる。

- (1) 壹、圓相參、(2) 二、合封參、(3) 三、傳授參、(4) 四、相承參、(5) 五、印可參、(6) 六、摩頂參、(7) 七、四句文參、(8) 八、勃陀勃地參、(9) 九、證淨訓訣、(10)

十、鉄漢大事参、(11) 十一、嗣續鉄漢参、(12) 十二、鎮守参、
 (13) 十三、三喫茶、(14) 十四、念誦参、(15) 十五、二句偈参、
 (16) 十六、嗣法論大事、(17) 十七、宗旨向上勘弁正法内意、
 (18) 十八、国王授戒参付置天授戒、(19) 十九、空塵書圖抄、(20)
 二十、安座點眼大事、(21) 廿一、見性之大事、(22) 廿二、住
 山眼大事、(23) 廿三、死灰参、(24) 廿四、三箇劔大事、(25)
 廿五、血脈圖相大事、(26) 廿六、亡靈授戒偈、(27) 廿七、死
 母別腹大事、(28) 廿八、大姉血脈、(29) 廿九、續松之切紙、
 (30) 卅、下炬之切紙下炬證文、(31) 卅一、鎮守之参、(32)
 卅二、寶鏡三昧、(33) 卅三、達磨傳法偈、(34) 卅四、達磨知
 死期偈、(35) 卅五、甘露卷、(36) 卅六、印籤、(37) 卅七、三
 說大死底本則、(38) 卅八、太白峰記、(39) 卅九、榮西記文、
 (40) 四十、太陽玄銀箱鎖子、(41) 四十一、救龍偈、(42) 四十
 二、孝典之因縁、(43) 四十三、自家訓訣、(44) 四十四、九ヶ
 条結縁傳授、(45) 四十五、續松参、(46) 四十六、釈迦戒四鉢、
 (47) 四十七、上來圖、(48) 四十八、祝聖切紙并通一紙、(49) 四
 十九、祝聖焼香傳授、(50) 五十、了菴御修行、(51) 五十一、
 住吉五ヶ条託宣、(52) 五十二、山門切紙、(53) 五十三、證淨
 鉄漢之大事参共、(54) 五十四、祖師神切紙、(55) 五十五、幽
 靈留切紙、(56) 五十六、御影画像書様、(57) 五十七、嗣書疊
 様之次第、(58) 五十八、満字切紙、

本書は残念ながら、零本であり、乾本を欠いているが、永平

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

寺における切紙相伝を考察する上でも、また光紹の教学的背
景を知る上で極めて重要な史料である。

(1) 叢、圖相参

相ヲ云へ、代、無始無終テ走。師云、無始無終ノ時如何、
良久云、今處遮那佛。

亦一ツノ圖相ヲ云へ。無始終テ走。師云、無始無終ノ時如
何云、三世諸佛テ、如何トモシタカウ走、

師云、佛陀勃地ヲ云へ、云、佛陀佛地ニ至テ走。師云、佛地ヲ
云へ、云、一心、師云、一心ノ通ヲ云へ、云、佛祖ノ命脉、

「慧輪永明禪師」
(朱印白文)

付囑底ノ功ヲ、云、續ハ是功、紹了非其功、不紹底ノ功ヲ、云、
葵花向日、柳絮隨風、師云、何ト風ハ隨ウタゾ、云、東力
ヲ吹ケバ西ニ、南力ヲ吹ケバ北、師云、何タル境界タゾ、云、
無心全提、無心ニ攀テ走。師云、無心全提無心ナラバ、魚ヲ食
シ、シヨキヲツカウタモ、無心ナラウスカ、何トテ鬚髮ヲ除テ
袈裟ヲバ掛タゾ、云、無(4オ)

(2) 二、合封参、

合封参・傳授参・相承参・印可参・摩頂参 大事合封参、師
云、何ヲ合封シタゾ、云、佛陀勃地、師云、合封シヤウヲ、云、

閉閑目良久、師云、合ノ一字ガ聞エヌゾ、云、手ヲ合、口ヲ開ク様子在、

(3) 三、傳授參、

傳授シ様ヲ、速礼三拜、師云、誰ヲ拜シ誰ニ授与シタゾ、云、一心當著、走、師云、當著ヲ、学、師ノ脇ニ立テ又手ヲ

(4) 四、相承參、

相承ヲ云ヘ、速礼三拜、師云、何トテソレガ相承デハアルゾ、云、以心傳心、

(5) 五、印可參、

印可ヲ云、速礼三拜、師云、何トテソレガ印可デハアルゾ、云、施為運動是心印、

(6) 六、摩頂參、

摩頂ヲ、云、以頭圓相ヲチツ、自己ヲミル、師云、ソレガ何ントテ、摩頂デアハルゾ、又如前攀ス、師云、マタモ聞エヌゾ、云、探頭太過、(4ウ)
大事ヲ、云、トウ、タラリ、ララリ、リドウ、畢竟、イロハニホヘト羅々哩々囉々囉、

此參、傳後ニ早不可許、以是宗旨深密アル事ヲ知、早免許フルト、宗

門之破滅也、此秘參上足可為一人也

(7) 七、四句文參、

- ・師云、勃ヲ、・資云、佛、諸行無十八泥也
- ・師云、陀ヲ、・資云、法、是生滅法、
- ・師云、勃ヲ、・資云、僧、生滅々已、
- ・師云、地ヲ、・資云、實、寂滅為樂、
- ・師云、畢竟ヲ、・資云、作シテ一圓相ヲ良久(5オ)
- ・師云、其攀著之心ヲ、當人ニ成テ道工、・資云、我今盧遮那佛、

(8) 八、勃陀勃地參、

- ・勃陀勃地之參、
- ・師云、勃地ヲ、・資、師ノ前ニ片足踏出而云、阿部曇、總而四句文ヲ不レ參、不レ可レ致引導ヲ、

代々任置如斯云々

(9) 九、證淨訓訣、

證淨訓訣參

天童山如淨禪師云々、仏法ハハ者、秘シ非秘アルニ、只ヲ為メ令レ盡レ功也、淨和尚(5ウ)撈云、既ニ是レ一大事因緣、為ニシテカ甚麼ト落ツ糞土ニ、元和尚問答云、既ニ是レ一大事因緣、如何放レシ

身ヲ淨和尚云、汝善ヲ護持^{モリ}、抛^ナ筆頭^ヲ云、飽參^ニ他人^ニ不^レ可^ニ傳語^ス者^モ也^リ、可^レ秘々々、若亦^タ護^リニ流布^{セバ}、即^チ眉鬚墮落^ス證淨訓訣ヲ、代、作^ス一圓相^ヲ、師云、夫レハ何ントテ、代、總^ノ窮^リ物^ヲ始^リテ走、師云、円相^ノ外^ヲ云へ、代、此心^ヲテ走、師云、此心ヲ、代、心通證契即通、某甲即通、師云、畢竟ヲ、代、即礼三拜、是ハ悟上ノ參也、以心傳心也、畢竟ハ、心法受用也、此法二叶ツタ時キ、隔テ無イソ、

(10) 十、鉄漢大事參、

鐵漢之大事、學道ハ須^ク為^ル鐵漢^ニ、手^ヲ着^テ心頭^ニ自^ラ判^ズ、師云、鐵漢ヲ、代、師ニ學力向テ、手ヲクンデ座^ス、師云、句ヲ、代、烏沙巾上^ニ有^ル天^ヲ在^リ、師云、莫^レ學^ニ平沙落隔^ノ圖^ヲ、心ハ、女鳥男(6オ)鳥ツレテアルク者^モ也、女鳥デモ男鳥デモ死スレバ、其日ノ中チニトモヲ尋ル也、其日ノ中チニ無ケレバ、一世獨リ居ル也、莫^レ學^クト云ハ、夫レヲモ學ビゴトハ無用ト云心也、有沙巾上ト云ハ、大唐四百州ノ總社也、誓句ノコト也、有沙巾上ノマツリト云コトアリ、

(11) 十一、嗣續鉄漢參、

師云、嗣續ノ鉄漢ヲ、代、學、吾ガ首ヲ打テ有沙巾上誓^ツト他二首ヲ振走マイ、師云、猶ヲモ鐵漢ヲ、代、亦タ吾ガ首ヲ打テ有沙巾上フツト此事容易ニシ走マイ、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

(図省略)

(6ウ)

「慧輪永明禪師」(三宝印)

(12) 十二、鎮守參、

異云、鎮守之參ヲ。學、師ニ向テ、前ニ立テクツルトト匝ル也。師云、夫レハ何ントテ。學云、ドノ諸佛諸神モ圖ヨリ出テ圖ニ歸シタ、時、是^レ不^レ是^レ八走又トモ、汚穢不^レ淨ハ走又。心得ハ、クツルトト匝ツタハ、圖相ノ用所也。ホドニ、捨別鎮守ニ不^レ限、ドノ社口モ參詣シテ、クルリト廻ルハ此用所也。此心ハ、神^ニト出テ佛^ト出テ、怒徹ト出テ、亦タ八靈動含靈蝦蟇蚯蚓、或ハ依草附木ノ精靈等^ニ至ル迄デ、此圖相ニハツレタハ無イ、沙門ハ葬々ノ場ヨリ、參詣スル眼コ也、此辛勞ヲ助就シテ參ル人ヲバ、三ノキダハシ迄デ門送シテ拜シ在^ニ之。是ヲ知ラズシテ參ル人アレバ、大地ガ七尺裂シテ、堅牢地神ノ煩惱ガサクルト云々。

念誦參・三喫茶・龍天參・白山參・鎮守參、皆一透也、(8オ)

(13) 十三、三喫茶、

到不到トモ三喫茶ヲ。代、作^ニ一圓相^ヲ又手ノ此内テ走。云、句ヲ。代、總^ニ在^ニ此^ノ中^ニ圖^{カナリ}。云、三喫茶ヲ。代、茶傾三奠。云、夫レハ何ントテ。代、釈迦モ達磨モ某甲モ、此茶ヲバ遍レ

走又。云、受ケ様ヲ。代 天下^二雨露^一榮枯。趙州ノ時代ナラバ、如此見テヨシ、亦、碧岩ナドハ、圓悟雪豆ノカヲ入レテ見ル也。子元頌^ミ、二三四五、々四三二、是レハカズエ「ダ、一ヲハジメト誦ンダ。空劫ノ一位ヨリ地水火風空ト性ヲ受ケテ出ル也。夫レヲ死スル時ハ、夫レ^一二歸ス也。時キ、本空也。故二位牌^二歸一歸本歸元皈空皈真ト書クハ、此義ダ。未向皈シタ時、人ハ無イソ。呈ニコソ。塵埋 巾ト、延壽堂ノ額ヲバ拈ジタレ。死シ去テ、跡ノ成リ計リダ。切テ、趣證デハソ口ヌカ。(8ウ)

(14) 十四、念誦參、

師云、切ニ以レバヲ。云、一息截断ノ時節、山形ハハラリツト崩レテ走。師云、生死交謝シヤウヲ。云、根本ハ何ンデモ無イ物デ走。師云、寒暑互ヲ。云、北山ハ寒ク南畔ハ暖デ走。師云、其来リヤウヲ。云、虚(9オ)空ヨリ風ノ吹キ来ルガ如クテ走。去リ様ヲ。云、本二歸リ本二付テ走。師云、大海二淨リ様ヲ。云、本海二歸シテ走。師云、新圖寂ヲ。云、作^{シテ}一圓相^{ハカ}良久。師云、大命俄^ニ落ヲ。云、死スル當位、柳ギニハ緑リ花ニハ紅イデ走。師云、諸行無常ヲ。云、是ハ人間ノ生デ走。師云、寂滅為樂ヲ。云、カラダヲ捨ル當位、大安樂デ走。師云、諸聖之洪名ヲ。云、只今法身シテ走。師云、精魂覺路ノ進メ様ヲ。云、只今隙ヲ明ケテ走。師云、起竈ヲ。云、只今拂イ尽シテ走。師

云、句ヲ。云、人ハ死^{シテ}精魂不^レ留。師云、茶傾三奠ヲ。云、天雨^露下^ル故^ニ榮枯不^レ攢。師云、畢竟ヲ。云、瞶眼スル也。師云、迷故三界城ヲ。云、言^レレヌ「ヲ言^レントスルガ迷イデ走。師云、悟故十方空ヲ。云、言^レレヌ「ヲ言^レントスルガ、迷イデアツケルヨト心得ルガ、悟リ^デ走。師云、本来無東西ヲ。云、作^ス一圓相^一。師云、句ヲ。云、總^ニ在^リ此^中。師云、一圓相^一作シ様ヲ。代、師ノ前二往テ、此圖^一人作(9ウ)スヤ。心得ハ、凡モ聖モ餓鬼モ畜生モ修羅モ人天モ此内チヨリ出テ、亦タ此内エ收ル也。師云、句ヲ。云、兒童ノ日ニ不^レ到、都来愁^レ不^レ解心得ハ、ドノ衲僧モ一度ビ兒童日^ニ到ラズンバ、人天ノ大導師トハナラレマジキ也。ト云ハ、チツトモ會^フ出デヌガ、肝要ダ。識情ガアラバ、外^導天魔方面ヲ出スゾ。兒童ノ日ニ至テ見ヨ。外道モ無ク天魔モナイソ。ソコヲ即心成佛トモ云タゾ。畢竟此圖ノ中ヨリ閻羅惡魔モ出タガ、亦タ此圖ニ入收ル也。亡^レバ、太郎モ二郎モ愛ヨリ出デタゾ。切テ、兒童ノ日ニ至レバ、太郎ト呼ブニモヨツ、二郎ト喚ブニモヒヨツト出デタ。時キ、愁イヲ解シタ^一ダ。處ヲ、成佛性天ノ人トモ云タ。惡クスレバ、迷イ走ゾ。迷故 城ノ城ヲフサガルト誦ンダ。迷エバ、三界トモフサガツタ^一ヨ。悟故 空ノ空ヲヒロシト誦ンダ。悟レバ、十方ガヒロキ也。ト見レバ、尽十方テ東西モ(10オ)ナク、南北モ無イ^一ダ。師云、火光三昧ヲ。云、心火デ走。師云、其心ヲ。云、南方ハ火ナリ、心デ走。師云、猶ヲモ子細ニ。云、火

火二歸シ、水ハ水ニ歸シテ走。心得ハ、南方ハ陽デ、人ノ發処也。四大五蘊ヲソレ／＼ニ歸シタ時キ、只タ空也。時キ、閻羅老子ガ眼ガ及ンデコソ。

(15) 十五 二句偈參、

師云、慈眼視衆生、福聚海無量、此二句ヲ。代、師ノ前二至テ帝座ノ如クニシテ坐スル也。意得ハ、先ツ此二句ハ、王法ノ起リナ呈ニ、王道ノ沙汰也。慈眼ノ眼ザシヲ以テ衆生ヲ視タト云ハ、十善ノ帝王ノ民ミヲ哀ミ、衆生ヲ憐ニワ、天寒ノ時分、夜ルノ(10ウ)ヲトゞニ御衣ヲ卒度脱ギ玉ウ。處デ、四海八蛮トモ暖ヲ得タゾ。ト云ハ、ドツコモ此帝德慈悲ノ心デ挂エタゾ。ト云テ、左輔右弼ニ困邊セラル、帝トノ「デハナイゾ。宗旨テハ、本分ノ心王ノコトヨ。此心王ノ慈眼デ、ドツコモ通ジタゾ。心王ノ惠澤ノ深ウシテ、窮リ無イ處ヲ、福聚海無量ト云タゾ。愛ヲ宗門デ見ル則ンバ、四時トモニ此心王ノ司サドツタゾ。トミレバ、春百花夏涼風冬雪白イガ、福聚海ノ浪タゾ。森羅万像、頭々物々トモニ此皇帝ノ德澤ノ温イデウナイカ、拳着ノ心口モトクト座シタ一片デ、解會承當冠リヲ傾又處ガ、從前ノ帝位ヨ。愛ヲ取テ、心王 通ト云タゾ、ホドニ、帝位帝座ト云テ、余所ニハナイゾ。座徹一片ノ正當傾カ又帝位ヨ。此正當位十成圓滿デ佛世トモニ欠ケ(11オ)路ナイゾ。愛ニ湛々トシタ福聚海タゾ。呈ニコソ、写水ヲ獻スルモ此譬喩ヨ。畢竟恩流ナラザ

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

ル處ハナイゾ。師云、子細ニ其落居ハ。代、九識本分本尊デ走心得ハ、トクト坐シタ正當帝坐ガ、即チ九識圓備ノ体タゾ。其コガ本分千手ノ正面、心ノ觀音ヨ。愛ヲ本尊ト成シタゾ。ホドニ、圓通圓滿ノ修行デ、佛世トモニ相欠ヌゾ。處ガ十成圓滿一片ノ天道タゾ。愛ヲ佛法王法一般ト云テ走ゾ。既是傳授後之參禅也。可レ附与_ス的傳一人。

(16) 天童如淨禅师道元和尚嗣法論

師問、如是何一箇ノ露柱。元云、人々具足。師云、試ニ具足_{セヨ}看。元云、無心底。師云、言語尽。元云、立身叉手。師云、礼拜着。師云、又(11ウ)問、如何是露柱一句。元云、六根不具。師云、是什麼。元云、拂袖去。師亦問云、一面古鏡、元云、磨。師云、磨何処落處處。元云、破鏡。師云、落處作麼生。元云、火裏氷。師云、其時節作麼生。元便放身臥。師云、礼拜着。師又問、如何是佛子上。元云、電光知了剎。師云、在何処。正知得。師云、會處如何。元云、天地同根、万物一體。師、會麼々々。元呵々大笑。師云、是誰_レ人章句。元立拜。師下坐、授_レ拂子。師又問云、如何是龜毛拂子、兔角₍₁₂₎杖。元云、世界怎麼_ニ廣濶_{アリ}、師云、其_レ外在_ニ指頭一言、道々。元拳_ニ指頭_ヲ。師又問云々、如何是拄杖子_ノ外元云、吾_レ有_ニ言_一在_レ。師便授_レ拄杖。師又問云々、如何_レ是_ニ三尺_ノ竹篋。元云、問話_ノ者_ハ與_レ棒。師云、不恁麼_ノ時_キ如何。元云、三日前五日後。

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

二七八

師云、前後際断キ時キ如何。元不レ會。師云、為レカ何ト不レ會ル。(12)
 オ元云、唯為不レ開レ口。師下座、授ケ竹篋ヲ了ル。元九拜珍重
 此口傳之書、曹洞之一大事也。可授上足一人。

(17) 十七、宗旨向上勸弁正法内意、

宗旨向上切紙正法内意

正法者、諸法實相也。即心成佛也。上根之人、到得也。正法入
 派・向上入派ト云也。向下入派、初入頭事也。

眼藏者 一塵不立之自己也。

涅槃者 涅槃不生、離ル有相ヲ。槃ハ不滅、離ル無相ヲ。生死透脱底
 ヲ大涅槃ト云也。

妙心者、不レ墮ニ空劫ニ、不汚染也。不似底也。

實相者、柳緑花紅也。煩惱也。不軌則也。(12オ)

無相者、非レ僧ニ非レ俗ニ、非レ草木ニ、非レ禽獸ニ、非レ天ニ非レ地ニ、

主也。

微名者、

幽遠也。甚深也。佛祖不識也。

法門者、有天地、有人天、正法佛法無尽也。

教外者、一字不説也。不識也。不可得也。

別傳者、父子不傳也。則禅道也。

世尊者、靈覺性也。性即是佛也。佛是心也。心即道也。道

即是禅也。禅之一字、不ニ凡聖ノ側處ニ、故ニ謂レ別傳ニ。宗旨向上

大事也。吉祥山沈金宮有之。

(18) 十八、国王授戒付傳授戒

国王授戒ヲ。代云、切忌諱名スルヲ。云、諱名セ又先ヲ。代、
 風(13オ)不レ鳴レ枝マ、雨メ不レ破レ塊マ。云、破り様ヲ。云、雀ハ
 ジウ鳥ハガウ。云、句ヲ。代、縱横何ノ處カ不レ風流。心ハ、一
 片ノ皇化也。諱名セ又先御大事ト被レ成。佛祖大事、非レ所ニ小
 根劣器ノ造詣ス。未分之一位也。

龍天、有時キ現ニ雲一片相ヲ來ル。佛其ノ時キ授戒ノ言マ。我道甚
 深微妙也。汝其ノ形不レ可改。龍天謝戒云、此山ヲ奉レ佛ニ可シ
 佛法ヲ弘メ給フ。

云、龍天ヲ。代、变化身デ走。云、天ヲ。代、不出ノ天デ走。
 云、吾道甚深微妙ヲ。云、变化身ヲ、本ノ住家工歸シタ時キ、

本有ノ如來、不出ノ天デ走。云、句ヲ。代、風セ不レ鳴レ枝マ、

(13ウ) 雨メ不レ破レ塊マ。

(朱印白文)「慧輪永明禪師」

「光紹高風」(朱印)

本書の前半部分は、切紙の参の集成である。ここで、切紙
 の参を集成する史料について、付言しておきたい。龍泰寺蔵
 『仏家一大事夜話』⁽¹⁹⁾は切紙の参の集成であり、本参として機
 能していたと思われる。所載の公案目錄を挙げれば以下の通
 りである。

- (1) 勤行(三時ノ行事)、(2) 禅家ノ本尊、(3) 日中(祈祷)、(4) 日ノ
- 晩ルノ行事、(5) 放散、(6) 四時ノ坐禅、(7) 土地神、(8) 祖師堂、(9)

御影堂、⁽¹⁰⁾鉢⁽¹¹⁾小施餓鬼、⁽¹²⁾祝聖之參、⁽¹³⁾鐘鼓之參、⁽¹⁴⁾小開
 静ノ參、⁽¹⁵⁾大開静(ノ參)、⁽¹⁶⁾土地堂(ノ參)、⁽¹⁷⁾血脈參、⁽¹⁸⁾命
 脈參、⁽¹⁹⁾經教參、⁽²⁰⁾鉢ノ參、⁽²¹⁾拄杖之參、⁽²²⁾扠子之參、⁽²³⁾楊枝
 之參、⁽²⁴⁾「普通問訊」、⁽²⁵⁾五六六蘊參、⁽²⁶⁾鬚髮參、⁽²⁷⁾飄袖參、
⁽²⁸⁾手巾參、⁽²⁹⁾襖子參、⁽³⁰⁾履ノ參、⁽³¹⁾襖子參、⁽³²⁾傘參、⁽³³⁾草鞋
⁽³⁴⁾四大五蘊、⁽³⁵⁾安坐点眼、⁽³⁶⁾靈供參、亦靈供、⁽³⁷⁾襖子參、⁽³⁸⁾竜
 天參、⁽³⁹⁾廿一社順礼參、⁽⁴⁰⁾没后作僧參、⁽⁴¹⁾中陰破壇參、⁽⁴²⁾隔国
 平亡靈參、⁽⁴³⁾吉方勸請參、⁽⁴⁴⁾惡日連統參、⁽⁴⁵⁾塔婆書后点眼參、
⁽⁴⁶⁾塔婆參、⁽⁴⁷⁾念誦參、⁽⁴⁸⁾竜天參、⁽⁴⁹⁾頂眼參、⁽⁵⁰⁾持戒參、⁽⁵¹⁾宗旨
 駕齋參、⁽⁵²⁾香炉ノ參、⁽⁵³⁾坐具參、⁽⁵⁴⁾宗門松參、⁽⁵⁵⁾鎮守之參、⁽⁵⁶⁾
 白山參、⁽⁵⁷⁾竜天參、⁽⁵⁸⁾念誦參、⁽⁵⁹⁾理趣分參、⁽⁶⁰⁾十三仏參(第一
 不動、第二釈迦、第三文殊ノ境界、第四普賢ノ境界、第五地藏、
 第六弥勒ノ境界、第七薬師ノ本体、第八觀音ノ全体、第九勢至
 本体、第十阿弥陀本体、第十一阿閼仏ノ心、第十二大日ノ全身、
 第十三虚空蔵)

しかしながら、鉄心御州が筆写した『佛家之大事』も『仏
 家一大事夜話』と同系統の本参であるが、『参禅切紙 後巻』
 との関係は殆ど認められない。これは、智堂光紹の切紙相伝
 が、鉄心御州からだけではないことに起因すると思われる。
 『参禅切紙』には、相伝系譜を異にするの切紙が収載されて
 いる。

(29) 廿九、續松之切紙

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

拈華微笑圖相 續松之切紙 同参禅 續松二本ノ⁽⁶¹⁾屈圖在之
 續松ノ節者、十二処結也。十二処八、十二因縁也。

(図省略)

太宋宝慶元年天童山景德禪寺如淨和尚授道元和尚了也

血脉不斷 圖相 續松ノ参

(22ウ)

師云、圓相ヲ云云。代云、混沌未分デ走。師云、血脉ノ一点ヲ
 云云。代云一圓相ヲ⁽⁶²⁾屈ク。師抄云、本来無一物。此何ヲ力屈。
 代云、一物無キ処力、人々ノ本命元辰ノ全脉デ走。師云、夫レ
 ナラバ、本命星ヲ云云。代云、無名無一物デ走。師云、脉ヲ
 代、無実無際。師云、其句ヲ説破セヨ。代云、此命ヲ脉トシテ
 得来リ、人々具足ノ眼睛デ走。心ハ、命ハ是血日也。脉ハ是月
 也。血脉ト云ハ、日月旦望ニ和合シテ、佛祖正傳シテ血脉トナ
 ル也。師云、血脉相傳ヲ云云。代云、天毛無ク地毛無ク衆生毛
 無イト相傳シテ走。師云、句ヲ。代云、雪継溪橋斷。心ハ、血
 脉不斷、佛祖不到処。一圓相血脉一点也。是ヲ無相無形無念ノ
 根本無一物不將來。又圓相ハ三世諸佛、道場中ノ一点ハ、佛祖
 ノ鉢種子也。此話頭一千七百則ノ外也。
 先祖以来代々相傳シ来、今傳附了也。

勝國叟

(貼紙) 円月迄傳來如此 (23オ)

續松之参

云、袈裟ト衣ト衫ト、三ツヲ取り添エテ、續松ヲ拈スルゾ。呈
 二三ツヲ一ツニ取り添羊ヲ。代云、三界唯一心。云、證據ヲ。

代、作「圖相」云、其意ヲ。代云、心ノ一字デ走。云、心ノ一字ガ圖相ダト云證抛ヲ。云、万般巧妙一圖空。云、三界唯心ト一々拳シ派ハ、心ノ一字ヲ肝要ト會ヲ成スゾ。一ツ目ヲ開イテ、續松ヲ抛擲セヨ。爰テハ辛勞ノ拳セ。心ノ一字ニ會ヲナスワ、地獄ダトキライ落ス也。爰ワ、師ノ前ヲ座具ヲホカト抛ウツテ、一心三界ト拳スナリ。勝國和尚以來如此。(23ウ)

(30) 世、下炬之切紙并下炬證文、

乾坤大地、一世界之儀也。知識之一大事也。

(図省略)

(24オ)

維那續松ニ火ニ付テ、振り消メ出ス処ヲ、師取テ急度拈メ作一圖相。心ハ、トボン出ス火ワ、消ヤスイゾ。急度拈メ作一圖相ヲ、燃灯ノ一灯、心火ノ示シ派タゾ。此ノ心ノ一火ニ灯ワ、釈迦ニモ達磨ニモ、師ニモ亡靈ニモ、地獄餓鬼畜生修羅人天、草木含靈共ニ二灯ニカ、ヤキ渡ツタゾ。万劫消エタ「ガ」在ツテコソ。此ノ心得可レ為「肝要」。心火ノ受用力ガ三界ノ大導師ナリ。

勝國叟

續松下炬之證文切紙

釋尊現來、先續松下炬因縁者、周、昭王四十二年至二月八日、年十九ニ於「四門」遊觀。見「四等」事、心有「悲喜」^ル、而「欲」求「出家」。自念言、即遁「城」去、於「檀特山」中「修」道發「天

智光明。照十方世界(24ウ)地「涌」金蓮華、於二月八日明星出時、成佛號「天人師」。無救得三界衆生。徒然以來、拳「續松」作「下火」ヲ以「實相微妙正法」、不出離火宅者、摧伏「迷妄惡逆之心」ヲ、而令「至」善提「道」者也。到「後來末孫」迄「護」此「垂戒」ヲ、為「善知識」者、續松「參」、下炬「參」、傳授悟了、而了「達三世」者、衲子者雖「然」邪惡妄念「ノ」土「ノ」惡心「ヲ」得「善根菩提」者也。諦聽々々、善護持「之」々々日本初祖永平開山從元和尚以來、當門到「吾迄」傳附「畢」。

徹骨山

上記は、続松関連の切紙であるが、龍穩寺系統ではあるが勝國良尊派下に相伝された切紙である。この一連の切紙がどういう経緯で光紹が相伝したのかは判然としないが、永平寺室中に相伝されてきた切紙は幾つかの異なる系統を内包するものであったと言える。

(33) 世三、達磨傳法偈、

問云、傳法偈無翻訳、及付法藏傳中無斯偈、以至諸家多說無拋、願垂至謂。答曰、噫、子孫支分是非鋒起。不能根究耳。只達磨大師入此土、已不會、唐言以何知之。初見梁武帝時對問、其事即知。平後、又二祖可大師十年侍奉、以至立雪斷臂、志求祖業至勤誠。平後達磨告曰、吾有一迦袈裟、付你為信也。必有疑者云、吾西天人、汝此土子也。得法實信耶。汝當以吾言證之。

又云、自釈迦聖師、至般若多羅、以及於我、傳衣表信、傳法留偈、吾今付汝。偈云、吾本來茲土、傳法救迷情、一華開五葉、結果自然成。因引從「上諸祖偈」一々授之内、傳「法印」以契證、心外「附」袈裟「以定」宗旨、

以此則知達磨「決」乎。此便單傳口授、何假翻譯哉。達磨單傳心印、不立文字、直指人心、見性成佛矣。(27オ)

原忻在判

附與原訓畢

于時慶長十一^{丙午}年吉辰

原設

附與原道

(34) 世四、達磨知死期偈、

達磨大師謂「祖」云、生死事大、無常迅速、汝還「識」也。惠可涕淚悲泣、而云、吾「未」レ會、唯願「大慈大悲開」甘露門、救「我」^{五ヘ}「我」^ガ「昏朦」^ヲ。師夜半「點」松火「示」此妙偈。汝聞「思修」^ヲ、惠以「能」^ヲ「護持」^ノ「嗣續」^ヲ。吾宗「云々」、南山月「白」元來水寒。偈「云」、纔「覺」玉池「無」^ニ「滴瀝」、次「於」波底「取」^ニ「神光」、無常「ハ」須「レ」聽「體頭」^ノ「鼓」^ヲ、得「レ」數「方」知「幾日」^ニ「亡」^{スル」ヲ}。右知所「玉池」^ニ「無」^ニ「滴瀝」者、不慮「得」^レ「病」、口中「聚」^ル「唾」、指「端」^ヲ「見」^レ之、若「無」^ニ「泡沫」者、可知「定業」也。波底「取」^ニ「神光」者、以「指」^ヲ「押眸」^ヲ「散」^レ「星」^ノ如。若「無」^ニ「思」^ヘ「定業」也。聽「體頭」^ノ「鼓」^ヲ者、極月晦日「子」時、打「頭鼓」^ヲ「驗」^ス「十二」月、若「無」^レ「音」^ヲ知「定業」也。玉池「ハ」唾也^{ヨカレ}。

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

波底「眸」也。自「古知」^レ之者、臨終「住」^ニ「正念」^ニ、能々可信受。看經之作法、極月晦日之夜、子「尅」^ニ「先本則唱」、坐禪「廿一息而向」^ニ「明」^ノ方「合掌」^ヲ、念佛「一百反」、般若心經「三卷」、消災咒「一返」^ヲ。其後「以」^ニ「兩手」^ヲ「兩耳」^ヲ「塞」^テ「頭」^ヲ打。先「月」打、次「日」打、次「時」打也。音無キヲ其「時」月ト知シ。此時有「居用」、口傳有「之」、能々可傳者也。

生前死後、契約之切紙是也。無之可為片眼云々。又云、向「此觀音經」誦「鼓」打、定業知共云也。

從如淨禪師傳附道元和尚畢、今於日本從巖山和尚附屬通幻寂靈和尚畢

光紹傳附畢(28オ)

上記の切紙は、先に論じた知死期関連の切紙であるが、慶長十一年(一六〇六)に原設が原道へと附與したものであるから、やはり系譜を異にしている。永平寺における切紙の相伝については、その系譜を今後明確にしなくてはいけないと思われる。同時に、今回は論じられなかったが、その質と量(総体)についても考察すべきものと思う。

又、「円月迄傳來如此」との貼紙があり、又、これらの切紙は永平寺四二世円月江寂(一六九四—一七五〇、大智慧光禪師)まで相伝されたことが確認できる。江寂は、『參禪切紙後卷』(智堂光紹書寫、零本)に跋文を付しているのだが、古訓を有する十三件の断紙(切紙)以外を代語僧の臆説

であるとして、批判している。

此上下二冊、一百九十六件ノ之断^{ツカミ}、皆代語僧ノ之臆説、佛經祖論ノ之所未説カ也。但所列于下之十三件ハ、古訓有據、宜實文字差誤解而傳、列目如左。

- 一、自家ノ訓訣^{二卷ノ内ニアリ 文句ニ 有德ヒ}
- 一、國王授戒ノ作法^{ハノ活}
- 一、榮西授經ノ儀軌^{ハノ活}
- 一、施餓鬼ノ法^{ハノ活}
- 一、嗣法ノ式^{ハノ活}
- 一、義雲和尚坐禪ノ密語^{ハノ活}
- 一、禪宗日本伝來ノ口訣
- 一、榮西ノ記文^{二卷ノ内ニアリ 漢ハ書ハ不可フ}
- 一、達磨ノ心戒^{二卷ノ内ニアリ}
- 一、十佛名ノ科文^{ハノ活}
- 一、手形ノ古式^{チハナリ}
- 一、酒水法^{ハノ活}
- 一、永平祖師ノ嗣書ノ口訣

延享二年(一七四七)乙丑之夏住山圓月誌之(印^{ハノ活}、圖^{ハノ活}、カ印^{ハノ活}、江敏之印)

太清撫國禪師、雖考正室中斷帛目録スト、一百九十六件上、而未到達一辨^{ニシテ}眞偽^{ヲ定ムル}、取捨^{ヲ爲ス}。山僧再加考正^ミ。唯上^ミ十三件足^リ以^テ可^レ信^ス。其餘ハ玉石混雜^ス。不^レ違^ニアキマフ考^{フル}。又待^ニ他日^ニ閑暇^ヲ而已^ミ。

この圓月の所説は、面山の「永平寺室中断紙目録並引」(洞上室内断紙棟非私記)所収)の所説と呼応しているように推察される。

大中寺・龍穩寺・總寧寺等関三刹から出世した高国英峻、鉄心御州、光紹智堂らの永平寺における活動は、後世代語禪として批判されることもなった。永平寺所蔵史料に見る限

り、その先がけとなつたのは同寺三十八世承天則地であり、その著わした「舊本除却辨」には、以下のように見える。

此一本ハ者何^ノ人^ノ所撰^キ、爲^レ偽書明^ケシ焉[、]英俊小写^{シテ}而禍^イ及^ニ兒孫^ニ、光紹不合^ニシテ、而將錯就錯^ス矣[、]予每^ニ三管看^ニスル[、]相^ニ似^{タリ}十二街頭失^スルニ斗^マ、豈^ヤ聖賢^ノ一言半句如^クレ^ル是^ノ者^ノ也[、]言句文字鄙陋暗昧[、]而非^ニコト^ノ大師^ノ之舌頭^ニ必^シリ矣[、]中間雜^ニ入^ス辨師^ノ之着語[、]且^ツ亦^タ元師^ノ直書懷^ニ在^判云々、不^レバ見^ニ直書在判[、]争^カ打破^セ疑團^一也[、]後生舌頭古聖^ノ金言折角弁^ルハ之各自^ノ眼晴^{ナリ}也[、]後來^ノ現住強^ク欲^ク開見^ヲ者^ヲ請^フ一鑑[、]而除^ク却^セ之^ヲ可也[、]若^シ亦^タ不^レ除却^セ、尽^ニ未來際深鎖^{シテ}而不^レ入^レ他見[、]然則^ニハキ[、]宗旨^ノ保護兒孫^ノ奉重^ト者^ノ乎[、]

此一本者、於^ニ天童室中^ニ、元祖^ノ參得淨翁^ノ印可^ト云々、件件觸^レ犯^ニ謬^ヲ、而相^ニ似^{タリ}家醜揚^ル外^ニ也[、]正修行底古佛^ノ眼晴[、]雖^{トモ}我曾^テ不^レ會^セ之^ヲ、言句^ノ鄙陋文字^ノ不^レ整、敢保^ハ是^レ不^ニ正師^ノ之舌頭^ニ也[、]以^テ這般^ノ事^ヲ弄^リ得^セハ、声^ヲ誰^カ立^テ古人^ノ之下風^ニ也[、]論^ニハ書中不^レ的^ノ之十一^ノ者[、]有^ニ宋西記文^ノ之拳着[、]且^ツ以^テ血脈^ヲ爲^ニ傳法^ノ之證[、]并^ニ上足印可^ノ等^ノ非^ニ天童室中^ノ之語^ニ明白^{ナリ}也[、]淨翁以^テ嗣書^ヲ爲^ニ傳法^ノ之證^ト今[、]猶^モ當山室中^ニ裡^ニ之^一書[、]世以^テ所^レ知^ル也[、]血脉傳授^ハ者[、]上古尤^モ未^ダ曾有^ニ之^ヲ説^{ナリ}也[、]上足印可^ハ是^レ亦^タ不^レ傳^ノ之説^{ナリ}也[、]榮俊先師與書^ニ曰^ク、元古佛直書懷^ニ辨傳授^ニ在^判云々、直書在判^今何^ヲ在^ル焉[、]是^レ不^レ直面^一不^ニ拜

見^ミ、難^ニ首肯^シ一條^{アリ}也、同^ク奥書^ニ曰^ク、此^ノ書^ノ末^ニ當^ル山代々、
現住^{以テ}自^ニ筆^ヲ諱^ヲ書^ヲ趣^テ來^ルの嗣住^{山ノ}之^ノ證^{アリ}也、云々、此^ノ論^レ尤^モ
難^シ會^シ、有^リ人々各自^ノ法嗣^書、且^ツ現住^{世代者}、白^ク青天切
紙傳^{底者}、有^リ二大事^ノ在^ル、何^シ擲^ニ此^ノ書^ノ之^ノ末^ニ伎^ニ也、

細考^{スル}、偽^{シテ}淨元^ニ大師^ノ之^ノ勝^ヲ躡^リ而^レ欲^レ賈^ニ卑^ヲ於^テ後世^ニ
必^シ矣、若^シ夫^レ道德修功^ノ相當^ノ之言^句カ歟、明智俊才^ノ折角^ノ之^ノ文
法^カ歟、然^ル則^ハ秘^{シテ}而^レ珍^カ藏^{スル}モ亦^タ可^ク哉、言々意不到、句々說
不到、痛哉、觸^カ犯^ス二大師^ヲ、可^シ謂^フ潛偷^ノ之^ノ賊^乎、俊老師質
直^ニ而^レ不^レ紕^レ之^ノ清書添語、却^テ禍^イ及^ニ于^ニ宗旨^ニ、予再^三看過、
決^{シテ}而^レ欲^レ除^レ之^ヲ、然^ルニ以^テスル^ハ一己自得^ヲ則^チ辜^フ先師^ニ矣、
是^レ故^ニ堅封深鎖^{シテ}而^レ俟^ツ、來^開見^之之^ノ正眼^ヲ耳^ハ已^ニ、冀^{クハ}一見
照破^{シテ}而^レ除^ク却^ク焉、若^シ亦^タ不^ニ除^セ却^セ、尽^ミ未來際^{可シ}深鎖^ス也、
及^ニ他^見則^ハ二大師^ノ之^ノ汚名、一宗門^ノ之^ノ垢染^{アリ}也、墮^テ淚^{斷腸}、
慚愧^不レ少、

予曾^チ除^キ二大師^ノ之^ノ諱^ヲ、改^メ二二^ノ之^ノ顛倒^ヲ而^レ題^ス号^ニ切紙^ノ名^目、
參^リ、某^ノ甲^ノ手書^{シテ}置^ク焉、臭氣猶^モ在^リ、不^ル如^カ全擲^ニ者^ノ乎、改
書猶^モ更^ニ不通^ノ名字^ハ者^ノ筆記^而若^ク也、冀^{クハ}後賢^改正^セ焉^レ、
享保十三^{（一七二八）}戊申歲十一月廿一日記封畢、

現住三十八世末学比丘承天則地（花押）

上記のように、承天則地は高国や智堂を名指しで批判してい
る。

更に、永平寺所蔵『永平總目錄御州本参』の表紙見返しに

林下曹洞宗における相伝史料研究序説（二）（飯塚）

は、

此^ノ題^ニニ^ニ吉祥山永平禪寺話頭^ノ之^ノカ^ナ飯字^ノ書^ノ一冊^ハ者[、]中古住^ニル^此
山^ニ代^ニ語^ノ僧^ノ之^ノ所^ニ述^作スル[、]而^モ固^ニ非^ラ下^ニ從^ニ承^陽・二^代・三^代
代等^ノ時[、]伝^ヘ之^ヲ來^有底^上也、読^ム者[、]宜^ク下^ニ考^テ其^ノ時^ヲ、以^テ
知^テ其^ノ人^ヲ而^レ用^ス否^ト焉、
延享二乙丑孟夏

住山円月誌之

とあり、江寂が、本書（吉祥山永平禪寺話頭^ノ之^ノカ^ナ飯字^ノ書^ノ）を
中古永平寺住山の代語僧による著述（偽作）として批判して
いる。面山瑞方の代語禪（僧）批判の主張は、永平寺室中に
相伝されてきた切紙・本参（「一大事因縁」）が途絶する一因
をなしたものである。

注

- (1) 飯塚大展「林下曹洞宗における相伝史料研究序説（一）
永平寺所蔵史料（上）」（『駒澤大學佛教學部研究紀要』
第六六号、二〇〇八・三）
- (2) 飯塚大展「潔堂派切紙に関する一試論 常光寺史料を中
心として」（『駒澤大學禪研究所年報』第七号、一九九
六・三）
- 同右「潔堂派所伝の切紙について 常光寺蔵切紙の紹介
」（『駒澤大學大学院仏教学研究会年報』第二九号、一九
九六・〇五）
- (3) 『第11回熊本美術展 寒巖派の歴史と美術』（熊本県立美術

館、一九八六)

水野覚禪『曹洞宗寒巖派の形成と展開に関する研究』(修士論文、一九九六)

(4) 菅原昭英、鎌倉時代の遺偈について 円爾にいたる臨終作法の系譜(大隅和雄編『鎌倉時代文化伝播の研究』所収、吉川弘文館、一九九三・六)

古田紹欽『禅僧の遺偈』(春秋社、一九六五)

同右『遺偈の書』(毎日新聞社、一九八一・一一)

柳田聖山『禅の遺偈』(潮文社、一九七三)

(5) 石川力山『禅宗相伝資料の研究』上巻、第五章 葬祭・追善供養関係切紙

知死期偈関係切紙については、主として上記の論攷に依拠した。

(6) 末木文美士、高山寺所蔵禅籍小品について、『平成六年度高山寺典籍文書総合調査団 研究報告論集』、一九九五)

(7) 『永平寺史料全書』禅籍編 第一巻、No.52、建仁宋西千光禅師伝法儀軌(廣瀬良弘解説)

(8) 本史料については、その成立に関して若干の問題がある。『永平寺史料全書』禅籍編 第二巻、No.24、以實附法状(廣瀬良弘解説) 参照。私見によれば、祚棟は付法状と伝法偈を別個に授与していることから、本史料は、前半部は付法状の一部であり、後半は伝法偈である可能性を有する。

(9) 『永平寺史料全書』禅籍編 第二巻、No.26、祚棟付法状(廣瀬解説)

(10) 同右、No.27、祚棟伝法偈(廣瀬解説)

(11) 注(1) 参照。

(12) 『永平寺史料全書』禅籍編 第一巻、No.57、仏祖正伝菩薩戒作法(No.58、同上、No.59、同上)(廣瀬解説)

(13) 石川力山『禅宗相伝資料の研究』下巻、第六章 室内(嗣法・三物・血脈)関係切紙

(14) 『永平寺史料全書』禅籍編 第二巻、No.39、切紙目録(菅原昭英解説)

(15) 同右 第三巻、No.14、伝授室中之物(菅原解説)

(16) 拙稿『禅籍抄物研究(二)』『大円禅師垂示夜話』を中心として、『駒澤大学佛教學部研究紀要』第六二号、二〇〇四・三)

(17) 拙稿、中世曹洞宗における本参研究序説(三) 峨山関連抄物と円応寺所蔵本参について 『駒澤大学佛教學部論集』第三十号、一九九・一〇)

(18) 金田弘『洞門抄物類書目解題』(洞門抄物と国語研究、桜楓社、一九七六)

(19) 本書は、石川力山『禅宗相伝資料の研究』上巻、第一篇「第二章 美濃電泰寺所蔵の代語・門参資料」(法蔵館、二〇〇一・五)において、内容の分析が行われており、また「付録1『仏家一大事夜話』として全文が翻刻されている。

永平寺所蔵『切紙目録』関係史料対照表

1	一、竹篋切紙	(23) 竹篋切紙 (41) 竹篋・拄杖參話 并注脚	(75) 竹篋切紙 「外に(82) 竹篋拄杖參話 並圖(112) 竹篋拂子拄杖 寸尺切紙あり」	(77) 竹篋切紙(鉄心御州 普満 韶堂、從永平室中直伝) (82) 拄杖・拂子・竹篋之圖(從 永平寺室中直伝、普満韶堂所持) (83) 竹篋由来(從永平寺室中直 伝、普満韶堂所持)		
2	一、手形事		(27) 手形切紙			
3	一、露柱切紙		(60) 露柱切紙			
4	一、知識三々行		(126) 知識三箇行話			
5	一、祖師禪切紙		(93) 祖師禪切紙 「外に(92) 祖師禪嫌道話 切紙あり」		(54) 祖師禪切紙	
6	一、無住相					
7	一、宗門五箇之參					
8	一、宗門四字參					
9	一、施餓鬼切紙	(19) 施餓鬼之切紙		(69) 施餓鬼燒香作法(鉄心御州 普満韶堂、從永平室中直伝)		
10	一、九識円備		(135) 九識円満切紙			

参考史料
永平寺所蔵切紙、同寺
蔵、伝授室中之物」

11	一、兩鏡之図		(44) 兩鏡圖大事			
12	一、七仏直伝印心	(13) 七仏伝授戒法之一枚紙(心田之話・五相之図)	(4) 過去七仏心字參(力)	(61) 七仏血脈図諸話頭根本(力)		(7) 一、過去心字之血脈一大事因縁渡之、同過去七仏之血脈在之
13	一、道元十三則目錄		(94) 道元十三則目錄			
14	一、念仏切紙		(73) 念仏切紙			
15	一、知識上參					
16	一、頂門眼切紙		(103) 頂門眼切紙			
17	一、誰十八則勘破図添		「(102) 誰圖大事黒円(力)」			
18	一、松子	(42) 松子	(76) 松子切紙	(78) 拂子切紙(從永平寺室中直伝、普満韶室所持)		
19	一、永平宝鏡三昧図				(32) 室鏡三昧	
20	一、米門之切紙	(34) 米門之切紙	(78) 米門切紙 松ト梅ト槽ト牡丹トノコト			
21	一、正伝始末切紙		(21) 正伝始末切紙			
22	一、天童一紙大事		(61) 天童一紙大事			
23	一、先祖廟移切紙	(47) 廟移作法		(73) 廟移截紙(從永平寺室中直伝、普満韶室所持)		
24	一、先師取骨大事	(46) 先師取骨之大事	(113) 先師取骨切紙			
25	一、卍字之図	(37) 卍之切紙	(50) 卍字之図 「外に(48) 卍字大事(49) 卍字切紙 卍字八七ノ字十ノ字ト云フ アリ」	(80) 卍之貴裡紙(從永平寺室中直伝、普満韶室所持力)		
26	一、臨終五問答		(134) 臨終人問答切紙			

27	一、耳口之偶血脈					
28	一、住吉大明神之切紙				(28) 住吉五ヶ条託宣	
29	一、光明之迷		(36) 光明迷參			
30	一、涅槃之作法					
31	一、大(太力) 白峰記		(109) 人人具足図切紙		(38) 太白峰記 壹冊	(49) 太白峰記 壹冊
32	一、人々具足図					
33	一、合封之切紙	(45) 合封折角之切紙		(67) 合封切紙(從永平寺室中直伝、普満韶室所持)	(2) 合封參	
34	一、山門之図	(33) 山門切紙			(52) 山門切紙	
35	一、上來之図					
36	一、伝儀加行	(10) 伝儀加行				
37	一、御大事看經回向	(20) 御大事看經回向	(104) 御大事看經回向切紙			
38	一、七仏伝授作法			(61) 七仏血脈図諸話頭根本あり		
39	一、酒水室中秘伝「則是訓訣也、二通」		(41) 曹洞三種訓訣(力)			
40	一、仏々相伝戒作法	(13) 七仏伝授戒法之一枚紙(心田之話・五相之図)力				
41	一、多子塔前伝附作法	(43) 多子塔前伝附之作法	(128) 多子塔前傳付作法切紙			(43) 同多子塔前伝付ノ作法 一枚
42	一、七仏師承通場莊嚴切紙					
43	一、伝法義儀軌	(3) 伝法之儀軌	(132) 室中儀軌參(力)	(87) 伝授之儀軌(從永平寺室中直伝、普満韶室所持)		(46) 伝法ノ作法室中秘訣、巻本也、(47)

58	一、永平寺參禪切紙目錄					
57	一、嗣法論	(2) 嗣法論	(138) 天童與道元問答嗣法論 妄說也		(16) 嗣法論大事	
56	一、嗣書伝授儀記、					
55	一、伝法儀式、					(37) 一、嗣法儀式、
54	一、法嗣儀記	(1) 嗣法之儀記				
53	一、七仏伝授戒法一枚書、					
52	一、授戒之作法					(9) 一、道場莊嚴儀式
51	一、道場莊嚴儀式					(48) 開山伝法之作法 二卷
50	一、御開山伝法儀式					
49	一、伝授道場次第					
48	一、道場儀式					
47	一、道場莊嚴圖	(21) 道場莊嚴之圖		〔64〕檀家血脈行時道場莊嚴(從 永平寺室中直伝、普満韶堂所持)〔1〕		
46	一、伝底作法					
45	一、伝法儀式					
44	一、血脈道場儀式		(121) 血脈道場儀式			伝法之作法總目錄、 巻本也、(52) 当山伝 法之作法、一枚、紙 小結六ツ合、大把二 成、二ツ、

59	一、血脈袋大事 (17) 血脈袋之大事 (子狐卜毛)			
60	一、問訊之大事 (75) 問訊切紙(從永平寺室中直 伝、普満韶堂所持)			
61	一、三十四話切紙			
62	一、宗門十八種剣			
63	一、没後作僧切紙、			
64	一、安座点眼「四通」 (29) 安座点眼 (30) 開眼点眼切紙并 塔婆点眼			(71) 塔婆点眼大事(鉄心御州 普満韶堂、從永平室中直伝、寛文 四年二月吉日)
65	一、六祖半紙図「一通」 (11) 六祖示青原半紙大事			
66	一、嗣書焼却大事「二通」 (81) 嗣書焼却實裡紙(從永平寺 室中直伝、普満韶堂所持)			
67	一、正法眼藏切神			
68	一、十八般妙語			
69	一、山門法衣大事			
70	一、一条紅線 (66) 濟下一条紅線切紙			
71	一、住山之大事 (18) 住山之大事 (105) 住山大事切紙			(22) 住山眼大事
72	一、八師之次第 (124) 八師次第切紙 伝法 師伝戒師受戒師參学師言 行師依止師学得師右妄説 也			
73	一、達磨知死期秘密 (117) 達磨知死期之秘密			(34) 達磨知死期偈
74	一、鉢孟之切紙			

75	一、龍天勸破図					
76	一、日用行事作法			(58) 日用行事作法祝聖切紙（從永平寺室中直伝、普満韶堂所持）	(48) 祝聖切紙	
77	一、宋西記文				(39) 榮西記文	
78	一、嗣法論始終					
79	一、三悟道一位図		(86) 三悟道同切紙			
80	一、牌当之大事	(49) 洞山門下牌当相続之事	(19) 牌塔相続切紙	〔(85) 牌塔伝授截紙（從永平寺室中直伝、普満韶堂所持）〕		(43) 一、牌塔伝授之切紙、壹枚
81	一、四十九位之本位		(116) 四十九餅本位切紙			
82	一、四句之文切紙	(39) 四句文之切紙	(52) 諸行無常四句切紙		(7) 四句文參	
83	一、衣鉢血脈作法		(30) 衣鉢血脈伝授作法	(60) 衣鉢血脈伝授作法（從永平寺室中直伝、普満韶堂所持）		
84	一、天竺一枚紙		(13) 天竺一枚紙	(57) 仏祖以前血脈天竺一枚截紙（從永平寺室中直伝、普満韶堂所持）		
85	一、三老普門大事		(16) 三老普門大事 釈迦文殊弥勒			
86	一、三國一位図		(9) 三國一位之血脈			
87	一、永平一枚密語					
88	一、四処半夜図		(43) 四処半夜之図參			
89	一、二度伝授	(14) 二度伝授參	(107) 二度伝授切紙			
90	一、嗣書地絹之様子	(4) 嗣書地絹之様子	(111) 嗣書地絹切紙			
91	一、法衣伝授參	(33) 山門法衣之大事 法衣伝授之時參話	(28) 法衣伝授參話			

92	一、袈裟之大事	(25) 袈裟大事図	(53) 袈裟大事(從永平寺室中直伝 普満韶堂所持)		
93	一、襷子之切紙	(55) 襷子切紙			
94	一、仏頂上円相切紙	(42) 仏頂上圓相図切紙		(1) 圓相参、(25) 血脈圓相大事	
95	一、鷲鷲切紙	(56) 鷲鷲切紙			
96	一、御影切紙			(56) 御影画像書様	
97	一、勃陀勃地切紙「三通」	(35) 勃陀勃地断紙		(8) 勃陀勃地参	
98	一、宗旨秘書	(63) 宗旨秘書			
99	一、住持焼香切紙	(72) 住持焼香切紙			
100	一、曹洞八圍図「三通」	(33) 曹山八圍図			
101	一、白蛇之切紙	(28) 白蛇切紙(帰朝本則)			
102	一、漆下之御大事				
103	一、松竹梅之切紙				
104	一、林際曹洞兩派血脈	(65) 臨濟曹洞兩派血脈			
105	一、鎮守之切紙	(25) 鎮守切紙		(12) 鎮守参、(31) 鎮守之参	
106	一、靈供之切紙	(70) 亡者靈供切紙 (71) 亡者靈供切紙 龜前 熱田明神二上ルコト本地 不動明王ト云コト	(84) 靈供秘極(從永平寺室中直伝、普満韶堂所持)		

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107
一、七伝血脈図「二通」	一、宋西僧正記文録	一、文殊手内一巻經	一、祖師禪切紙 5二モアリ	一、達磨一心戒儀同十戒 之図	一、嗣書相伝巻	一、善知識切紙	一、十三仏之切紙	一、非人亡者結縁大事	一、拈花微笑之図「七通」	一、剣刃上之切紙	一、香巖樹上切紙「二通」	一、戒文参「二通」	一、拈毫曙之切紙	一、最極無上之大事
								(50) 非人亡者之事						
(1) 過去七伝血脈		(13) 文殊手内一巻經 一名仏説三身寿量無辺經コレ偽經ナリ	(93) 祖師禪切紙 「外に(92) 祖師禪嫌道話切紙あり」		(57) 善知識切紙	(115) 十三仏血脈切紙			(46) 拈毫微笑訣参 他家訓訣邪解カナ抄ナリ	(84) 剣刃上切紙	(85) 天童山樹上切紙 大極下五位ノト(力)	(24) 戒文拈提参 代語	(100) 拈毫曙三事切紙	(40) 仏祖正伝菩薩戒血脈 最極上大事
(61) 七伝血脈図諸話頭根本(鉄心)											(59) 「香巖樹上話(仮題)」(従永平寺室中直伝 普満韶堂所持)			

137	一、身心脱落		〔外に〕(88) 脱落脱落切紙		
136	一、君公書		(99) 君公書切紙		
135	一、四恩之參		(122) 四恩參		
134	一、御開山黒衣之由来		(64) 元和尚黒衣由来		
133	一、伝法偈〔三通〕	(24) 遺誠之偈			
132	一、遺戒之偈		(106) 遺誠偈大事		
131	一、臨終人問答	(7) 十仏名之切紙			
130	一、十仏名之大事切紙				
129	下段 一、大藏法教略要之図之				
128	一、緒環之參		(31) 緒環之參		
127	一、済下印可切紙				
126	一、応身之録		(2) 応身録		
125	一、一中十位抄	切紙	(38) 一中十位切紙		
124	一、白山妙理大権現切紙 〔三通〕	(31) 山神授戒 白山 也、様子ト図アリ (32) 白山妙理大権現	(6) 白山妙理断紙	(65) 龍天授戒作法(鉄心御州 普満韶堂、從永平室中直伝) (74) 龍天血脈(從永平寺室中直 伝、普満韶堂所持)	
123	一、九六三之大事				
122	一、達磨三安心図〔二通〕			御州 普満韶堂、從永平室中直伝 (62) 過去心字血脈 大事(鉄心御 州 普満韶堂、從永平室中直伝)	

150	一、御開山廟書切紙		（17）道元廟書不同切紙（力）			
149	一、七堂之図		（39）七堂伽藍図切紙			
148	一、皇城廿一社巡礼之切紙					
147	一、五位別紙	（26）五位之別紙亦五 体五輪之図	（14）洞山五位切紙 亦名 五体五輪図（力）			
146	一、三位三裏図		（96）州奥村切紙			
145	一、白山妙理之図「并参 禅」					
144	一、二句之偶廟書「十通」 之「三通」		（68）二句偶廟書 周穆王 達磨聖徳太子 「外に（69）二句偶伝授血 脈並十如是大事あり」	（15）二句偶参		
143	一、卵形之血脈并参禅有 之「三通」	（15）仏祖正伝正法眼 藏血脈	（62）太陽卵形晃耀図断紙			
142	一、正法眼藏血脈					
141	一、誰之図大事		（102）誰図大事黒円			
140	一、晦朔弦望之図切紙		（123）晦朔弦印切紙 月図			
139	一、十宗之弁別					
138	一、銀錢馬形之秘書		（74）銀錢馬形切紙			
		（40）身心脱落	（89）脱落身心 初・あ り」			

166	一、三国伝灯切紙					
165	別鉈切紙					
164	一、三国流伝書		(12) 三国流伝之図			
163	一、続松秘要	(53) 続松秘要参 「外に(54)続松切紙あり」	(54) 続松截紙(従永平寺室中直伝、普満韶堂所持)	(29) 続松之切紙、		
162	切紙 一、銀相(箱力)鎖子之	(44) 銀箱鎖子之切紙	(77) 銀箱鎖子切紙	(40) 太陽玄銀箱鎖子		
161	一、諸仏影像抜精之一紙					
160	一、無之切紙「二通」	(38) 無之切紙				
159	一、参禅掃地之切紙「二通」					
158	一、三宝印之大事「二通」	(8) 三宝印(嗣法之印籠相伝時之一紙) (9) 三宝印之大事	(79) 三宝印切紙 (80) 三宝印大事			
157	一、十智同真	(114) 十智同真切紙				
156	一、太陽真贊	(22) 太陽真贊参話				
155	一、洞山价尊像					
154	一、林蔭三句切紙	(83) 臨濟三句切紙				
153	一、頂相之大事					
152	一、大善知識頂上之達切紙	(47) 大善知識頂上三世了達圓滿一・切紙				
151	一、福田衣	(32) 福田衣之参	(72) 福田衣切紙(従永平寺室中直伝、普満韶堂所持)			

駒澤大学図書館所蔵『室中切紙謄写』

室中切紙写

(1) 嗣法之儀軌 或八旦望礼類ト云 口傳授大事

一、疊安 嗣書ヲ疊テ安置スル事也、

一、同九 師弟共ニ同時ニ九拜之事也、

一、六三 六拜・三拜ニスレバ九拜ニ當ルベシ、

一、奇拜 奇ハ異也、不偶、非常之拜ノ意ニシ、

一、豎繼 座員ヲ豎ニ繼、座員ノ端ヲ重テ繼、

・當九拜、師弟共ニ礼ニスルヲ奇拜ト云也、(1オ)

一、横繼 座員ヲ横ニ繼、座員ノ長ヲ重テ繼、

一、無住拜 尽期モ無ク拜スルヲ云、今ハ二十五拜ニスレバ、

師命住、

一、六膝行 六ハ六拜也、膝行ノ意、七重ノ膝ヲ八重ニ折ル意

也、

一、資 弟子之事、

一、法嗣 井傳戒之料綱ハ六尺二寸也、刀尺ニ定、恭敬之心、

端ノ長キハ、尊重ト口傳、是ハ摩頂之儀式之導場、

(1ウ)

図(1) 嗣法儀軌

道場
莊嚴
之圖

東
不
燈
松
書
花
西

石永平九世光紹花押

(2) 嗣法論 文字前後不穩當 天童如淨與道元問

答 文段不分明、下巻論ト可ニ合看、下巻有レ之

能、

曹洞家天童如淨律師道元和尚嗣法論

師問、如何は一箇ノ柱杖、元云、人々具足、師云、具足ニ看

元云、言語尽、元便立、師便礼、師又問、如何是露柱ノ一

句、元云、六根六具、師云、直^ニ具足^ス也、元云、答^ハ在^レ問處
 一、師云、道々、元便喝、師云、是何^ノ、元便拂袖^{シテ}去^リ、師
 云、如何是即心即佛、元云、鏡裡^ノ像、師云、(2ウ)如何是
 明鏡辺。元云、古鏡^ヲ磨^ク、師云、磨^ノ何^ノ處^ニ落^カ在^ス、元云、
 破鏡、師云、彼^ノ落處^ヲ道、元云、火中水、師云、其時節作
 麼生、元便^テ放身、師礼^ス、師又問、如何是一靈ノ真性、元云、
 電光智了^ノ劍、師云、在^レ何處、元云、正智得、師云、會處
 如何、元云、天地同根、万物一^ニ軌、師云、會^ス乎々々、元
 阿々大笑、師云、是誰人ノ章句^ノ、元立拜^ス、師座^ニ授^テ拄杖^一、
 師又問、(3オ)如何是龜毛ノ拂子、兔角拄杖、喚^テ何^ト道^ク、
 元云、世界怎麼^ニ廣、師云、其外指頭上在一言、一指拳直、
 道々、師又問、如何是拂子上ノ一句、元云、吾^レ在^ニ一言^一、
 師云、元言時授^ニ白拂子^ヲ、師又問、如何是三尺竹篋、元云、
 問話者^ハ喫^レ棒、師云、不怎麼時如何、元云、三日前五日後、
 師云、前後際斷時如何、元云、不會、師云、為甚麼不會、元
 云、唯為^レ不開、師便下座、而授^ニ(3ウ)竹篋^一畢、元九拜
 珍重、

右延文元年八月 ^(出カ) 正日在妙莊嚴院傳^レ之

永平住光紹叟

(3) 傳法之儀軌

敷座具、書嗣疏了、連了、其下^ニ師傳授之偈^ヲ、師之自筆^ニ
 燭 香 燭
 テ書入、年号日付判^シ了テ、嗣疏(4オ)ヲ疊セ、次儀
 花 軌・戒本ヲ傳授^シ了テ、儀軌・戒本ノ奥^ニ、年号・日

付・師号・在判也、次^ニ新礼席^ヲ展^テ、其上^ニ弟子ノ袈裟ヲ敷
 ク、裏^ヲ面^ニ敷也、其上^ニ和尚与弟子對座^{シテ}、九拜^ス、和尚
 合掌^シ、弟子三合掌^ス、和尚ノ一指ヲ以^テ、弟子ノ指ヲ按^テ
 曰、佛々祖々、授手相傳、只是々、云了、亦弟子ノ指ヲ以^テ、
 和尚ノ指ヲ按^テ曰、佛々祖々、授手相傳、只是々、云(4ウ)
 了、三拜^{シテ}跪座^ス、サテ、師、嗣疏ヲ弟子^ニ渡^ク、則再三頂戴
 而、胸ノ引合^ニ入^テ三拜^ス、次^ニ弟子、和尚ノ前^ニ跪坐^{スル}時、師
 法衣^ヲ以^テ捧^テ曰、此是曩祖大福田衣、今傳授^ス、廣度群生
 夜々莫令斷絶^ト唱了、弟子取、頂戴^シ了、傍置、三拜也、黃梅
 住持^ハ南面、弟子^ハ北面^ニ座^ス、此時^ハ、花松一本立也、(5オ)
 下草不可在之也、
 光紹叟花押

(4) 嗣書地絹之様子

受者名
新某甲

釋迦牟尼佛勃陀勃地 摩訶迦葉勃陀勃地

(5ウ)

圖相縱橫圖轉兒、無始無終、自在縱橫故也、即是云、蓮華法蓋也、佛祖命脈證契也、即通嗣書、如此可書、

通即 某甲 即通

御料梅花紋織様子、長六尺二寸、鷹計定也、織付花之紋之間、大槩如此、



(6才)



天童相傳

道元謹拜書

(5) 傳授前巡堂之次第

向諸堂祈念、無別事、生死事大、無常迅速、經咒者、任意也、巡堂了而、回向云、唯願沙門某 一七日^{トモ}ノ二七日^{トモ}ノ三七日^{トモ}之中、無難・無災・無難・無難、此願成就^{セントコトハ}、常為弘^{二海律}、令見^レ高人、永作^テ佛法棟梁^{トモ}與^三(6ウ)合山、清衆、同乘般若、船三者也、十方三世一切諸佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜、

生死事大、無常迅速、常可唱也、

是巡堂之儀式也

勅吉祥山永平二十六世萬照高國禪師

与建國主翁

(6) 佛布施之法

奉請過^(五七カ)「佛、五百文、機世歷代祖師、五百文(7才)

奉請護^(法蘭)「天善神、佛法棟梁白山妙理大權現、伊勢天照皇大神宮、稻荷大明神、當山鎮守、當境旺化靈神、當山土地、當山龍王等、總^テ五百文

畢竟宅貫五百文也、

考田切紙等^(可見)考田之大事^{ニモ}、以^レ五百金^ヲ作^二五葉蓮華^ヲ、奉^二然燈佛出世^ニ得^二授記^ヲトアリ、

与建國主翁(7ウ)

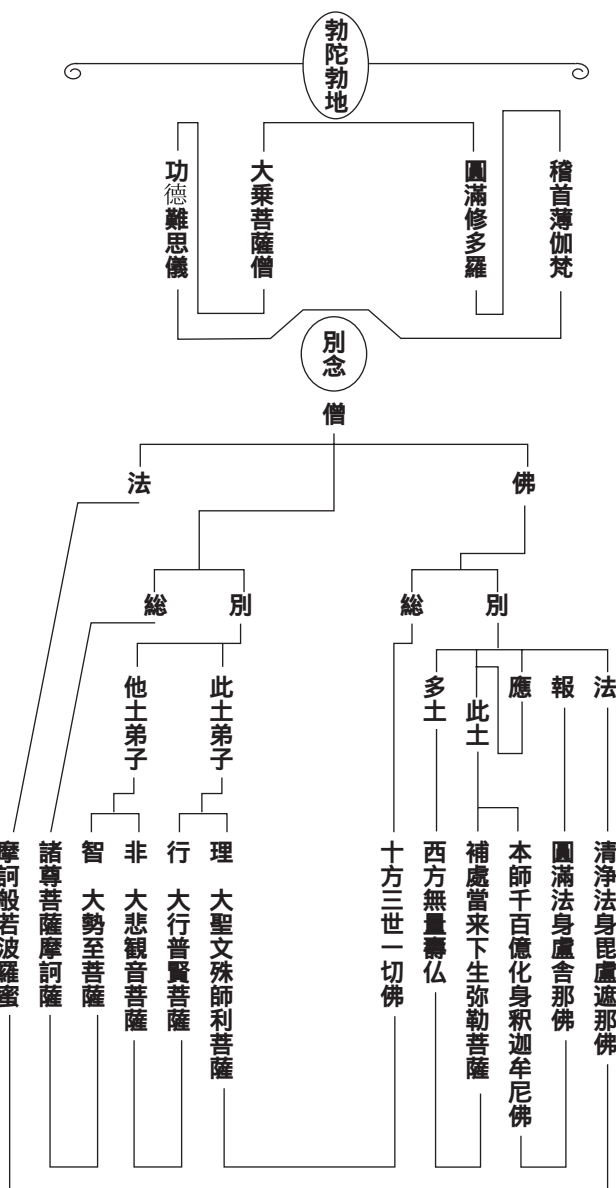
(7) 十佛名切紙

圖(3) 十佛名切紙



(7) 十佛名切紙

道安法師傳云、今僧食時取法現未及二士大弟子為十声餘
為々結句下、或八時之放數而、缺其不念過者

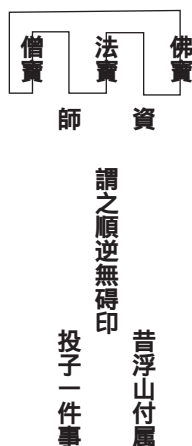


十佛名古來法師不詳出處、不二和訪之明国、亦未分曉拾返、安法
師、別錄待之、固 線石癸丑結制日比丘一度誌

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

(8) 三寶印 永明叟花押

嗣法之印籠相傳時之一紙



御州在判

附与 光紹老衲 花押 (8ウ)

(9) 三寶印大支

三寶印 印可之參

師云、三寶ヲ、代、佛法僧ヲ窮ルガ、宝テ走、師云、印可ヲ、代、師前ニ至テ云、和尚、大慈大悲哀愍、聴許ナラバ、印可シ玉ヘ、師右ノ手テ、學ノ頭ヲツカンテ、印判ヲツク模様ヲナシテ云、黄河從源頭濁了、汝能護持^セ、(9オ) 同印可參、師云、宝印ヲ、代、印判ヲ持スルノ模様ヲナシテ云、宝印當空妙、重々錦縫開、師云、言句^三不^レ渡空處ヲ、代、手開摸樣ヲナシテ云、開拳無^二一物^一、應用曾^ア不^レ欠、口傳云、印ヲツイテ不起シ、三皈依唱ヘテ、印ヲ起シサマニ、黄河從頭濁了ト云也、是縱橫無碍之印ト云也、三皈依、南無皈

依佛、南無皈依法、南無皈依僧^ズ (9ウ)

御州在判

附与 光紹老衲 花押

(10) 傳儀加行

兼日定日一七日

一、嗣書儀 勃陀勃地^{ト云者}、

成等正覺儀也、成等正覺^{ト者}、唯佛與佛之儀也、(10オ)

一、上連^リ結目終而始儀也、

一、迦葉師弟三人之名^{ノ者}、

師書處也、同連也、

一、嗣書之^{支者}、師之所書也、

一、始^ハ縱^ニ續^ニ、終^ハ橫^ニ續^ニ也、

永平住永明叟 花押 (10ウ)

(11) 面受之參

傳授三日已後之參

面受之參ヲ、代、資師^ニ向テ合掌シテ云、「^(アヲカ)」トウト、師云、其^實的句ヲ、代、十世古今始終不相離、師云、看經話ヲ、代、資、向師合掌^ッ云、南無佛陀耶、南無達磨耶、南無僧伽耶、南無觀世音菩薩、南無本師釈迦牟尼佛、(11オ) 第七十九世御州大和尚法乳之恩報シタテマツル、

〔釈〕⁽¹²⁾迦師 淨名老毘耶摩竭心相照 此句^{ナリ}朱書^ベ、

御州在判

附與 光紹老衲 花押

(12) 宗旨秘書

道元和尚大梅和尚夢見玉の白米

嗣書様、嗣法佛々祖々は證契即通也、單傳也、無上菩提也、不^レ到^レ佛陀佛地^一輩莫^一印證、佛々^(11ウ)祖々得^レ印證^一則無師獨悟也、又佛々祖々證契即通也、佛々祖々或令得皮肉骨髓^一嗣法、或法衣・應器・座具・宝瓶・拄杖・白拂・洒水器・松枝・續松^レ遺^一物授畢時、以^レ指血^一嗣書故名^一血脉云々、

嗣書様子 永平和尚在^一大宋國時、感^レ夢^(想)相^一、大梅法常禪師^{ヲホシキ}、覺^レ數在^一高僧、向^レ吾梅花一枝^(棒)、吾語云、若^チ越^一舩舷^一、實人成、莫^レ惜^一花、謂^テ与^一梅花^一夢^(12オ)相感、夢中吟云、未^レ跨^一舩舷時、好与三十棒、然^ル不^レ終^一機日^(オキ)、淨老云、元老既^一跨^一舩舷來、為^レ汝嗣書付与^一衣^(サル)仰出^一也、亦故^一曹洞宗旨之嗣書地^一、落地之梅花也、紋ノ白地也、長五尺也、表^一五智如來滿足十地也、忝^ニ試^一兼^一大梅和尚之教處矣、不思儀不可說々々、夢相符合^一間、道元和尚深信感而奉嗣書請也、然何元和尚、從^一大宋國^一皈朝時節、天童之路程在^(12ウ)大梅山護聖禪寺、彼寺元和和尚作^一宿夜半計^一、大梅祖師^ト覺^一老僧來即一枝梅花^(棒)与^レ吾、其梅花縱橫五尺餘、榮夢相

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

感、元和尚即觀而云、梅花是吾家之優曇華也、心花也、元和尚皈朝^リ后来、諸大祖師皆以嗣書奉^レ請^一之云々、四家嗣書^ハ異也、當頭和尚以四脉儀被^一嗣書^一、今則吾子參^レ吾不合、不^一嗣書相傳云々、今則可^レ知曹溪血氣、忝^モ青原淨血^(13オ)和合、青原淨血^ハ親曹溪淨血^一和合^一而以來面々印證即通也、非^レ餘祖及處、吾宗之佛祖正傳血脉之儀也、先師古佛堂^ニ和尚示云、諸佛必在嗣法云々、

于時仁治^一辛丑年三月廿七日於觀音道利興聖寶林禪寺、入宋傳法沙門道元記

寛元二年甲辰年二月二日懷并書之、

永明叟花押(14オ)

(13) 七佛傳授戒法之一枚書

心田之話
五相之圖

七佛嫡傳命脈心田之話

悟上參語^一而印心也、妙明之圖^一毛傳之、稱^一薄塵之大夏^一、

本地風光心田之境界、示曰、如何是本地風光、請一轉語、退云、廓而無際、心月孤圓^(盡十方一顯明珠)、如何是這箇一心、良久云、匹上不足、匹下有餘、示曰、這個心在^一甚麼處^一、良久云、一粒有^一荒田^一、不耕苗自秀、撈云、出處且得、如何是入處、良久云、一粒粟中藏世界、示云、(14オ)出處入處且得、如何是這箇田地、直下當胸叉手、撈云、正恁麼時如何、叉手^一云、豎窮三際、橫通十方、云曰、如^一是本分境界^一、良久云、一心一處座八万四千劫、撈云、既是心田之境界、為

甚麼隨三限量、乃云、行到水窮處、謂内大、外小、(半)座、視雲起時、撈云、畢竟一句道將來、退云、如淨琉璃中内、像、示曰、心田之分處如何得承當、振威一喝、撈云、時如何、展開兩手云、琉璃瓶破漿水(14ウ)逆、師云、善哉々々、乃九拜珍重、

五相之圖、洞谷和尚云、大極者、天地未分前也、元氣混而一也、謂之太初一レ大也、謂之妙明田地一也、是乃本地風光心地境界也、七佛相承大支也、云々、私云、天地未分之前混沌如鷄子云々、

一陰也、是心也、田也、紫微震輻綠苔封、天闕地軸、天ハ左旋地ハ右旋、自上見左旋也、自下見右轉也、

一陽也、是心也、田也、一也、縱橫妙展無私化、半夜一陽輝

記是同上、左展右轉仕君看、四方八面俱玲瓏、混沌初分、半夜天、(15オ)

陰也、混沌未分境界皆無色受、空生那畔地心、

・陽也、混沌初分界也、達者暗裡驚、混沌初分半夜天、

威音一箭射虛空、這个一箭者吾道、一以貫之哉云々、御判云、一者、心也、以天地万物、納吾之方寸丹田也、是一靈性也、貫者、始終以此一透徹、故曰、貫也、天地万物理一串穿却而不可殘境界、所以上ノ句云、一心一處座ハ、八万四千塵勞妄想、万物理一串貫通三千(15ウ)刹界、一草一木尽是以一靈之心性也矣、王道者、以忠恕之二句一貫而已、一心無私處、豈非一貫之心哉、

右是悟上得悟之參話也、於未徹者、夢々不可傳授、必可蒙天罰也、故先聖漫不許也、可秘々々、

永平住光紹叟 花押

(14) 二度傳授

獅子咬人時如何、答云、五老峰前、(16オ)師云、獅子咬樣於、學云、惡知惡逆咬尽而走、師云、其ハ何トテ、答云、大知之發スル末境デ走、師云、發處、此安山点倒露柱力叫ンデ走、師云、答話之機於、云、五老峰前ト喚起サ又已前デ走、師云、着話於、空劫已前更已前、

五老峰前之五編次第也(16ウ)

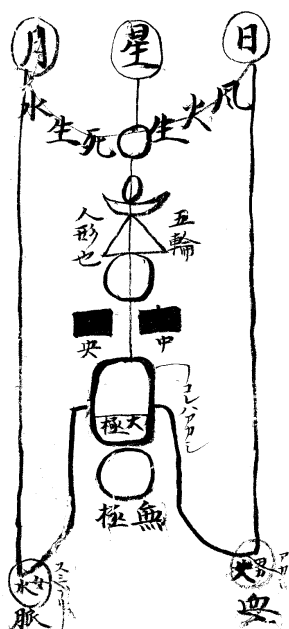
二度傳授是也

永平住永明叟 花押

(15) 佛祖正傳正法眼藏血脉(17オ)

三種大叟也、白山妙理權現、三也、月居処、日在、日居処、三、月在、星、今上當君也、日月無二也、日月無二父母也、無二也、一合二而三世諸佛出生代々榮也、

図(4) 佛祖正傳正法眼藏血脈



偏正・死活・明暗・目前・自己・四料簡・四喝・照用・五帝・八句・十八問・顯密・迷悟・凡聖・不出斯內・根本外・森羅万像悉在之、(17ウ)

(16) 嗣書袋圖 并抄字 竹簡 寸尺

嗣書袋之圖

一、豎之短四寸七分、是者、那邊至極不覺不知也、不識上之一句、那邊_{ニモ}不留、此大意、一氣之大極之点处、更不覺也、自_モ那邊_{ニモ}一重上也、是通也、此不識上一句也、

(18オ)

一、横長五寸二分、都自_{ニハ}兀上不足、兀下_{ニハ}餘有_{リト}云々、

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

サキヲ少シ圖、本ヲ一文字_ニ切也、

一、拂子之作法、一尺九寸八分、二尺_ニ不足、畢竟忌十成之儀也、

天童老和尚示和尚在判、

年号月日

永明叟 花押、

(17) 血脈袋之大支 又小狐トモ (18ウ)

血脈袋三者、小狐本也、其故者、稻荷大明神守護當家之佛法御誓願_ニ間、如是地者、赤地也、七重入候_ニ者、大小便不離身可_ニ懸申_一候也、無_ニ左様_一者、違不淨也、可恐不淨也、風呂之間、御供湯藥侍者御連候者、風呂之間、可為懸也、自餘不離身云々、

地絹者、六尺二寸 二長也、(19オ)

血脈袋長四寸七分、横三寸五分可作

為後代可添嗣書可秘々々

永平開山記之給也、永平住光紹叟 花押

(18) 住山之大支

重離圖



兼中到圖也

是住山之眼也、

(19オ)

傳後相續一大支因縁也

永明叟 花押

(19) 施餓鬼之切紙

施餓鬼焼香之次第

(一) 進前焼香而揖而無量壽佛之尊号^三低声唱云、

(二) 南無薩婆時、洒水之印在、大姆指屈四指^ラ立様子在之、

三、南無蘊噓婆耶時、開口之印、彈指三下、(20オ)

四、南無三曼哆時、飽滿^ノ印、五指^ヲ立、圓相^ヲ成^{コト}三相、

五、神咒加持之時、飯取加持、乾坤印而、

六、汝等鬼神咒之時、棚之外^ニ拋却^テ洗米、同支^ニ百味之飯

食、雖棚上^ニ備与^ニ不^ル加持^ニ者、諸之餓鬼見^レ炎、与不能食、依

之如是之作法在之者也、

永明叟 花押

(20) 御支^曹同^問(20ウ)

御守之祈禱之支、毎日可成之者也、

心經一卷、大悲呪咒一返、消^災神咒三返、合掌而南無嬌々相

承御血脈上段・中段・下段、洞家濟家祖師、只願沙門某佛宝

成就、法宝成就、僧宝成就、自利々他成就、法孫繁昌、身心

堅固、謹戒成就、災難消滅、檀信歸^(兼)諸縁吉利者十方

密、御守用心之支、

右毎月一度龍天、看經次、又ハ先師之日^ニ身心清淨^{シテ}(21オ)

於^ニ無^レ入室^ニ座具展其上^ニ守^ヲ開能々奉^レ見、切紙^ヲ一々

拝見^シ、佛祖^ノ恩難有、師恩難有、師不依爭如斯大支可^レ傳、

感淚流肝膽徹^シ可、如是致^{セバ}如何様之支^モ在^リ、^(母カ)失^{トモ}

空^ニ転^シナカラ調^ル羊^ニ覺也、此信心^ニ依^マ自然^ニ冥加至、出世可^レ來、

亦邪念惡心^モ消滅^シ、佛法增長、佛祖三宝^モ不招、守護加給

者也、只世支名利不折、佛法成就^ト一心志在^{レバ}、世福隨^レ分

在[、]予指南法孫、未來永劫如此一身可^レ為建立(21ウ)肝要

少^モ邪念惡心・破戒無慚之心在^{ラバ}、今生^ニ後生^ニ佛罰法罰

世々生々、無間地獄可墮、返々隙明^モ是迄^ト思不可、一切經

文字^{サエ}、一世^ニ成^ルマシキ、祖々先達^ノ諸話頭、本位終劫始劫

難窮、無智無能、亦世支万支不如意^ハ、先世修行拙^キ故也、悔

恨正直正法慈悲^ヲ本^{トシ}、時々能^クナルヲ善知識^ト知也、常^ニ行

住坐臥、拳手動足、是何物、出息入息甚麼物^ノ、常^ニ自性住^{セバ}

即佛体也、云々、(22オ)

永平住光紹叟 花押

(21) 道場莊嚴之圖

受^テ命之後、一七日^ノ間、諸堂焼香礼拜、三時無懈怠可勤也、

其余祈念勤行、須勇^猛猫^精進、當其夜黄昏^ノ以後、着淨衣具^ニ

威儀、及半夜^ノ潛^ニ上^ニ方丈^ニ、

道場莊嚴之樣

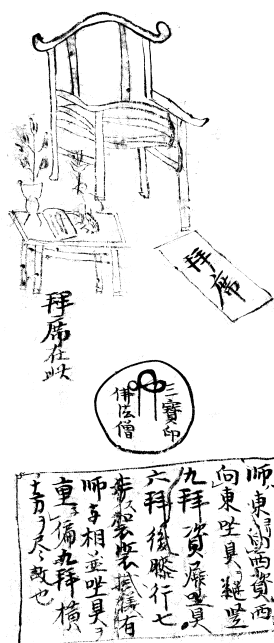
當正中之奥頭置卓一脚、卓衣打敷、須莊嚴之、其中央(22ウ)奉置祠書、西花東灯燭、花須松枝、同置之次、卓東當小南設椅、向西立之、又此卓小南設椅、向西南立之次也、入道場、師東椅之前向西而立、資在西向東、而向師進席端、問訊燒香、立互坐具與坐具、端須重之、資九拜、師乍立受拜、當九拜即共拜、是名奇拜、此時重坐具端者、豎極三世意也、次向中央安書之卓、師資同燒香、共展坐具九拜、此時拜九重坐具之(23オ)長、是橫三盡三十方意也、拜後收坐具問訊、次移於東、師移西椅、只懸腰垂兩脚而、次資進師席端、問訊燒香、展坐具六拜、師合掌受拜、六拜後、膝行七步而進師足下、此時有掛袈裟樣、次師順摩頂三遍、問、師云、從如來嫡々相承而到吾、吾今令授汝、々能護持而不令佛種斷絶、如是三唱、次又膝行七步而退身、直袈裟又三拜、都計九拜也、次(23ウ)師開祠書以燒松令見之、誦樣、授者名字、所能令見之、其後如血脈、授者胸襟、次道場則取、次至後朝、五更上方丈、到無住拜、捻言無住之拜、無師之命之裡、不知數量之拜、受命則住、言是無住拜、此書者、此時必為是也、今者只則此、縱雖一拜、蒙指揮即可住云々、御州在判

与光紹首座 花押

(24オ)

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

図(5) 道場莊嚴之圖



(圖の四角内)

「師東向、西、資、西向、東坐具、繼豎、九拜、資展坐具六拜、後膝行七步、袈裟掛樣有、師與相並坐具ヲ重偏、九拜、橫十萬ヲ尽故也、」(24ウ)

(22) 祠書袋圖 并佛・竹籠 寸尺

祠書袋之圖

一、豎之短四寸七分、是者那邊至極、不覺不知也、不識上之一句、那邊不留、此大意、一氣之大極、点処、更不覺也、自那邊一重上也、是通也、此不識上一句也、
一、橫長五寸二分、都而兀上不足、兀下餘有云々、

一、竹籠之本長、三尺二寸二分、竹之廣五分、四節二ツ(25)

オ)色黒、サキヲ少シ圓、本ヲ一文字二切也、

一、拂子之作法、一尺九寸九分、二寸二不足、畢竟忌十成之儀也、

天童老和尚示 在判

年号月日 永明叟 花押

(23) 竹篋切紙

元和尚拜問、竹篋謂者何^ニ哉、淨和尚答之、竹(25ウ)篋謂

者、南天竺竹峰山一大惡獅子^ニ在之、彼獅子之名謂^{ヘリ}篋破、

彼篋破欲^{スルコト}動^ニ輪^ニ驚^レ天動^ニ地食^ニ殺^ニ一切有情生類^ヲ數多

也、恭^ク釈尊回^{シテ}方便、親^ニ近^ニ彼篋破^ヲ御弟子^ヲ摩頂^ニ授^ニ

殺生戒^ニ給也、殺^ニ食^ル有情生類^ニ即^チ休^ム其時佛篋破^ヲ取^ニ

一毛^ニ名^フ竹篋^ヲ承^レ也、故竹峰山^ノ竹^ノ字、篋破^ヲ篋^ノ字、合^テ名^ス

竹篋^ニ也、故佛心宗者、常住不退、作^ニ隨身驚策^ニ故、邪魔外

道(26オ)魍魎鬼神毒蛇毒龍作^ニ怖畏^ニ、是則佛法守護神、你

善可^ニ護持^ニ、答、吾奉護持者也、

御州在判

附与光紹老衲畢 花押

(24) 遺戒之偈

子時當正、々者中、々者心也、

袈裟者、是表心衣也、故云以心傳也、(26ウ)

釈迦牟尼佛遺戒之偈、

如法修行、

正憶念、

皆是佛子云々、

正憶念者、夜半心也、

故夜半之云傳也、

此^ニ夏千佛之護持所、曩祖之傳來所、(27オ)

我今授汝、々從今身至佛身能護持、云々、

御州在判

附与 光紹老衲 花押

(25) 鎮守切紙

無業和尚曰、莫忘相、万法實相見、凡夫妄相、万法皆是無常

見、小乘妄相、万法上常見斷^ト見^ル、外道妄相、如幻即空見、

圖覺妄相、中道實相悟、菩薩妄相、(27ウ)教外別傳見、禪

魔之妄相、此外皆莫忘相見、亦是忘相故忘相、故一生道莫妄

相是、

●○○○卍心

逆順縱橫、無碍自在心、圓通大虛、三界唯一心、一圓空也、

師云、神之前^ヲ饒堂^ヲ、代、順^ニ廻^テ走、師云、諸佛如来^ノ前^ヲ、

(代)逆^ニ廻^テ走、佛心宗^デハ、地獄^ト出^テタガ、順^ニタゾ、逆^ニ

廻ル則シテ（28オ）（尾）来ト返スベシ畢竟一圓空一ニ

天地同根、万物一躰、莫妄想定也、

天童・如浄・道元・瑩山、嫡々相承而今到光紹 花押

(26) 五位之別紙亦五体五輪之圖(28ウ)

洞山悟本良价禪師五位別紙 道元御在判

●地、体、東、青、春、水、死中生 久遠現今時
 ●水、用、西、黃、夏、木、生中死 今時現久遠
 ●火、性、南、赤、土、火、現生現死 久遠今時出入
 ○風、相、北、白、秋、土、全中生 在今時
 ●空、中、黑、冬、金、全中死 現在久遠

△頭、偏正回互、疊作三、
 手 胸



○腹 脚変尽作五、重離六爻三三是也、疊作三三、離三三是也、

卦三、天地人、一(29オ)界、三毒、三宝、三順等是也、宗旨之三関立ルモ是也、変尽作五者、皆断三、已六

成ルソ、何トテ五疊田ゾ、ナレバ、一ツトハ、本卦也、本卦ヲ添レバ、時餘也、出一方、五体主也、出一方、主字也、

五臟・六腑也、五蘊・六識也、五行・六根也、五蘊六心也、五眼耳鼻舌身、六意也、六和合、五位皈一位、六爻三

是也、畢竟五位皈無位、此現形像也、是也、(△空)風「火」水「地」、五位是也、六爻三三、無縫塔、皈無位

トハ、五位ヲ掃蕩スルヲ無位ト名メ(29ウ)傳「法已後一人」外、不可着眼、熟不疑、混沌未分、未生已前、空々寂々、主人公未

出、父母未生已前、本来ノ空、無位、此地不證契、爭知無位、無性也、無心、無功也、無生死也、無影像也、

無佛相也、無根樹也、無上下也、無源也、無傳也、無入法也、無佛也、無天童也、無地獄也、無東西也、無体用也、無形相也、

無分別也、無五位也、無智慧也、無陰陽也、無君臣也、無父母也、無師也、無眷屬也、無方便也、無正也、(30オ)無妄想

也、無空也、無人也、無我也、無疑也、無欲也、無碍也、無兀也、無凡聖也、無因果也、無富貴也、無情愛也、無男女也、無

知音也、無情也、無望也、無破也、無前也、無後也、無人境也、無始終也、無六根也、無衆生也、無安樂也、無活計也、捨無

也、去社、無位疊來也、無位コソ本性空、畢竟無位、皈何処無位、在無一已前、此五位洞山大師、深密付道膺、新

住持嫡々相承而付「日本道元子」、此別紙(30ウ)不ハ相承、悟本之不レ可レ為「孫子」、畢竟無位如何坐禪良久。

洞山大師 雲居膺 同安道丕 同安觀志 大陽警玄

投子義青 丹靄子淳 長蘆清了 天童宗班 雪豆智鑑

天童如淨 永平道元 懷獎 寂圖

宗奭 門鶴 (31オ)

御州 光紹 花押

(27) 龍天授戒作法

室内^ヲ莊、門外^ニ可^レ置^ニ象香洒水器^ヲ、師^ノ椅子南^ニ向^テ可^レ立、棹一脚、花瓶・香炉・燭臺・拂子等可^レ置^ニ之、右^ノ棹坐具・五条・七条・九条・鉢・洒水器・散楊之松枝可^レ置、師^ノ前^ニ龍天安座、鳥居可^レ立、兩^ノ柱^ニ燈籠^ヲ可^レ懸、兩侍者出^ニ室内、請^{シテ}師^ヲ入^レ門、燒香而侍者拜席^ニ成^ニ三拜、侍者納^ニ拜席、師登^ニ椅子衣鉢^(31ウ)、棹椅子前^ニ立、並^ニ燭臺・棹^ヲ可^レ立、侍者可^レ出^レ門、師洒水器而散枝、竜天^ノ頂^ニ洒支^ニ三々、東西南北四維上下、洒水散枝、竜天^ノ頂^ニ洒支^ニ三々三摩、師燒香、坐具・授戒文如^レ常授了、師拍^ニ掌、侍者入^レ室、師向^ニ椅子燒香、兩侍者展^ニ坐具^ニ成^ニ九拜、師自^ニ椅子下^ニ入室、侍者引出、佛祖^ノ命脈證然^ト即通、又云、欲^レ見^レ戒者、以^レ鏡引^テ可^レ面^ヲ看^ニ不^レ可^レ藏、有^ニ若四足者、五戒礼如^レ常、若^ニ又鳥類者、可^レ有^ニ(32オ)二足五戒、礼如^レ常、次無足多足者、十戒可^レ授、礼如^レ常、是等^ノ戒、雖雖^レ變形、有^ニ向^ニ鏡看^ニ、現^ルコト

林下曹洞宗における相伝史料研究序説 (二) (飯塚)

本形^ヲ無^レ藏、可^ニ心鏡用^ニ、可^レ秘々々、不^レ可^ニ乱^ル流布^マ、今傳附既畢、

永明叟 花押

(28) 白蛇切紙

飯朝本則

永平傳云、初祖道元和尚入宋傳法飯朝^ノ時、於^ニ西海松中^ニ、天雪大降、俄有^ニ化身^ニ、謹現^ニ師前^ニ、師問云、你是什麼神答云、我^(32ウ)是護法善神也、號^{シテ}稱^ニ大宋國祠山正順照顯威德聖利大帝招寶七郎大權修利菩薩^ト、傳燈擁護靈神也、和尚已^ニ傳^ニ曹洞無上正法^ニ、今飯^ニ本國^ニ、我今為^ニ守^ニ護沙門佛法^ヲ相隨來也、師歡喜而言、善、然者、假^リ現^ニ小身^ヲ容^ニ衲^{シテ}吾袈裟袋中^ニ、即時^ニ神滅^ニ三寸計^ヲ作^ニ白蛇^ニ而入^ニ囊中^ニ、松中^ノ衆驚^ニ耳目^ニ、信感無窮、自^レ余以來、於^ニ日本寺院^ニ、建立^ニ處々^ニ、稱^ニ崇玉神^ト、又有^ニ初祖傳戒之二十二社^ニ、分^ニ與吾朝^ニ、天地便是^(33オ)護法龍天善神也、大^ニ感^ニ應^{スル}見孫^ノ榮^ニ靈驗也、

本朝古書曰、二十二社、喜哉、所々定^ニ十六社^ニ、所謂伊勢石清^(イシノミヅ)・賀茂^(カモ)・松尾^(マツオ)・平野^(ヘノ)・稻荷^(イナリ)・春日^(カスガ)・大原^(オホハラ)・天神^(カミ)・地立^(チタテ)・石上^(イソノカミ)・大和^(ヤマト)・廣瀨^(ヒロセ)・龍田^(リウテン)・住吉^(ズキ)・丹生^(ニウ)・貴布祢^(キフネ)、中其后代々聖主吉田・梅宮・祇園・北野・日吉等号二十二社、然則、永平開山傳法后、有^ニ巡^ニ礼神林^ニ看經^ス云々、

永平永明叟 花押 (33ウ)

(29) 安座点眼

威音如来、昔、本師釈迦牟尼佛、摩訶迦葉尊者、西天東土之祖師、嫡々相承而至三童師^ミ、天童老師吾^レ無窮^ノ、則密^ニ授^テ而曰、歸^ニ日本^ニ後、許^ニ嗣法^ニ之弟子一人^ニ、莫^レ令^レ断^ニ絶宗門^ニ之一大支^マ、如来傳心之法樣也、殊^ニ迦文勒之三說、妙法蓮花經之五字、點眼安座之參禪、非^ニ透徹^ノ人^ニ、可^レ難^レ會^レ之、忝^モ如来正法直傳(34オ)旨也、吾今許^ニ懷并首座^ニ、勿^レ令^レ断^ニ絶宗門^ニ之一大支^マ云々、以^ニ妙法蓮花經之五字^ニ、法花二十八品之最初^ニ置^レハ之、佛子皆此心地之妙法^ヲ觸^レ口^ニ為^レ令^ニ覺^レ了^ノ也、故大乘^ノ宗^ト謂^レ之也、十方佛土中、唯^ニ有^ニ一乘^ノ法^ニ、無^ニ二^ノ無^ニ三^ノ、十方佛土中者、衆生之心地也、一乘法者、一心也、名^ニ此^ノ大乗^ト、此^ノ一心^ニ無^ニ邊際^ノ故^ニ、名^ニ大菩薩^ト、此^ノ心^ニ無^ニ色相^ノ故^ニ、名^ニ摩訶薩^ト、一切諸佛菩薩之名相^ハ、(34ウ)皆心性^ノ異名也、獅子^ノ寶座^ニ蓮花座^ニ莊嚴^ノ奉^ニ佛^ヲ安座^ス、靈山之後^ハ於^ニ溪川^ニ、洞優婆羅樹^ノ窟裡^ニ、前^ニ釈迦未^レ出[、]後^ニ弥勒未^レ現[、]威音王未^レ曉^ノ間^ニ、世尊先金相^ノ獅子^ニ臥^シ給^フ、心大忽發而如来微笑[、]金身現^シ給^フ、此^ノ故^ニ莊^ニ嚴^ノ獅子^ノ之寶座^マ、其上^ニ安^ニ蓮花座^ニ、蓮花座^ニ上^ニ奉^ニ安^ニ置^ニ如来^ヲ、點眼安座^後、將^ニ燈燭瓶供物^ヲ、莊^ニ嚴^ノ佛前^ヲ諷^ニ演^{スル}ハ楞嚴神咒[、]此咒一切之咒母^{タルカ}故^ニ上^ニ來用^レ之[、](35オ)

筆^ノ臺之中當^ニ硯^ヲ致[、]新^キ筆^ヲ對^ニ量^ノ右^ノ之方^ニ、新^キ墨^ヲ挺^ニ置^ニ左^ノ之方^ニ、墨^ハ兼^ニ而可^レ磨^レ之[、]導師不^レ經^ニ左右^ヲ、裏面^ニ至^ニ佛

前^ニ燒香而染^メ筆^ヲ左^リノ眼珠^ニ指^テ當^テ云々、威勢^ト兼^ニ愛相^ニ、慈眼視衆生、福聚海無量^ト三度^ニ宛九度^ニ每^レ度染^レ筆^ヲ也、其^ノ筆^ヲ置^ク硯^ノ之左^ノ方^ニ也、亦^ハ片^{カタ}筆^ヲ染^テ軸^ヲ返^テ而佛之眉間^ノ白毫^ニ指^シ當^テ云々、一點^ノ水墨、其^ノ筆^ヲ返^テ而如^レ前^ノ右^ノ眼^ヲ指^シ云、兩處^ニ化^ス龍^ト、兩處^ノ龍^ト者、(35ウ)是威勢^ト兼^ニ愛相^ニ也、然而退^ニ佛^ノ前[、]登^ニ椅子^ニ向^テ佛^ニ安座^ス而云々、威音如来、昔、莊^ニ嚴^ノ獅子^ノ寶座^マ、宝座上^ニ安^ニ座^ニ法花^ニ全身^ヲ、作^ニ麼生^ニ是安座^ニ、一分奉^ニ釈迦牟尼佛^ニ、一分奉^ニ次^ニ住持安座^ニ、以大円覺、佛子住^ニ此^ノ地^ニ、為^ニ我^ノ伽藍^ニ、即是佛受用、心身安居、常^ニ在^ニ於^ニ其中^ニ、平等性智、經行若座臥次^ニ、衆僧安座、我^ハ是^ニ誰^ノ、父母未^レ前^ニ已^レ前[、]如来^ノ面目^ヲ道^レ了^而(36オ)一円相中^ニ一^ノ座^ニ畢^テ即^チ立^ツ也、

第一如来兩眼 第二如来開眼
第三如来点眼 第四如来安座
第五家安座 第六住持安座
第七衆生安居 末々ニテハ、是ヲ口^ニ書^ク也、

師云、佛兩眼之定ヲ、代、佛眼^ト法眼^トデ走、師云、佛眼法眼トハ、何^ニ力^ニ現^ニジタソ^ノ、代、以^ニ一^ノ指^ヲ師^ノ眉間^ヲ指^シ(36ウ)ツメテ云、一點^ノ水墨、即^チ師^ノ指^ヲ兩眼^ヲ而云、兩處^ニ化^ス龍^ト、師云、開眼シヤウヲ、代、兩手^ヲ展開悠然^ト半目^ニ而座^ス、意^ハ深^ク雜念^ヲ嫌^ハ、半眼^ニシテ悠然^トシテ座^シタ處、即是如来安座微妙之相也、師云、安座^ヲ參^ヲ獅子^ノ宝座^ヲ莊嚴シタガ、

何_レト蓮花_ニ安座スルゾ、代、法花之全身_ヲ安座セシメンタ
メデ走、師云、法花_トハ、何_レノ佛_ヲノ御名_ヲ申スゾ、代、心
佛之總名_ヲ走、(37オ) 即_チ速礼三拜而退也、此、儀規一々頂
戴傳授畢、三年之内待_ニ師命哀慙聽許_ヲ云々、

雨爛却了也、

故改之也、 萬照高國叟

(30) 開眼点眼切紙 并塔婆点眼 上卷之内 卷シ、

諸佛_并塔婆開眼供養之作法 (37ウ)

先洗米_二盥_一、灯明_二灯_一、華_二双_一、香爐_一、新筆_一、墨_一、筆_一取、
墨_ヲ左廻_ノ摺_リ、筆左廻_テ染_テ、左_ノ眼_ノ心_ニ推當念云、慈眼
量_ト三返唱、左_ノ方_ニ花寄立、火_ヲ左_ヘ寄、香_ヲ燒、佛眼押當、
慈眼 量_ト三返唱、又右_ノ筆_ヲ取_リ、上同_クスル也、其後供物何
能_レ々可_レ供也、サテ焼香偈曰、佛法興隆、子孫繁昌、福壽增
長、災難不障、吉祥如意、急々如律々、七難即滅、七福即生、
(38オ) 乾元亨利貞_ト三返唱、指_三以香取、左廻三度可_レ燒
也、

一念座禪肝要也、 点眼之後ノ立也 筆墨八不入也 口傳在之

塔婆_ヲ書_マ、衣之袖之内_ニ筆拈、法報應_ノ三身_ヲ具足_ン走_ト三返唱、
又筆_ヲ以指當曰、如来應供正 天人世尊_{名入}口傳在之
同參、筆染一圓相作念云、宗門奥書是也、(38ウ)

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

石木佛陀何_レ如是、一念肝要也、
亦塔婆立時唱偈曰、以大圓覺 身心 智_{可唱立也}

永明叟 花押

(31) 山神授戒 白山也 學下關アリ

從佛祖相承來、如淨授道元儀式 如此也、
拜問、白山授戒之儀如何、示曰、若有山神有_レ望_ニ受戒等_ヲ者、
先茅屋一字拜殿_ニ、幣帛莊_ニ、カサリ香花灯米 (39オ) 備_ニ供物_一、
神前_ニ安座而、其山神化形三相_ヲ現來待_マ、可_レ授_ニ戒血脈_一、儀
式如勝也、

某甲 受者各勃陀勃地

釈迦牟尼佛勃陀勃地 摩訶迦葉勃陀勃地嫡々

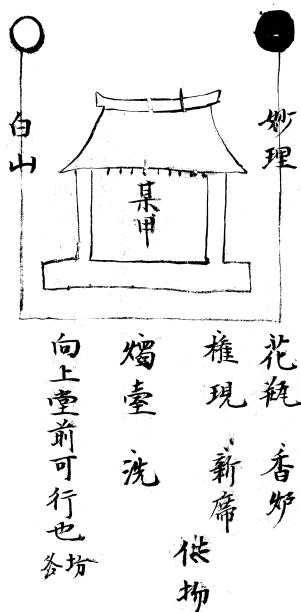
佛祖命脈證契某甲通即 即通

圓相縱橫圓轉兒、無始無終自在縱橫故也、即是蓮華法蓋嗣書、
如斯書也、(39ウ)

御料花紋織地如常 長六尺一寸也、

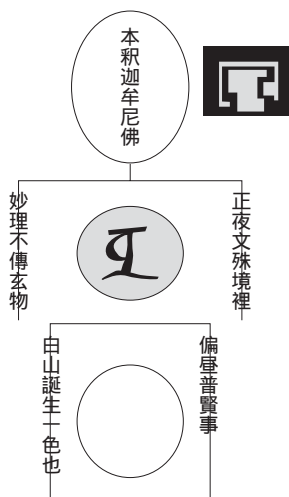
図(7) 山神受戒

(40才)



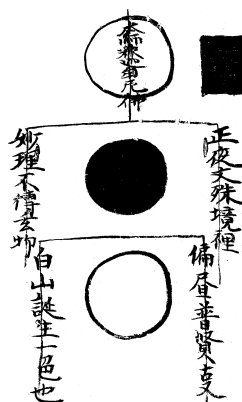
永明雙 花押

(32) 白山妙理大権現切紙



(図(8) 参照)

図(8) 白山妙理大権現



白山誕生一色、妙理不傳玄物也、不傳玄物、不露也、亦主、大権現空劫已前、今時却來也、唯佛與佛八、至覺本覺之夏也、乃能窮尽八、畢竟始末不二之処也、猶口傳在之

從天童如淨道元和和尚法傳、嫡々相承而今到光紹 花押(40ウ)

(33) 山門切紙 下卷ノ内ニ有之ト小異アリ

山門三門、心得者、空ト云、此圖也、無相門ト云、此圖也、無作門ト云、是也、呈也、空門、山門ト云八、無極之処也、呈、陰陽ト分レ又已前也、過去体也、無相門ト云八、大極也、無作門ト云八、未來也、陰陽ト引發処也、故二此圖也、天地、空、天地空、此三形ヲ取テ山

門トモ、山門トモ云也、此利^ラ以^マ、寺院ニ山号ヲ名付ル也、畢竟此根本本原也、

此圖相中ニ字^ヲ書タ本モアリ、(41オ)

釈迦牟尼如来

南無皈依佛

南無皈依佛

南無皈依法

南無皈依僧

天上天下是也

附与

光紹老衲

歳号月日

印 花押 (41ウ)

(34) 山門法衣之大夏

法衣傳授之時參話

夫以^レ佛々祖々相承之法衣者、譬^ハ大師釈尊、迦葉^ニ法衣^ヲ御渡給^ヰ、此法衣^ト謂^ハ、八万四千条御袈裟也、御袈裟授^ニ迦葉^ニ給時、淚流給、名^テ曰^ク「發露涕泣衣」、彼御袈裟者、在^ニ母胎内^ニ時、此袈裟^ニ八万四千之毛^ヲ竅^ヲ、骨肉共^ニ一^ニ漏^ヲ、此袈裟之内^ニ被^ニ裹^レ、不^レ得^レ犯^ニ一^ニ塵^ヲ一^ニ法^ヲ、是名^テ曰^ク「衣衲」、亦此御袈裟曰^ク「佛祖不傳衣」、又曰^ク「(42オ) 九条」、是即父母未生已前、本来無縫之真衣也、生来已前之紫極宮中是也、烏抱^レ卵是在^ニ此中^ニ、纔借^ニ地水火風^ヲ、又木火土金水具足者也、烏者紫極宮主也、吾宗之密語密處也、人々須^ニ參得^ヲ頂^ニ戴^ニ法

林下曹洞宗における相伝史料研究序説 (二) (飯塚)

衣^ヲ者也、師問學人云、倒騎^ニ佛殿^ニ出^ニ山門^ニ時如何、代云、自可^ニ參得^ヲ、又問云、倒^ニ意如何、學人云、欲^ニ出来^ニ時、此内^ヲ転却^ス時節也、師云、山門^トハ、出生處門也、(42ウ) 是^ヲ名^テ曰^ク「玉闌」、又問、出後如何、學人云、法堂上草深^ニ一丈^ヲ、又問、意旨如何、學人云、哆々嘲々、師云、法堂上者、產出土也、又草深^ニ一丈^ヲ、產時、展兩手、何物^デ取付啼^ク、是^ヲ云也、此声譬^ニ天地^ニ也、是清淨本然無相^ノ說法也、又亦無相杖拂也、故^ニ生土^ヲ名^ニ法堂^ニ、今号^ニ法衣^ニ一^ニ支^ヲ、是^ヲ表也、然聞、法衣染^ニ紫色^ニ、是^ノ色紫上也、

正嫡一人相承畢、(43オ)

天童如淨老禅師傳附道元和尚畢

永明叟 花押

(35) 米門之切紙

主位者、松也、是壽命也、主位者、梅也、梅^ハ愛敬也、佛殿四庭栽木之支^ニ米門^ニ

客位者、椿也、椿^ハ福德也、客位者、牡丹也、丹^ハ威勢也、(44ウ)

同參禅在リ、師云、西之花ヲ、代、明然タル威儀^ヲ走、師云、東之花ヲ、代、草花^ヲ走、師云、北之花ヲ、代、空花^ヲ走、師云、南之花ヲ、代、總之始終^ヲ走、師云、名^ニ二字ヲ、代、形祝星^ヲ走、師云、下之字ヲ、代、凡心塵下^ヲ走、師云、

二字之畢竟ヲ、代、不落不昧、師云、客殿ヲ、代、首_レテ走、
師云、佛殿ヲ、代、胸_レテ走、師云、山門ヲ、代、開_レテ走、師
云、庫裡ヲ、代、右手_レテ走、師云、僧堂ヲ、代、左手_レテ走、
(45オ) 師云、風呂淨頭ヲ、代、両脚_レテ走、

佛戒寶

青紙・黃紙・赤紙・白紙・黒紙・五色之紙書之也、白赤之三
枚者、廣同、青黃黒三枚ハ同廣也、代々如是流布來也、

永明叟 花押(45ウ)

(36) 消_災咒之記文并一返消_災咒之切紙

消_災咒記文

藏經消災咒之記文、排當天之星
辰可_レ行拜者

曩謨三滿多

過去現在未來之諸仏也、

母駄喃

清淨法身毘盧舍那仏之名号也、

阿鉢羅底

盧舍那仏也、

賀多舍

不動明王也、

婆曩喃

釈迦文佛也、(46オ)

怛姪佉唵

一切鬼神聞_レ唵之字悉皆
合掌_{シテ}受_レ仏言也、

佉々佉々々々

文殊師利菩薩也、

吽々

二十八宿・七曜・九曜也、

入嚩囉々々々

大通智勝仏、同眷屬等也、

嚩囉入嚩囉々々々々々々 彌勒仏同眷屬也、

底瑟吒々々々

八万四千金剛神之名号也

瑟至哩々々々々 金剛菩薩同眷屬也、(46ウ)

婆發吒々々々

四天王同眷屬也、

扇底迦

妙吉祥菩薩名号也、

室哩曳

熾盛光王仏之名号也、

婆娑寶

一返消_災咒之時、那行那歩之大支口傳也、

伏_ニ以_レ有_ニ三世諸仏之加護_一、四時八難悉_ク消滅、常_ニ誦_ニ此咒_一、諸天擁護、功德無量、吉祥如意、是_レ故_ニ日々三度向_ニ(47オ) 東西南北_一各々誦_ル可_ニ一返_一、念念不捨、可_レ誦可_レ誦、
淨和尚附元和尚而嫡々相承今猶如此、

私_ニ云_一、那行那歩_ハ、此步行_ト云_レ心也、消_災咒之步行_ハ、七字圖成

卍字_ト巡_ル也、七難即滅、七福即生、一圖卍字也、

一返消_災咒切紙

先當胸合掌_{シテ}身心一如ノ相ヲナシ、向_ニ仏前_一南無消_災熾盛光
王如來_ト念_フ、光明灌頂ノ相ヲ存_{シテ}、怛姪佉(47ウ) 唵_ノ処_ニテ、
維那ノ小聲_一声ヲ聞_テ、左足_{ヨリ}進_ンテ卓前_ニ至_リ、吽々ノ処_ニテ、
右足_ニテ蹈_ミ止マレバ、左右合_フ十二歩_{ナリ}、卓前_ニテ香ヲ拈_{シテ}
炉_ニ向_ツテ一圓相ヲ打_ン焼香_{シテ}、嚩囉入嚩囉_ノ処_ニテ轉身_ノ外_ニ向_キ
底瑟吒々々々ノ処_ニテ、左足_{ヨリ}進_ンテ本位_ニ皈_リ、婆發吒
々々々ノ処_ニテ、右足_ニテ蹈_ミ止マリ、扇底迦ノ処_ニテ、轉身_ノ
仏前_ニ向_キ合掌ノ手_ヲ以_テ、一圓相ヲナシテヨミ收_ル也、如_レ前
進_テ本位_ニ皈_{レバ}、往來ノ間自然_ニ(48オ) 一圓相_ニナル_{ベシ}、焼香

ノ時ノ圖相ト収メ派ノ圖相ト共ニ三圖相ヲ得テ心ノ三点ヲ表ス
進モ十二歩、皈モ十二歩、流轉還滅ノ二種ノ十二因縁ノ数ニ當ル
也、全體現前シ、尽十方遍法界、一時ニ光明三昧ノ中ニ圖撰シ、
消災吉祥ノ功德ヲ蒙ラシムル者、是一返一心ノ然ラシムル也、慳
重ノ想ヲナスベシ、輕忽ノ念ヲ存スルナカレ、嫡々相承而永平
室中今尚如此、(48ウ)

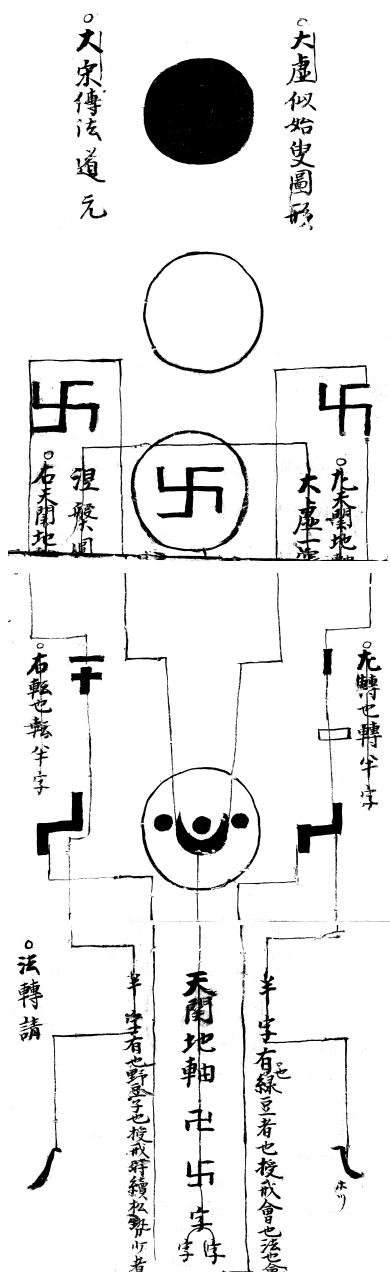
承天手書置之 花押

(37) 卍字之切紙

■上大同少異而一本也

勃陀勃地者、言佛悟司位之謂也、又不翻語譯詞歟、又至九位也、言接無位真人出、傳法之時、膝行・合血、亦曰、授戒道場之中、鼻音^{ハナ}匿^{カク}、籊也、カクス、ヒキシ 讀在也、亦曰撰戒也、曰^マ夏^ウ在也、

図(9) 卍字之切紙



戒

佛偈說故曰、見宝塔品曰、從地涌出、住在虛空中、曰、言警出從虛空、凡聖一味相授也、一戒、中授十戒、亦十戒授九
佛嫡々祖々相傳嗣法、是證契故、無上菩提心、最初發心時、彼一念功德、深廣無涯際、如來分別、而^モ末世^ノ為^ニ兒孫、圖形
夏如是、怪服者、紫伽梨也、(50ウ)

○有魚

○本魚

○不魚

本年端坐不煩正當也。至道無難也。至者至極道者道体到底也。難者此受世傳明星一見悟道也。體內之入流也。向上之入路也。入流之不見家也。呈出無也。大難也。無極也。空勢也。究竟卒之內院也。本心之性也。非有非無處也。

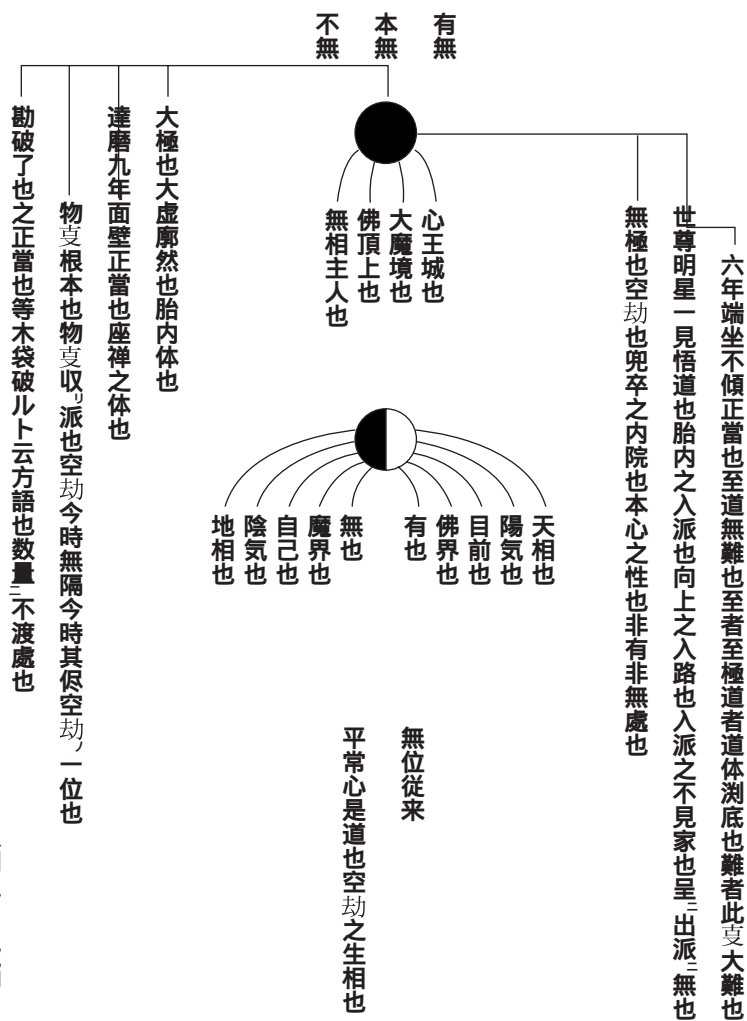
心王城也
 本無境界也
 佛頂上也
 無相本也

天相也
 陽氣也
 目前也
 佛界也
 有也
 無也
 自界也
 自記也
 陰相也
 地相也

○無位從來流出万端者也
 ○平常心是道也。空却之生相也

大極也大虛廓然也。胎因体也。
 達九年而證正當也。座禪之体也。
 物受根本也。物受収り流也。空却今時無隔今時其低空却一悟也。
 動破了也。正當也。草木袋破也。或方證也。數量不渡處也。

（39）無之切紙



(39) (40) 四句文之切紙

永平和尚夜半流傳

四句文切紙

諸行無常 是生滅法

今時之相ハ、幻代也、要ラ尽シテ大極ニ到ル也

心 釋迦牟尼佛大和尚

生滅々已 寂滅爲樂

是ハ無極也、大極ヲ尽ノ此ノ地ニ到ル也、

(51ウ)

上足一人傳附單

于時仁治^主年月日

天童如淨老師傳附元和尚

永平傳法念九世光紹雙

花押

(40) 身心落脫

二代和尚
重壽也

二代曰、永平門下有二三脫落之話、蓋是開山和尚在天童時悟處也、(52オ)

● 如何是身心脫落處

◎ 如何是脫落身心處

如何是脫落々々處

此三句者、只是一句也、一句^モ亦無可參、尚不獲已、某甲註

林下曹洞宗における相伝史料研究序説(二)(飯塚)

破了也、所謂脫偏曰「凡身、落、正、黑、聖之處、半白半黑也、謂之転凡入聖之一句」、不^レ可^レ下無^二如^レ是分^一大休大歇去也、次脱^ハ聖、身、外邊白、落^ハ本、中間ノ黑處、外邊白、中黑也、(52ウ)謂之転功就位一句、可^レ怎麼會取、深透深徹去也、上下内外全分黑底處、脫落^ハ鳥^ニ鴛^ニ豈^ニ漆^ニ樋^ニ乎、離^二四句^一絶^二百非^一、直下無第二人、●◎ 不同五位君臣之圈児、聽^ハ奇分^ハ和合^ハ私^ハ黑處也、不可備本洞家玄奧宗旨^{ズイ}、恐屬流布、滅^二却^一吾宗、可秘々々、

永明雙 花押

(41) 竹篋拄麈尾參話^并注脚(53オ)

竹篋

坐^ニ和

和尚云、突出難弁、掘地深埋、



如何是竹篋、三尺黑蛇眠暗室、又云、隨機動搖、從來未露、右這箇黑蛇長「三尺也、通三世」、三世「佛宛有法報應、三身是也、如來之通處也、其三世諸佛爲惡業煩惱者、爲二百億分身也、具^ニ物々^一爲^レ性、或^ハ佛性心地之如來座^ニ方寸丹田^ニ也、飛花落葉無常生死之道理也、自說他說之支^一回隨^二草裡漢^一接物利生、謂^二之竹篋之心行^一也、箇竹篋者、心有則^ハ毒蛇也、(53ウ)心無則^ハ自己也、元來草裡^ニ爲^レ主、故落草漢^ト云也、竹篋之本意者、三尺之中^ニ有三節也、此三節^ハ三世也、法報應化^ハ如來座給^レ也、竹篋^ハ者、作家手段、一着子也、拈來与^レ他^ニ時、全^ハ非^一我^ニ打^レスル^一、物々頭々、三

世諸仏打^シ給^フ也、故^ニ為^ニ慈悲竹箇^ト也、已^ニ喚^ベ竹箇^ト觸^ル、不^レ喚^ハ亦背^ク、喚^テ作^ス甚麼^ト、過去現在未來三世不可得、喚^シ不^レ作^ス是^レ竹箇^ト、即今請喚^テ作^ス什麼^ト、良久云、古殿沈々^ト全体不露、(54オ)

拄杖 堂山和尚 點^(號カ) 點 烏藤看、花向不萌枝上開、

図(14) 竹箇拄杖参話并註脚



如何是拄杖子、拈拄杖卓一下云、是箇拄杖子、便汝拄杖子作麼生呈^メ、放下拄杖、便良久云、即今是汝拄杖子也否、靈木超然^ト風無^ニ依倚^一、又云、乾坤道合^テ通^ニ無碍^一、右箇拄杖子者、上^ニ徹^ニ有頂天^一、下^ニ透^ニ金輪際^一也、然則^レバ(54ウ)如^ニ乾坤体中具^ニ足^{スルカ}三界之形山^ヲ也、又云、山形者、人々山形也、知^ニ得^シ箇^ニ山形^ヲ了^レ、是^レ契^ノ本分相應之理也、又鉄火^ハ、上^ニ有頂天之間^一忘相、當^ニ彼^ノ焰^ニ顛倒^{スル}也、又云、鉄子^ハ、下^ニ金輪水際之全体也^一、又孫枝^ハ、宗旨之孫子、無相^ニ而大地黑漫々^{ナルカ}故也、拄杖^ノ形体怎麼^{ナルカ}故云、拄杖子化成^テ竜^ト吞^ニ却乾坤^一了、云々、又云、拄杖子口傳、杖魂也、故^ニ打^ニ破^ニ是非之苦業^ヲ不^レ受也、又杖^ハ魄也、故^ニ為^ニ娑婆世界之主^ト、万劫千聖之間、一言無相^ニ而受^ニ三人^ハ(55オ)天供養也、然而世界黑漫々故^ニ、從^ニ拄杖子^ノ中^一來、

抑從^ニ拄杖子中^ノ來^ル者、這箇主中^ノ主^ノ道理也、主文受用底如何、左手^ニ得來^テ右手^ニ用^メ、左手^ハ指^ニ久遠^一也、右手^ハ今時却來也、久遠今時不^ニ相離^一、一箇^ノ拄杖往來也、

延文九年八月時正日在妙莊嚴院傳之韶碩在判于時元和九年霜月吉日先師書寫之本蟲滅^{スルカ}故^ニ今享保九年甲辰冬十一月二十一日現住永平勅賜大清撫國禪師承天叟則地手書置 花押(55ウ)

(42) 拂子

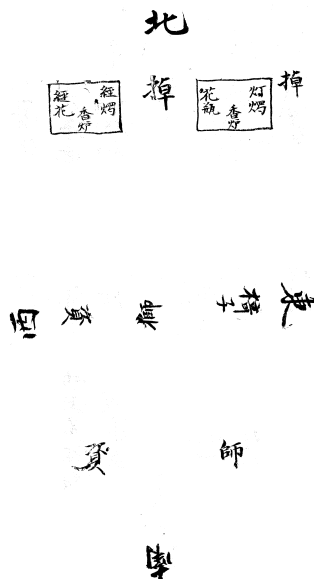
如何是一拂子、豎起拂子云、是須^ク妙手携來用、受用底作麼生、任^ニ手拈來着々親^メ、右箇^ノ拂子者、拈華之話也、拂子^ハ是五尺境界^ヲ表^ス、地水火風之四大也、此形体^ニ含^ニ虛空^一為主^ト、走^ニ東西南北^一、似^ニ万物拂^フ、雖^レ然未^レ在^ニ者^ノ、仏祖也、仏祖者、心中從^ニ外出來^一、從^ニ內出來^一可^キ非^ク、然則^レ号^ニ仏祖^ト來^ル、是這箇也、喻^レ我^ニ、縱^ハ雖^レ有^ニ外道^一、仏祖為^ニ人故^一、仏魔俱^ニ拂^ニ(56オ)時^ニ、一毛頭上^ニ納^メ乾坤^ヲ、此時又一毛^ノ中^ニ不^レ可^レ續^ニ滋味^一也、拂子柄上^ノ者、五鉢五輪也、三身圓滿^ニ而、如法如說^{ナル}故^ニ、妄想塵勞^ヲ不^レ得^レ納^メ、雖^レ沈^ニ淪生死^一、此^ノ五体生死^{ナルカ}故^ニ、風火水地皈^ニ箇^ニ中^一耳、在^ニ主者圓滿無際而成^ニ一息^一、是則本分自性也、是我本一息之氣、世尊拈華之也、不^レ可^レ謂^ニ常花^ト、本分自性也、花綻時、迦葉、心花亦綻也、世尊瞬目處、八万大衆終不^レ會、此^レ教云、為

禪也、亦時學者不可^(56ウ)習學、歷代仏祖如是也、然而何^レ可^レ唱^レ之、雖然拂子者、元來無面目拂也、祖仏本来一物上不留^レ蹤跡^ヲ、号^ニ拂子^ト、并^ニ向^テ拂柄頭上^ニ一句拂除了也、在我建立也、宗門^ノ拂子是也、可^レ秘^々々、有^ニ圖畧^ク、

永明叟 花押

(43) 多子塔前傳授之作法 (57オ)

図 (15) 多子塔前傳授之作法



(44) 銀箱鎖子之切紙

師云、銀箱鎖子ヲ、學、良久、一圓相ヲナス、師云、夫^レ何

林下曹洞宗における相伝史料研究序説 (二) (飯塚)

(57オ)

(45) 合封折角之切紙

一時^ニ救^フ二切萬有^ヲ

師 是ヨシ

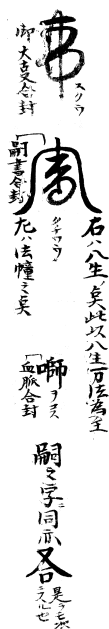


無始無終也、仏衆生之根本也、
毘婆居^ニ欠方、陽相横陰豎、
銀箱鎖子^ハ嗣書^ノ入^レタル箱也、

師云、付屬之偈、陽廣山頭草^ヲ、代、億劫之心^ニテ走、師云、夫^レ何^トテ、草^ニテ在^ルゾ、代、無法之法^ヲ花^ト作^ソ走、師云、憑君^ノ煅煉^シ羊^ヲ、代、坐^ニ禪^ス、師云、異、固^シ羊^ヲ、代、良久^ノ功不積宗不^レ妙、

(58ウ)

図(17) 合封折角之切紙



此ニ勃陀勃地之參在之

高国叟

合封之大事

人此、一レ口以飯ヲ喫フ命讀、此、一レ口ヲ以生命食トシ、續ニ一大支因縁ヲ、此以ニ一レ口ヲ転ニ無上大法輪、從ニ本師釈迦牟尼佛、(59オ) 今日新到某甲迄連授、代、黄河從源頭濁了也、師云、元和尚兩処ヨリツリ羊ヲ、代、左右逢源、師云、畢竟ヲ、代、總ニ在此中圖ナリ

合封之節角切紙

年号

吉舍喇

御大支 嗣書 血脈 合封

末山ニテハ如此モスル也 心ハ同

花押 (59ウ)

(46) 先師取骨之大事

先師之骨取、嗣法人渡、骨紙包上書付云、全体和尚之示寂如是云々、裡ニ年号日付書、紙一ト重ニ上包共ニ三枚也、

取骨之骨紙、遺棄作爲 末ニ納在之

吾附法弟子、

光紹和尚禪師、

佛祖通徹處、(60オ)

悉以印證畢、

于時年月日

時刻 以上七行ニ書者也、

永平傳法二十八世御州

寛文三庚辰 歲九月吉日

附与光紹老納 花押

(47) 廟移作法 (60ウ)

図(18) 廟移作法



廟移ス時、先ッ先祖ノ廟処無ケレバ、金神ノ方、或ハ死人ヲ可レ出方ヲ見デ、吉方ニ地ヲ取テ可レ移、其後テ前ノ基ヲバ平ゲ

(61オ)

深密々々、即事即真、不一不二、皆是了々不了々、只是一心而已、此外云八、外道之心也、(63ウ)

(49) 洞山門下牌塔相續之事

昔臨濟和尚證明、洛浦安禪師云、臨濟門下、一隻箭、當誰レ敢テ鋒ニ、雖然モ與麼、不レ續ニ其後跡マ、果而洞上ノ嫡孫繼ニ夾山善會和尚ニ而、枝々葉々無不レ「芬芳」、不レ熟ニ前因故乎、既ニ改ニ其源「皈」ヲ、今當派下ニ為レ極、以レ粵、知、機縁只在ニ極下ニ乎、悟本之正脈、續ニ存、太陽ノ本宗絶テ亦興、以此故、即截ニ斷嗣書地マ、繼ニ旗ヲ於(64オ)万代ニ令ニ繁茂ニ云々、

年号月日

氏名書判

資名書而

付与之、(64ウ)

(50) 非人亡者之支

圖形別紙ヨリ写取置

自家初テ世ノ其雜具等、衣裳・刀共送り捨マ、其身ヲ乞食ニ渡ス、弓絃ヲ以テ、男左、女右ノ腕纏リ、非人ニ渡シ、引動タル時キ、子ヲ不レ持者、後手ニ截ル也、其後截タル刃ニ身之代リヲ相添テ送ル時、文曰、因果業生、靈々除滅、尽未來際、直截根源、此文ヲ書キ、死人ニ可添、亦其出、門ノ塔下ニ可埋、其後人間ニ成引導可レ有レ之、(65オ)

(51) 天疵病之支

自レ我家風上ニ不レ置、居ル座敷ニ不レ居、盃ヲ不レ飲、平生如レ是、亦死去引導最大切也、又天蓋・幡何モ黒色ニ可レ致、此符ヲ書、引導、七日居タル座敷ニ可レ敷、其親兄弟共、此符ヲ百箇日間ハ不レ可レ捨、供養モ平人ニ替レテ、無ニ回向ニ可レ問也、下炬云、汝元來不レ生不レ滅、無レ男無レ母無ニ兄弟、此土自レ去不レ來、輪廻顛倒直斷絶、(65ウ)

永平現住永明叟

図(20) 天疵病之事

